真紅のバスタード

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真紅のバスタード

【Ｎコード】
Ｎ７２２５Ｏ

【作者名】
山口

【あらすじ】
「ここをクリックすると異世界に行けます」という広告バナーをクリックしたら、別の世界に飛ばされました。

異世界への旅立ち

高校から帰宅した俺は、自分の部屋でネットを閲覧していた。
見ているのは「小説を書こう」というサイトだ。素人が作った小説がずらりと掲載されており、画面の左側にはオンラインゲームの広告バナーがある。俺は小説を読むのとゲームをするのが好きで、他にはこれといって趣味もない。徹底的なインドア派だ。
画面の左側では、毎日違うゲームが宣伝されている。昨日は「最強ハーレム学園」、おとといは「ペンギン無双列伝」だったと思う。最強ハーレムはモテないオタクが変身して女の子をもてあそびまくるゲームで、ペンギン無双は環境破壊に怒り狂ったペンギンが人間をひたすらしばきまくるゲームだ。どっちも、やってみるとめちゃくちゃスカッとする。俺にとっては神ゲーだ。
ところが今日は、広告の部分がおかしい。真っ白な画面に一言書いてあるだけなのだ。文面は「クリックすると異世界に行けます」。なんだこりゃ、新手のワンクリック詐欺か？
俺は警戒しながらも、ついそれをクリックしてしまった。途端に周囲が光に包まれ、視界が真っ白になっていく。え、まさかガチで異世界にトリップすんのか。ありえないだろ普通……
気がつくと、俺は草原に倒れていた。やっぱり飛ばされたみたいだ。誰だ、俺にバシルーラかけやがったアホは。さっさと元の世界へ戻せ！
「くそっ、冗談だろ。ありえないぞこれ。どうしろっつーんだよ」
部屋でまったりとくつろいでいるところだったんで、何も持ってない。着ているのはTシャツとパンツとズボンだけ。これでいきなり違う世界に飛ばされて、普通に生きていけるならかなりのツワモノだ。
とにかくここにいてもしょうがない、帰る方法を探そう。適当に歩き始めると、前方からゴブリンの群れが駆けてきた。俺の腰くら

いまでしか身長がない小人で、目が鋭く口は裂け、上半身は裸で下半身には腰みのをまとっている。それだけならどうってこともないんだが、問題はこいつらが手斧や短剣を持ってることだ。こっちは丸腰だってのに、まいったねこりゃ。

「けけけ、人間だ！　殺せ殺せえ！」

先頭のゴブリンが短剣を振りかざして襲いかかってくる。バカ野郎、誰がお前みたいなザコキャラにやられるか。人間なめんな！

「うおおおらっ！」

俺は疾走して跳び上がり、奴の顔面に強烈なキックをかました。インドア派だからといって、別に運動音痴というわけでもない。このくらいは朝飯前だ。筋トレは毎日やってるしね。

蹴られたゴブリンが短剣をほうり出して倒れると、他の連中が斬りかかってきた。ちっ、十匹近くいやがる。いくらなんでもこれはきつい。

俺は一匹を殴り倒し、一匹を肘で突き飛ばし、一匹を回し蹴りで一発ＫＯした。なぜか体がやけに軽い。いつもよりずっと速く動ける。

まあそれはさておき、これ以上は無理だね。

俺はいきなり大声を出して奴らをすくみ上がらせてから、一目散に逃げ出した。さよなら、また会う日まで。連中は必死に追ってくるけど、短足の悲しさで追いつけない。はっはっは、ざまあ！

さて、どこへ行けばいいんだろう。お、前方に城壁が見える。とりあえずあそこに行ってみよう。こんなところで袋にされるのなんかごめんだしね。

「じゃーなー、あっははは！」

俺は、ゴブリンたちを振り切って全速力で街へ向かった。

街は俺の身長の五倍くらいある城壁に囲まれている。いわゆる城塞都市って奴だ。門の上には革の鎧を着た番兵が見える。どうせ言葉は通じないだろうな。でも、とりあえず声をかけてみよう。

「おーい、おーい！　中に入れてくれ！」
すると兵士の一人が反応した。
「誰だお前、どこから来た？」
あれ、普通に通じるぞ。おかしくね？
日本語が通じるってことは、まさかここは日本なんだろうか。いや、今どき城塞都市なんかあるわけがない。それに、あの兵士たちは金髪碧眼でどう見ても外国人だ。
まあいいや、言葉が通じるのはラッキーだね。早いとこ中に入れてもらおう。
「俺は信一、日本から来た。街に入れてくれ！」
「シンイチ？　ニホン？　わかった、待ってろ」
兵士の姿が消えてから間もなく、門が開いた。門と言っても、先が尖った格子戸だ。いわゆる落とし格子って奴で、一度落とすと人力では上げられない……って、なんかの本で読んだことがある。
ま、そんなことどうでもいいね。帰る方法を誰かに聞かないと。
街の地面は石畳になっており、周囲には煉瓦で造った数階建ての住宅や商店が並んでいる。住民たちは髪や肌の色から見て、明らかに外国人だ。ただ、ときたま黒い髪に黒い目をした奴もいる。
歩いている人々を観察すると、鎧を着た戦士やローブを着た魔術師、修道服を着たシスターなんぞがいた。なんのロールプレイングゲームだよ、これ。とりあえず声をかけてみるか。

格付け協会

俺は、近くを歩いている金髪碧眼の男に声をかけてみた。見たところ歳は十七、八くらいだと思う。革の鎧とブーツを身につけ、腰には突剣を佩いている。目鼻立ちの整ったイケメンだ。

「あの、すいません。別世界から飛ばされてきて困ってるんですが……」

こんなことを言ったらキチガイ扱いされるんじゃないだろうか。うーん、不安だ。でも他に言いようがないんだよね。

「ああ、もしかして日本から来たんですか？　それとも中国とか韓国とか？」

え、まともに話が通じてるし。いよいよ何がなんだかわからない。ひたすら目をしばたたいていると、彼は微笑みながら言った。

「実は、僕もアメリカから飛ばされてきたんです。よかったらこの街を案内しますよ」

「え、マジっすか。ありがとうございます！」

このアメリカ人はやたら陽気で話しやすく、すぐに打ち解けることができた。名前はエドワードというらしい。俺と同じ十七歳で、一週間前に飛ばされてきたそうだ。

「信一、裸足じゃないか。よかったら靴を買ってあげるよ」

「え、いいのか。ありがとう！」

さっきから足の裏が痛くてたまらなかったんだよね。ありがたい限りだよ。

俺は彼に布の靴を買ってもらい、ようやく一息ついた。さて、後はこの国についてできる限り聞いてみよう。

「エド、なんで俺たちは話が通じるんだ？　俺は日本語でしゃべってるし、君は英語だろ？」

「自動で同時通訳されてるらしいよ」

「なんだそれ！」

もしかして、この世界って電子化されてるんだろうか。
「エド、短刀直入に聞くよ。この国はなんなんだ？　作り物なのか？」
すると、彼は首を傾げた。
「僕も初めて来たとき、君と同じようなことを考えた。ここはオンライン・ゲームの中なんじゃないかって。今でもその考えは変わらない。ただ、一つ困ったことが……」
「何？」
「ゲームなら、僕は殴られようが蹴られようが痛みを感じないはずだ。でも、自分を叩いてみると明らかに痛い。腹も減るしトイレにも行きたくなる。つまり、生身のときと変わらないってことだよ」
「じゃあ、殺されたら死ぬのかな？」
「たぶんね」
あ、あっぶねー。さっきゴブリンに捕まらなくてよかった。
「それで、どうやったら元の世界に帰れるわけ？」
「Sランクの人たちが話してるのを聞いたんだけどね、決められた敵キャラを倒せばいいみたいだよ」
「え、Sランクって何？」
「この国の人間は、強さによってランク付けされてるのさ。一番強いのがS、次にA～F。それでFが最弱」
「ちなみにエドは？」
「残念ながらFだよ」
それは本当に残念だ。
「じゃあ俺は？」
「格付け協会に登録しないとわからないけど、たぶんFだろうね」
な、なんだって。素手でゴブリンを手玉に取る俺がF？
「そのランキングって格付け協会が決めてるの？」
「うん、早いとこ登録した方がいいよ。ランクが上がると強い武器をもらえるから」
これは早く行かないと損だ。聞いておいてよかった。

そうそう、もう一つ疑問が……
「なんかやたら体が軽いんだけど、気のせいかな？」
「いや、気のせいじゃないよ。重力が元の世界の半分くらいしかないみたいだから」
「へー、ありがとう」
とにかく、格付け協会とやらに行ってみよう。そうしないとどうにもならなそうだ。俺はエドにつれられて、街の中央にある建物を目指した。
中に入ると広々とした部屋があった奥にはカウンターがあり、その前には長椅子が並んでいる。番号札をもらい座っていると、やがて自分の番になった。
「百十九番の方、どうぞー」
俺はカウンターの前にある丸椅子に座った。対応してくれるのは二十歳くらいのお姉さんだ。それはいいとして……この人、スーツ着てるよ。しかも、その前にあるのはパソコンだし。
「あの、高木信一っていいます。日本から飛ばされてきたんですけど」
「はい、ではこちらに記入をお願いします」
渡された紙には氏名や年齢の他、住所や電話番号まで書く欄があった。え、これはきついよ。
「あの、こんな個人情報を教える必要があるんですか？」
「いえ、できる限りで結構です」
「はあ」
俺は名前だけ書き込んだ。こんな得体の知れない連中に、住所や電話番号を知られてたまるか。
女性はキーボードをカタカタと叩き、機械的に言った。
「登録完了しました。写真撮影をしますので二階へどうぞ」
「え、なんで写真？」
「ＩＤカードをお作りします。それがないとランキング登録できませんよ」

うー、めんどくさい。なんなんだよ一体……
「ところで、一つ聞きたいんですけど」
「なんでしょう」
「決められた敵を倒さないと、元の世界に帰れないんですよね？」
「おっしゃる通りです」
「そいつに返り討ちにあって死んだら、本当に死ぬわけですか？」
女性はぱちぱちとまばたきしてから、さらっと言った。
「はい」
冗談じゃない！
次の瞬間、俺はブチ切れて彼女を怒鳴りつけた。
「ざけんな！　なんでこんなところで命がけの戦いをしなきゃやらないんだよ！　たかがゲームで本当に死ぬとか頭おかしいだろ！」
エドが走り寄ってきてなだめたが、怒りは収まらない。こいつら、人をなんだと思ってるんだ。
「今すぐ元の世界に戻せ！　こんなところで死ぬなんてまっぴらごめんだからな！」
なおも怒鳴りつけようとしたそのとき、女性が薄笑いを浮かべながら拳銃を突き付けてきた。う、嘘だろ……なんだこいつ……
「ちょ、お前……」
「それ以上わめくと撃ち殺しますよ」
「ま、待てよ。殺人犯になりたいのか？」
「私は、この世界に組み込まれたプログラムにすぎません。罪に問いたいのならどうぞご勝手に。それに、ここは日本ではありません。当然ながら、日本の法律は適用されないものとご理解ください」
やばい、人間じゃないくせにすごい殺気を感じる。こいつはガチで撃つつもりだ。逆らうと死ぬ。
俺は渋々ながらも、怒りを収めるしかなかった。く、悔しい……

フレアバスタード

実に不本意な話だけど、格付け協会に逆らうのは得策じゃないようだ。こいつら普通じゃない。つかイカレてる。これ以上反抗的な態度を取れば冗談抜きで消されるだろう。

仕方がないので、エドと一緒に二階へ登った。もらったカードには俺の写真が埋め込まれており、７９５８５というＩＤナンバーも刻まれている。これを持っていることが、協会に加入している証明になるそうだ。

俺たちはさらに三階へ登った。ここでランクを決定するらしい。がらんとした部屋の中には二十歳くらいの男性が一人と、牙をむき出した狼が一匹いる。え、まさかこいつと戦えとか？

男性は俺の顔を見るなり声をかけてきた。

「高木信一さんですね」

「はい、そうです」

「この狼と戦ってください、それを見てランクを決定します」

ありえない……

俺みたいな若い男ならともかく、これが幼い子どもとか老人だったらどうするんだ。一方的にかみ殺されるだけじゃないか。

心の中に激しい怒りが湧き上がったが、我慢するしかない。今の俺にはなんの力もないんだ。こいつらに逆らうのは、充分な実力をつけてからでいい。

男性が後ずさりながら叫んだ。

「では、始めてください！」

「おおっ！」

俺は疾走して狼に飛びかかった。渾身の蹴りをかましたが、奴は横に跳んでかわしている。ちっ、さっきのゴブリンどもとは大違いだ。さすがランク測定狼！

だからって、負ける気はさらさらない。こんなところで死ぬのは

ごめんだからね。
「うおおおらあっ！」
回し蹴りを連発すると、奴は跳び下がってこれをかわした。ほらほら、防戦一方で勝てると思ってんのか？
「グオオッ！」
跳びかかってきたな、馬鹿が。俺の動体視力と反射神経なめんなよ。某オンラインゲームで、敵のビームライフルを髪一重でかわしまくって「青い彗星」の称号もらったんだからな！
「死して屍、拾う者なし！」
奴の腹を強烈なアッパーカットが直撃した。「ギャン」と鳴いて目をむき、上空に飛ばされる狼。これで終わったと思うなよ！
俺は両手の指を組み合せて握りしめ、空中の相手を思いきり地面に叩き落とした。
「グキャンッ！」
奴は車にひかれたカエルみたいなかっこうでのびてしまった。二度と俺の前に立つんじゃねえ！
「それで、ランクは？」
絶対Sだろ、これ。文句なしだよね。ところが返ってきたのは意外な答えだった。
「うーん、Dですね」
「はあ？」
「何か不服でも？」
「当たり前じゃないですか、かすらせもしないで叩きのめしたんですよ。普通Sでしょ？」
「Sランクの人は、この狼を最初の一撃で倒します」
……失礼しました、それはさすがに無理っす。
「まあいいや、Dなんですね」
「はい。武器を進呈しますので四階へどうぞ」
俺たちはDと書かれたカードを手に四階へ向かった。そこは倉庫になっており、剣、槍、鎌、クロスボウなど様々な武器が並んでい

る。それを整理していた二十歳くらいの女の人に声をかけると、カードの提示を求められた。
「ああ、Dですか。じゃあグレートソードカスタムとか、ポイズングラディウス辺りですね」
「なんすか、それ」
「グレートソードはあれです」
彼女が指差した方を見ると、幅十五センチくらい、長さ二メートルくらいの大剣が並んでいた。ちょ、長すぎ。さすがにこれは無理だよ。
「あの、長すぎて無理かと」
「えー、そうですか。でも強いですよ。　振ると衝撃波が出るんです」
「いや、やっぱ無理」
「じゃあこっちかな」
今度は幅五センチ、長さ一メートルくらいの短剣だ。色が毒々しい紫色なのが気になる。
「こっちがグラディウス、結構強いですよ。突いた傷から猛毒が注ぎ込まれて……」
「なんか気持ち悪いんで、他のはないですか？」
「ワガママだね、君」
「すいませんねえ、どうも」
彼女は倉庫の奥から、鞘に収められた一振りの剣を持ってきた。長さは一メートル二十センチくらいで、柄が長く全体が反り返っている。なんだ、よさそうなのがあるじゃん。
「これはですねえ、どんな剣かと言うと……」
「ふんふん」
「説明が面倒くさいので、ちょっと抜いてみましょう」
そっすか。まあいいけど……
「えい！」
剣を抜いた途端、凄まじい炎が吹き出した。ちょ、危ねえええ！

彼女は慌てて剣を収め、俺に向かって微笑んだ。
「こういう剣です。名前はフレア・バスタード」
なんつー怖い武器だ。でも気に入ったからこれにしよう。
「じゃあ、これで」
「そうですか。ポイントが貯まったら、他にも武器をお渡しします。
では最後に五階へどうぞ。インフォーメーションがありますので」
説明があるんなら最初にしてほしいと思うのは俺だけだろーか。
とにかく、エドをつれて五階へ行くことにした。どんなイカレた
説明をしてくれるのか楽しみだ。

冷酷なるイザベル

五階へ登ると、またもやカウンターと長椅子があった。そこでは多くの人たちが順番待ちをしている。俺は番号札をもらい、自分が呼ばれるのを待った。

やがて名前を呼ばれたので、カウンターに行ってみた。向こう側にいるのは二十歳くらいの女性で、やっぱりスーツを着込んでいる。長い黒髪を後ろで縛っており、きりりと引き締まった顔の美人だ。肌は浅黒く、手足はすらりと長い。

「高木信一様ですね、どうぞおかけになってください」

言われるままに椅子に座ると、彼女はにっこりと微笑んだ。

「初めまして。今後高木様を担当させていただくイザベルと申します。もうお気付きだと思いますが、ここはオンライン・ゲームの中です。元の世界へ戻るには決められた敵を倒さなければなりません」

「わかりました。ところで、一つ聞いていいですか？」

「どうぞ」

「あなたたちは何者なんですか？」

彼女は微笑んでいるだけで答えない。俺はさらに問い詰めた。

「教えてくれたっていいでしょう、駄目なんですか？」

「答える義務がありませんから」

「はあ？」

「私の役目は、あくまで最低限の情報をあなたに伝えるだけ。それ以上のことについて申し上げる義務はないのです」

彼女はそう言って薄笑いを浮かべている。うーん、ムカつく。いつかぎゃふんと言わせてやりたい。

「じゃあいいです、『決められた敵』の名前を教えてください。さっさと倒して帰るんで」

「こちらが名簿です、どうぞ」

渡されたペラ紙を見ると、「アビスドラゴン」だの「アーマード

ゴーレム」だの物騒な名前が並んでいる。こんな連中に挑んだら瞬殺されそうだ。
眉をひそめていると、イザベルがにやにやしながら言った。
「期限はございませんので、ごゆっくりどうぞ」
「冗談じゃないです。早く帰らないと、学校を何日も欠席することになっちゃいますから」
「そうですか、ではがんばってください」
「最後に一つだけいいですか？」
「どうぞ」
「自分のやってることに罪悪感はないんですか？」
彼女は沈黙した。そうだろう、後ろめたいんだろう。
ところが、意外な答えが返ってきた。
「ないですね」
「ええっ、なんで？　これはもう誘拐じゃないですか。勝手にこんなところにつれてきて、しかも帰らせないなんて」
「勝手にとは心外です。あなたは広告をクリックしたでしょう？それはつまり、別の世界へ飛ばされることを承諾したということではないですか」
「それはゲームの宣伝文句だと思ったから……」
「勘違いしたのはあなたです、私どもに非はありません」
頑として非を認めない彼女に俺は辟易した。これ以上話しても意味はなさそうだ。
「わかりました、失礼します」
背を向けて立ち去ろうとすると、イザベルが背後から言った。
「私は高木様のサポート担当ではありますが、あなたが傷つこうが命を失おうが関知致しません。あくまで戦力増強の手助けをするだけです。どうぞお忘れなく」
俺は無言で部屋を出た。傷ついて倒れたとしても、あいつらの力を借りる気なんかさらさらない。とにかく一刻も早く強くなって、ここから抜け出してやる。

さて、これからどうしよう。エドに相談してみると、「とりあえずザコ敵を倒そう」という話になった。さっき出たゴブリンみたいな連中だね。
そいつらを倒すとポイントが入り、ランクが上がったり換金したりできるらしい。ただ、ポイントは入るときと入らないときがあるらしく、しかも場合によって多かったり少なかったりするそうだ。この点は世間一般のロールプレイングゲームと違っている。
それにしても、獲得したポイント数はどうやってわかるんだろう。エドに聞くと、こんな答えが返ってきた。
「街の中心に電光掲示板があるよ」
ふーん、じゃあそれを見てみるか。
協会を出て目抜き通りを歩いていくと、やがて巨大な掲示板が視界に入った。五階建てのビルくらいありそうだ。そこにはＩＤナンバーや名前が表示されている。ちなちに英語だ。自分がどこにあるか探してみると、一番下に小さく表示されていた。
「シンイチ・タカギ　ランクＤ　ポイント０」
なんだ、０かよ。ゴブリンと狼を倒したのに……
「うーん、さっさと魔物を倒すしかないなこりゃ」
「効率よく倒すには、強い人とチームを組むといいらしいよ」
強い人って、上の方にでかでかと表示されてる連中か。どれどれ。
「ビオレッタ・ハイマン　ランクＡ　ポイント５７９５０７」
ちょ、五十七万って……
「アレクセイ・サンドラス　ランクＳ　ポイント６８７３０７９」
ろ、六百万って……
「エド、あんな人たちが俺たちとチーム組んでくれるわけないよね？」
「まあね、向こうにはなんのメリットもないし。むしろ足手まといにしかならないだろうから」
「だよな、あーあ」
がっかりしていると、突然背後から声をかけられた。

「あのー、すみません」
お、二人組の女の子だ。これはまさか……

金髪と黒髪の少女

一人は金髪碧眼の女の子だった。歳は十七か八くらい。ウェーブのかかった長髪、はっきりした目鼻立ちにすっきりした輪郭、起伏の激しいボディラインをしている。装備しているのは革の鎧にブーツ、サーベルだ。

もう一人は髪も瞳も黒く、東洋人に見える。歳は最初の子と同じくらいだ。ストレートロングの髪が紫がかっているところを見ると、たぶん染めてるんだろう。切れ長の目に端正な顔立ちをしており、すらりとした体をしている。一人目と同じく革の鎧とブーツを身につけており、持っている武器は数本のナイフだ。

もしかして、これは逆ナン……いや、んなわけないか、こんなところで。

「俺たちになんか用？」

たずねると、金髪が俺を見つめながら訴えた。

「チームを組んでくれる人を探してるんです、どうか力を貸してください！」

もう片方は黙りこくっている。金髪はそれを見て眉をひそめた。

「ちょっと、あなたからも頼んでよ！」

「え、ああ……私からもお願いします」

黒髪の方は、なんだか他人事みたいな態度だ。まあ別にいいけどね。

問題はこの二人のランクだ。どうせチームを組むなら強い方がいい。

「君たちのランクは何？」

聞いてみると、金髪がおずおずと答えた。

「二人ともＥです……」

うん、却下だね。Ｅの人たちと組んだところでなんのメリットもない。これから強くなりそうなら話は別だけど、どっちも女の子と

きてる。かわいいからといって手を組むのは自殺行為だ。
「悪いけど他を当たってくれ」
突き放すように言うと、金髪が涙目になりながら俺の手を握りしめた。
「他の人にも頼んだけど断られたんです、私たちを助けると思ってお願いします！」
うーん、まいったな……どうしよう。
困り果てていると、エドが口を挟んできた。
「信一、組もうよ。ちょうど僕たちも仲間を探していたところだしさ」
最悪なタイミングで余計なことを。ほら、女の子が目を輝かせちゃってるよ。
「お願いします！　私、ジェシカ・バーグマンです！」
「私はリンファンです、どうぞよろしく」
あーあ、最弱のチームができ上がったよ。DとEとFの組み合わせで半分が女の子って、完全に終わってるじゃん。
まあこうなったら仕方がない。俺がこいつらを引っ張って最強のチームにするしかないね。
「高木信一だ、よろしく！」
俺たちはしっかりと手を握り合った。

さて、チーム名を何にしよう。みんなで協議した結果「フェニックス」に決まった。なんだか中二病臭い気もしなくもないが、まあいいだろう。
チームフェニックスが最初に取りかかったのは、街の周辺に現れるゴブリンの掃討だった。聞くところによると、大体のチームはそこから始めるらしい。まあ、あんなチンケな小人なんぞにやられる心配はないしね。
街の外にある荒野に出ると、さっそくゴブリンの群れが現れた。こいつら、いつでもいるなあ。さて、一丁俺が……

そう思った瞬間、ジェシカが地を蹴ってかっ飛んだ。
「たあーっ！」
え、ええ？
先頭のゴブリンに強烈な斬撃が降り注ぎ、一瞬で真っ二つにしてしまった。……あれ、この子強くね？
驚いたのはゴブリンたちで、剣や手斧を振り回しながら大騒ぎしている。そこに幾筋もの閃光が走った。リンファンの投げたナイフだ。それは正確に彼らの体に突き刺さる。
「ギャアアアッ！」
「ウゲェェェ！」
ゴブリンたちは泡を吹きながらこちらに向かって突進してきた。その前にエドワードが立ち塞がる。
「ごめんよ、君たち」
彼は踏み込むと同時に電光のような突きを繰り出し、目の前のゴブリンを二体まとめて串刺しにした。再び彼らの悲鳴が上がる。
なんだ、こいつらいけてるじゃん。心配することなかったよ。よし、最後は俺が飾らせてもらうか。
「死して屍、拾う者なし！」
俺はフレア・バスタードを引き抜くなり、ゴブリンたちの間を一瞬で駆け抜けた。同時に横薙ぎの一閃を放っている。振り向くと、彼らは真っ二つに斬り裂かれて転がっていた。さあ、残るは三匹だ。
「おおおおっ！」
バスタードを振りかざすと獄炎が噴き出し、魔物たちを取り囲んでいく。もう逃げ場はない。
「とどめだ！」
渾身の力で斬りつけると真紅の閃光が走り、ゴブリンたちを見事に両断した。こっちのメンバーはかすり傷一つ負っていない。完全勝利だ。
「っしゃあああ！　やったぜ！」
俺たちは手を取り合って喜んだ。それにしても、こいつらの強さ

は一体……

詳しく話を聞くと、ジェシカはフロリダ州にある高校のバスケ部のエースで運動神経は抜群らしい。リンファンは中国雑技団のメンバー、エドはフェンシングの達人だそうだ。お前ら、そういうことは先に言え！

「じゃあなんでランクがEとかFなんだよ！　おかしいだろ」

そうたずねると、エドが憤慨しながら答えた。

「いくら剣を使えたって、素手で狼と戦えっていうのは無理だよ」

ジェシカも口をそろえる。

「そうだよ、いくらなんでも怖すぎるって。武器の一つも持ってれば話は別だけどね」

……なるほど、そういうことっすか。素手だと弱いのね、こいつら。まあ当たり前と言えば当たり前だけど。

レストランにて

街に戻って電光掲示板を確認すると、俺に２００ポイント入っていた。エドたちにも５０ポイントずつ入っている。よかった、これで０だったらどうしようかと思ったよ。

次に向かったのはレストランだ。ここでＩＤカードを照合してポイントを使えば好きなものをなんでも食べられるらしい。

建物の中はごく普通のファミレスで、様々な国の人たちが食事をしていた。満席に見えたが、よく探すと一箇所だけ四人掛けの席が空いている。順番待ちをしている人がいるのになんでだろう。

しばらく待っているとウェイトレスが寄ってきた。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「四人です」

「あちらの席でよろしければ、今すぐご案内できますが」

彼女は例の席を指し示した。なんか裏があるんだろうか。

「先に来て待ってる人たちがいるのに、いいんですか？」

「皆様は『他の場所が空くのを待ちたい』とおっしゃってまして」

「あそこに座ると何かあるんですか。使用するポイントが跳ね上がるとか？」

「いえ、サービス内容に変わりはありません」

なんだ、別に問題ないじゃん。あそこでいいよ。

「みんな、いいよな？」

たずねると、一人残らずうなずいた。じゃあさっさと食事をしよう。

席についてメニューを開くと、日本語やら英語やら十か国くらいで書かれていた。ドリンクバーが１ポイント、ハンバーガーが２ポイント、うどんやラーメンが３ポイント、食べ放題のバイキングが１０ポイント……フレンチや中華のフルコース、懐石料理がそれぞれ１００ポイント。全メニュー合わせると三百種類以上という驚異

的な品揃えだ。
「メガ盛り牛丼とドリンクバーで」
「かしこまりました」
これでしめて5ポイント、安いもんだ。エドとジェシカは食べ放題とドリンクバー、リンファンは中華セットを選んでいる。食べ放題はセルフサービスで、自分で好きなものを皿に取ってきて食べるらしい。
やがてジェシカが山盛りのハンバーガーとフライドポテト、ばかでかいガラスのコップに入ったオレンジジュースを持ってきた。
「さあ、食べるよー！」
ちょ、太るぞお前。よくこんなもの食べて普通の体型を維持してるな。
呆れ返っていると、エドが眉をひそめて言った。
「ジェシカ、そんなものばっかり食べると太るよ」
そう言う彼の目の前には、十段重ねのホットケーキが置かれている。メイプルシロップもたっぷりかかってるし、ものすごいカロリーだ。見ているだけで腹が一杯になる。
「エド、お前もだよ！」
「えー、そうかな」
こいつらは肥満予備軍だ、間違いない！
かたやリンファンは白いまんじゅうと野菜炒め、豆乳の組み合わせだ。こんなもので腹が膨れるんだろーか？
「そのまんじゅう、なんか入ってるの？」
「ううん、何も」
……よく生きてるな、こいつ。栄養失調予備軍だ、間違いない！
まあいいや、さっさと食べよう。運ばれてきたメガ盛り牛丼をぱくついてると、ジェシカが笑みを浮かべた。
「本当によかったよ、信一たちがチーム組んでくれてさ」
「そうかな、そんだけ強けりゃ二人だけでもいけるんじゃないか？」
「無理無理、女の子二人でモンスターと戦うなんて怖すぎ。やっぱ

りこういうときって男の子がいないと」
「そういうもんかねえ」
うん、うまいぞこの牛丼。肉は柔らかいし、味付けがしっかりしてる。
「……それに、二人だけじゃ辛いことがもう一つあってね」
「へえ、何？」
「この子が無口なんだよ」
ジェシカはそう言いながらリンファンの肩を叩いた。彼女はかまわず、ひたすら野菜炒めを食べ続けている。
「ほら、無反応でしょ？　なんか言ってくれればいいのに、テンションが下がるったらありゃしない」
「そういう性格の人もいるんだよ、あまり責めるなって」
なんとかなだめようとしたが、ジェシカはぶうぶう文句を言っている。ああ、めんどくさ。
そのとき突然、横から怒鳴られた。
「うるさい！」
視線を向けると、二十歳くらいの男性だった。短い茶髪に茶色の瞳、白い肌。彫りの深い顔に引き締まった体。ワイシャツに長ズボンという軽装だ。彼の席には食べかけのステーキと、グラスに入ったワインが置かれている。
「食事くらい静かにできないのか！」
再び怒鳴られ、俺は仕方なく謝った。
「すみませんでした」
「今度騒いだら叩き出すぞ！」
そんなに怒るほどのことなんだろうか。みんなでワイワイ食べたっていいような気もするけど。
彼の前の席には、二十歳くらいの女の人が座って食事をしている。茶色いセミロングの髪、茶色の瞳、白い肌にほっそりした体。着ているのはブラウスとスカートだ。彼女は、相方が怒っているのを見かねて口を開いた。

「落ち着きなよ、アレクセイ」
「でも、こいつらが……」
「謝ってるんだし、もういいでしょ」
「ビオレッタは甘いな」
男はひとまず怒りを納めたようだ。アレクセイとビオレッタって、SランクとAランクの……
ああ、こいつらがいるから横の席が空いてたんだね。とっても危険な連中なわけだ、すぐキレるし。
俺たちはすっかりテンションが下がってしまい、黙々と食事を続けた。さっきまでうまかった牛丼がやけにまずい。
そのとき、ずっと黙っていたリンファンが小声で言った。
「あの人たち、めちゃくちゃ強いよ」
「なんだ、会ったことがあるのか？」
「ここに初めて来たとき、二人がモンスターの群れと戦ってるのを見たんだよ。もう瞬殺。全然相手にならないの」
「へー」
ジェシカは目を丸くして彼女を見つめている。
「なんだ、普通にしゃべれるんじゃん」
「しゃべれないとでも思ってたの？」
「だって、ほとんどしゃべらないからさあ」
「あなたがおしゃべりなだけでしょ、私は普通だよ」
「えー、どこが普通なの？　おっかしーい！　ねえ、エド？」
「いや、その……」
「私、おかしくなんかないよね？」
「えーと……」
三人がわあわあ言っていると、またもやアレクセイがブチ切れた。
「お前ら、いい加減にしろ！　俺に喧嘩を売ってるのか？」
あーあ、やばいなこれは。仕方ない、謝っておくか。
「すみません、黙らせますのでどうか……」
「ふざけるな、一度ならず二度までも。俺の言ったことをまじめに

受け取ってない証拠だろうが！　全員表に出ろ！」

ビオレッタがなだめたけど、いよいよ彼はいきりたってしまい聞く耳を持たない。短気すぎるだろ、こいつ。絶対カルシウムが足りてないよ。

VSアレクセイ

俺たちは仕方なく、ポイント換算を済ませて外に出た。アレクセイたちも続いて出てくる。あーあ、面倒なことになったもんだ。

奴は鞘に入った細身の剣を左手で握っている。となると、こっちも丸腰というわけにはいかない。俺はフレアバスタードを引き抜いて中段に構えた。相手がSランクだろうが、黙ってやられるつもりなんかさらさらない。

ジェシカが心配そうに声をかけてきた。

「私たちも戦うよ」

「相手は一人なんだし、俺だけでいい」

リンファンも声をひそめて話しかけてくる。

「信一だけで勝てる敵じゃないよ、ここは四人がかりで……」

「やめとけ、そうなったらビオレッタまで出てくる。Sランク一人でもやばいのに、Aランクが補佐についたらどうにもならない」

俺は三人を代わる代わる見てからさらに言った。

「俺がやられたら、かまわずにさっさと逃げろ。まあそんなことはないと思うけどね」

みんなは表情を曇らせながら見つめてくる。どうせ俺が殺されると思ってるんだろう。残念ながら、そんな簡単にやられるほどやわじゃない。

アレクセイが薄笑いを浮かべた。

「別れの言葉は済んだのか？」

「そんなもん言ってねえよ。これからアレクセイをぶった斬るからよく見ておけって言っただけだ」

みるみる奴の顔が赤くなる。いや、短気にもほどがあるね。

「雑魚が。一撃で殺してやるからありがたく思え」

「その言葉、そっくり返すよ」

ふと気づくと、周囲に人だかりができていた。決闘を見物しに来

たらしい。この中の誰一人として、俺が勝つと思ってる奴はいないだろう。
アレクセイは剣を抜くなり薙ぎ払った。
「とあっ！」
途端に光の刃が飛んでくる。体をひねって直撃をかわしたものの、それが頬をかすめて血が流れ出た。こいつ、本気だ。
「生意気な、死ね！」
奴が何度も剣を振りかざすと、次々に光の刃が生み出されて飛んでくる。俺はすかさず横に跳んで全てかわしきった。周囲から感嘆の声が上がる。
「どうしたSランク、俺はDだぞ。こんな底辺を相手に苦戦して恥ずかしくないのかよ？」
「ゴミクズが調子に乗るな、ほざいていられるのも今のうちだ！」
おーおー、吠える吠える。さて、今度はこっちからいくか。
「死して屍、拾う者なし！」
フレアバスタードを振りかざすと、凄まじい炎が噴き出してアレクセイに向かっていった。だが、奴は動じる気配もない。
「なめるな！」
彼が剣を一閃しただけで炎は吹き飛んでしまった。でも、これはフェイントにすぎない。俺はすかさず間合いを詰め、アレクセイを真っ向から斬り下ろした。
「らあああっ！」
フレアバスタードが奴を両断した……かに思えたが、間一髪でかわされた。直後に鋭い斬撃が連続で襲ってくる。俺はそれらをさばきながら後退した。
「ちっ、はずしたか」
完全に捕らえたと思ったが甘かった。さすがはSランク、一筋縄ではいかない。相手も同じようなことを考えたらしく、剣を構えながら顔を引き締めている。
「驚いたな、Dランクとはとても思えない。お前、名は？」

「高木信一だ、脳の裏にでも刻んでおきな」
「その実力に敬意を表する、しかし……」
彼が剣を握りしめると、その体がまばゆい光に包まれていく。おお、なんだかやばそうだ。
「だからと言って、俺の勝利は揺るがない！」
その直後、アレクセイが閃光と化して俺を直撃した。凄まじい痛みが全身を襲い、しかも空中に放り出されている。
「ぐああっ！」
俺は地面に叩きつけられた。激痛で意識を失いそうだ。でもそうなったら命がない。最後の気力を振り絞り、フレアバスタードを握りしめた。
光を帯びたアレクセイが笑い声を上げている。
「実力の差がわかったか？　まあ今さら理解したところで遅いがな。自分の愚かさをあの世で後悔するがいいさ」
ちょっと揉めたくらいで格下相手にここまでやるか。俺だってたいした人間じゃないけど、こいつに比べりゃまだマシだ。
奴が再び突進してくる。ジェシカたちが剣を抜いて援護しようとしてるけど、もう間に合わない。だからと言って、こんなところで死ぬのはごめんだ。俺はフレアバスタードを振り上げ、渾身の力で奴に向かって投げつけた。
「これでも喰らえ！」
アレクセイの悲鳴が上がった。その体から光が消え失せている。投げつけた剣は彼の左肩に突き刺さっていた。
「ぐ、ぐうっ……」
奴はそれを引き抜いて放り投げ、なおも俺に向かって突進しようとした。しかし、その右肩をつかんで止めた者がいる。ビオレッタだ。
「もう充分でしょ、アレクセイ。そのくらいでやめておきなよ」
「しかし……」
「このまま続ければ、あなたは殺人者になっちゃうよ。いいの？」

「元より奴を殺すつもりだ！」
「一時の感情で他人を殺すとか、馬鹿じゃないの？」
アレクセイは押し黙った。今の一言は相当効いたようだ。
「……わかった、この辺でやめておこう。信一、命拾いしたな。今度会ったら命はないと思え」
アレクセイは散々毒づいてから立ち去った。勝てなかったのは残念だけど、助かっただけでもよしとしておこう。

ランクアップ

アレクセイたちが立ち去ると、周囲の見物人たちが口々に声をかけてきた。
「おい、大丈夫か？」
「すげーな、Ｓランクを相手にあそこまで……」
「たいしたもんだよ、それでＤランクとかありえないだろ」
俺は頭を押さえながら立ち上がった。皆が心配して声をかけてくれる。ありがたい限りだ。
「大丈夫です、どうぞご心配なく。エド、肩を貸してくれ」
「いいよ、じゃあ病院に……」
「その必要はないよ、この程度で」
「そっか。じゃあ、掲示板を見にいってみないか？　今のでポイントが稼げたかもよ」
「なんだ、魔物以外と戦っても上がるのか」
仲間に支えられながら掲示板を見にいくと、表示が変更されていた。
「シンイチ・タカギ　ランクＢ　ポイント５２７０」
うお、ランクが上がってるよ。ポイントも増えてるし、なんだか嬉しい。
素直に喜んでるとジェシカが笑みを浮かべた。
「ねえ、武器屋に行ってみない？　ポイントを使えばフレアバスタードを強化してもらえるよ。他の武器を買うこともできるし」
ほう、そりゃ耳寄りな話だ。ぜひ行ってみよう。
武器屋の建物に入ると剣や槍、弓や薙刀など様々なものを売っていた。１００ポイントで買えるのもあれば、１００００ポイント出さないと買えないものもある。俺はとりあえずカウンターに行き、フレアバスタードを差し出した。
「すいません、これを強化するのに何ポイントかかりますか？」

応対したのは、エプロンをして眼鏡をかけた三十歳くらいの男性だ。
「使用するポイント数に応じて強化の度合いを決めておりますので、いくつでも結構です」
「これを５０００ポイント分強化するのと新しく武器を買うのと、どっちが効率的ですかね？」
「目的によります。近距離だけでなく遠距離でも戦いたいのなら、スラッシュクロスボウやナパームロッドを購入されるとよろしいでしょう。あくまでも近距離で戦いたいのなら、フレアバスタードを強化した方がよろしいかと存じます」
なるほど、じゃあ強化でいこう。多芸は無芸って言うしね。
「強化でお願いします」
「かしこまりました、お預かりします。終わるまでしばらくお待ちください」
男性にフレアバスタードを渡すと、他の店員がそれを受け取って奥へ消えていった。さて、手持ち無沙汰だ。他に客もいないことだし、この人と話をしてみようかな。
「あの、伺いたいことがあるんですが」
「なんでしょうか」
「ランクって、格付け協会の人たちが勝手に決めてるんですよね？」
「おっしゃる通りです、実力が認められるほど上がっていきます」
「ポイントは誰が入れてるんですか？」
「動画を試聴した方々です」
なんのことやらさっぱりだ。俺がここで戦うのと動画と、どんな関係があるんだろう。
「あの、それはどういう……」
「ヘブンズ・ウォーリアというサイトをご存知ですか？」
ああ、聞いたことがある。ものすごくリアルな戦闘シーンを視聴できる有料の動画サイトだ。そこでは人間と悪魔の戦いや、人間とドラゴンとの戦いなどを観ることができるらしい。モンスターはＣ

Gと思えないほどよくできており、登場人物たちの表情も真剣で、観ていると非常に興奮するそうだ。そのため膨大なアクセス数を誇り、ネット上でしばしば話題になっている。
「ええ、知ってます。観たことはありませんけど」
「そのサイトでは、好きなキャラクターにポイントを入れることができるんです」
「はあ。それとこの世界と何か関係あるんですか？」
「ですから……例えば、あなたがドラゴンと戦ったとしますよね。すると、戦闘シーンが動画サイトに配信されます。それを観た人たちがあなたにポイントを入れるわけです」
「え……まさか、その動画サイトを運営してるのは……」
「格付け協会です」
あ、あいつら。自分たちが利益を得るために俺たちを利用してるのか。いよいよ許せない。
「それからもう一つ。お客様は、この世界について何か説明を受けましたか？」
「オンラインゲームだと言われました」
「うーん、ゲームですか……」
え、まさか嘘とか？
「ち、違うんですか？　じゃあ一体何……」
「ここはゲームの中ではなく、現実に存在する世界なんです」
「そ、そんな……」
「ですから重傷を負えば本当に死にますし、好物を食べればおいしいと感じるわけです」
「じゃ、じゃあなんでオンラインゲームだなんて言ったんですか！」
「その方が受け入れられやすいからじゃないですかね。『あなたは別の世界に飛ばされました』などと言われたら、大体の人はパニックに陥るでしょう。でも『これからオンラインゲームに参加してもらいます』と言われれば、クリアして帰るだけだと思うでしょうし」
「だったら『これはゲームですので、敵にやられても実際に死ぬわ

けではありません』って嘘をつけばいいのに。俺は死ぬって言われて驚きましたよ」
「そう言っておかないと、みんな真剣にやらないからじゃないですかね」
あの協会ときたら本当に信用できない。元々信用しちゃいないけど。
まあいいや、どっちにしろ俺がやることは一つだ。ボスキャラを倒してさっさとここからおさらばしよう。
しばらく待っていると、フレアバスタードの強化が終わって戻ってきた。鞘から抜いてカウンターに置いてみると、明らかに以前と違う。絶えず炎を噴き出していたのが、今は真紅の刀身を静かに横たえているだけだ。
「あの、これって弱くなったんじゃ……」
「そんなことはないですよ、この方が安全ですし。むしろ以前は、エネルギーを絶えず外に放出して無駄にしていたんです。今はそれをすべて中に閉じ込めまして、必要に応じて取り出せるようになっております」
「炎の威力と斬れ味は？」
「炎に関しては、一瞬で辺り一面を焼け野原にできるほどです。斬れ味は、そうですねえ……革の鎧を着た人間なら、鎧ごと両断できるでしょう。鎖かたびらはちょっと厳しいですね」
「充分です、ありがとうございました」
「いえ、どういたしまして。またいらっしゃってください」

サーベルハウンド

さて、武器の強化も終わったことだし魔物と戦いに行ってみようか。俺は仲間たちをつれて街の外へ出た。もっとランクが上がれば遠出もできるらしいが、今は近場で戦うしかない。

さっそくゴブリンの群れが襲ってきたけど一瞬で蹴散らした。お前らなんかお呼びじゃねえ！

ジェシカの話によれば、街から離れれば離れるほど強力な魔物が出現するらしい。じゃあ向こうに見える林まで行ってみよう。それ以上はやばそうだ。

近づいてみたところ、他のチームの連中がちらほら見えた。こいつらもランクアップのためにここで戦ってるんだろう。ちょっと話をしてみようか。

「おーい、おーい！」

声を上げると、他のチームの一人が振り向いた。二十代後半くらいの男性だ。小太りで革の鎧を着込んでおり、腰には斧を帯びている。髪や肌の色から見て東洋人のようだ。俺は笑顔で話しかけた。

「こんにちは、ランクアップははかどってますか？」

「いや、それがなかなかねえ。敵が強くてさあ」

「へえ、どんな魔物が出るんですか？」

「色々出るよ、一番危険なのはサーベルハウンドって奴だ。いきなり斬りかかってくるから充分……」

その途端、男性の首から上が消えた。ちょ、嘘だろ！

彼が鮮血を噴き出しながら倒れると、仲間たちが悲鳴を上げた。どうやら魔物に狙われているらしい。俺はフレアバスタードを引き抜き、仲間たちに向かって叫んだ。

「近くにいるぞ、気をつけろ！」

次の瞬間、何かが空気を斬り裂いて飛んできた。咄嗟にしゃがんでかわしたけど、頭をかすったようだ。さわってみると少量ながら

も血が流れ出ている。
この野郎、殺す！
目をこらしてよく見ると、二本のサーベルが飛び交っていることがわかった。こいつらの仕業だな。俺はその片方を狙い渾身の力で斬りつけた。凄まじい金属音が響き渡る。と、そのときだ。
「グギャッ！」
サーベルが悲鳴を上げ、地面に降り立って犬の姿に変わった。全身真っ黒で、体長1・5メートルくらいの大型犬だ。奴は額から血を流しながらも、牙をむいて俺に襲いかかってくる。
「ガアアアッ！」
こら、犬。人間様を惨殺しておいて、五体満足で死ねると思うなよ！
「エド、ジェシカ、リンファン！　もう一匹は任せる！」
俺は彼らの返事を確認し、サーベルハウンド目がけて剣を振り下ろした。
「うおらあああっ！」
間合いに捕らえてはいたものの、犬は体をひねってからくもかわしている。くそ、素早い奴め。それならもう一度斬るまでだ！
「喰らいやがれ！」
今度は横薙ぎの一撃を放ったが、これも当たらない。サーベルハウンドはくるくると回転しながら跳び下がり、牙をむいてこちらをにらみつけている。
「この野郎！」
さらに袈裟掛けの斬撃、足払いの一閃、首を狙った突きと続けたがすべてかわされてしまった。さすがは野犬、速度が半端じゃない。こうなれば動きを止めるまでだ。
「行けええっ！」
バスタードの柄を思いきり握りしめながら振りかぶると、獄炎が渦を巻きながら犬に襲いかかった。普通なら逃げるところだ。だが奴は果敢にもサーベルに変形し、炎をものともせず俺目がけて飛ん

できた。敵ながら見事な勇気だ。
「死して屍、拾う者なし！」
俺は精神を集中し、飛来するサーベル目がけてバスタードを一閃させた。またもや金属音が響き渡り、今度は空中で犬に変形している。このチャンスを逃す手はない！
「うらあああああ！」
真紅の閃光が走り、サーベルハウンドを真っ二つに斬り裂いた。凄まじい絶叫が響き渡り、同時に血飛沫が上がる。さあ、あと一匹だ。
振り返ると、エドワードたちがもう片方を血の海に沈めていた。よし、これで俺たちの勝利だ！

魔物たちは片付けたものの、首を斬られた男性はどうにもならなかった。彼の仲間らしき男性が肩を落とし、女性二人が泣き崩れている。俺は彼らに向かって頭を下げた。
「俺が話しかけなければこんなことには……本当にすみませんでした」
魔物が出没する場所だとわかっていながら、浅はかだったとしか言いようがない。どんな罵声だろうが受け止めるつもりだ。しかし、男性は文句一つ言わず首を振った。
「君は、ここにどんな魔物がいるのか知らなかったんだろう？　それなら仕方がない。まさかサーベルが飛んでくるなんて思わなかっただろうからね。俺たちはそれを知っていながらみすみす敵の襲撃を見逃してしまった。彼が命を落としたのは、むしろ俺たちの不注意が原因だ」
「いや、そんな……」
俺は言葉を詰まらせた。この人が自分を責めることなんかない。元凶は誰かと言えば……
こんな危険な魔物が出現する世界に、俺たちを放り込んだ協会の連中だ。

いつか奴らを締め上げて、ここにいる全員を解放させてやる。俺は強く心に誓った。

サンドガルーダ

俺たちは街に戻って武器を強化したり買い替えたりしてから、今度は砂丘へ向かった。

現在俺はBランク、エドワードとジェシカとリンファンはDランクだ。皆が同じように戦うと応用が効かないので、役割を分担することにした。

フレアバスタードを持つ俺とライジングエストックを持つエドは近距離専門、スラッシュクロスボウを持つジェシカとリンファンが遠距離専門。ライジングエストックは針を巨大化したような突剣で、スラッシュクロスボウは自動で矢を連射する武器だ。これで様々な敵に対処することができるだろう。

今回狙うのは砂丘に住む、サンドガルーダという巨大な鳥だ。前回のサーベルハウンドよりはるかに危険な敵らしいが、これもランクアップのためだ。弱いままでは何も変えられないし、ここから出ることもできない。

砂丘に着くと、既にいくつかのチームが目標を探して歩き回っていた。大体が三人から四人の構成だが、中には十人近い大所帯もある。まあ確かに、一人でも多い方が心強いよね。

それにしても、周囲には砂があるだけでサンドガルーダのサの字も出てこない。本当にいるんだろうか。実は誰かがこっそり倒した後だとか、どこかに飛び去ってしまったとかじゃ……

俺は近くにいるエドに話しかけた。

「もしかして無駄骨なんじゃね？　どこにもそれらしい奴がいないぞ」

「うーん、確かに。でも、いつもここにいるって聞いたんだけどなあ」

そのとき、背後で絶叫が響き渡った。慌てて振り向くと、他のチームの男性が巨大な鳥に押さえ付けられている。え、こいつどこか

ら来たんだよ！
「うわあああ、助けてくれえっ！」
まずい、やられる。なんとかしないと。
「ジェシカ、リンファン、撃て！」
二人はすかさずクロスボウを構え、次々と矢を発射する。それは正確に突き刺さったが全然効いていない。くっ、なんだあいつは！
他のチームの面々も続いて飛び道具を放ったが、奴はかまわず男性に喰らいついた。
「ぎゃあああああっ！」
ちっ、遠距離用の武器じゃ歯が立たない。こうなりゃ俺の出番だ。
「全員下がれ！」
他の連中が引いたのを見届けると、俺はフレアバスタードを引き抜いて奴に斬りかかった。
「らあああああっ！」
体を叩き斬ると、そこからさらさらと砂がこぼれた。え、なんだこいつ。砂でできてるのか？
「クエエエエッ！」
奴は一声鳴くと翼を広げた。で、でかっ。翼の端から端までの長さが二十メートルくらいある。
「こいつ！」
さらに斬りつけると、怪鳥は男性を放り出して舞い上がった。すかさずチームメイトが駆け寄ってくる。
「おい、大丈夫か！」
「しっかりしろ！」
傷のようすを確認したところ、頭をつつかれて大きな穴が空いている。おそらく助からないだろう。でも、とにかくここに置いておくわけにはいかない。俺は彼のチームメイトに呼びかけた。
「その人をつれて退避してください！」
彼らはうなずき、男性を担いで逃げ出した。こんな重傷者を動かすのはどうかと思うが、このままではガルーダの餌になるだけだ。

やむを得ない。
「他の人たちは援護をお願いします！」
周囲の連中が避難中のチームを囲んで援護する。俺はその間に、空中に飛び上がった怪鳥を走って追いかけた。その後にエドたちが続く。今度降りてきたときがあいつの最期だ。
やがて、奴は大きく旋回してから急降下してきた。狙いはどうやら俺らしい。いい度胸だ！
「ジェシカ、リンファン！　奴の頭を狙って撃て！」
「うん、任せて！」
「了解！」
矢の嵐が鳥の頭部目がけて襲いかかる。どれほど強い魔物でも、頭をやられればひとたまりもないはずだ。ところが、それでも奴はお構いなしに突撃してくる。
「くっ、この鳥野郎。射撃やめ！」
俺はジェシカたちを止め、フレアバスタードを握りしめて一閃させた。凄まじい炎が噴き出し、ガルーダを包み込む。今だ！
「エド、行け！」
「おおっ！」
エドワードの剣が閃光となって走り、奴の胸部に連続で突き刺さる。怪鳥は鳴き声を上げているが、致命傷は負っていないようだ。
「エド、どけ！」
「了解！」
「うおおおらあああっ！」
俺は地を蹴って跳び上がり、渾身の力を込めて真っ向からガルーダを斬り下げた。奴の巨体が二つに裂けていく。この程度で終わると思うなよ！
「おおおおおっ！」
俺はフレアバスタードを握りしめ、奴の胴体を薙ぎ払いつつ走り抜けた。直後に大爆発が起き、奴を吹き飛ばしていく。新・フレアバスタードの威力、思い知ったか！

爆発が収まると、そこにはサッカーボール大のクルミのような物体が転がっていた。たぶん奴の核なんだろう。これが砂をかき集めてサンドガルーダの体を作り上げていたわけだ。撃っても突いても効かないわけだね。

俺はクルミを突き刺し、剣の柄の部分を強く握りしめた。やがてフレアバスタードのエネルギーがその中に流れ込み、クルミが真っ赤に膨れていく。

「グ……グ……グギャアアアッ！」

すげえ、クルミが悲鳴を上げたよ。どっから声を出してんだ。まあとにかく、そろそろ死んでもらおうか。

「おおらっ！」

さらに力を込めると、クルミは砕け散った。その破片が輝きながら周囲に降り注ぐ。

今回も勝利したが、またもや犠牲者を出してしまった。これ以上被害を出さないように細心の注意を払わないといけない。俺はより一層気を引きしめた。

イザベルの告白

街に戻って掲示板を見ると、またもや表示が変わっていた。
「シンイチ・タカギ　ランクＡ　１５６０２０ポイント」
なんだ、来た初日でランクＡかよ。早くね？
掲示板を見る限りだと、全部で八万人くらい参加者がいるらしい。Ｂランクやランクは腐るほどいるがＡランクは百人に満たない。Ｓランクなんかアレクセイ一人だ。つまり、俺は上位百名の中に入ったことになる。
ぼうっとしながら掲示板を眺めていると、エドワードが叫んだ。
「あっ、僕もＣランクに上がってるよ！」
ジェシカの声も続く。
「私もＣになってる！　やったー！」
さらに、リンファンもぽつりと言った。
「あっ、Ｃだ」
……お前、嬉しいのか嬉しくないのかどっちだよ。まあ別にいいけどね。
さて、武器屋に行くとしよう。ポイントを山ほどつぎ込んでフレアバスタードを強化しなきゃならない。
建物の中に入ると、一人の女性が中から出てきた。二十歳くらいで黒いスーツを着込んでいる。長い黒髪を後ろで縛っており、きりりと引きしまった顔の美人だ。肌は浅黒く、手足はすらりと長い。
「信一君、待ってたよ」
「なんだ、イザベルかよ。お前なんかに用はないぞ」
「まあ、そう言わないでよ。ちょっと話を聞いてくれない？　ねっ？」
彼女は俺を武器屋の一室に連れ込んでドアを閉めた。
「まあ座ってよ」
近くにある椅子に座ると、彼女も他の椅子に腰を降ろした。こい

つのことだから、どうせろくな話じゃないだろう。
「なんだよ、話って。さっさと終わらせろよ」
「そんな邪険にしないでよお」
イザベルは媚びたような笑みを浮かべている。なんだこいつ、気持ち悪い。美人なのは認めるけど、あまり関わりたくないのが本音だ。
「あのね、信一君。今日は組合の一員としてじゃなくて、個人的に会いに来たんだよ」
「俺はお前なんかに会いたくない」
「なんでそんなに冷たくするの？　お姉さん悲しいよ……」
「勝手に悲しめばいいだろうが」
「あっ、ひどーい！　女の人相手にその言い方！」
「女だなんて思ってない。さっさと話さないと出ていくぞ」
イザベルは首をすぼめ、上目使いに俺を見た。
「あなたのポイントが跳ね上がってるのを見てね、気になって戦いぶりをモニターで観てみたんだよ。そしたら驚いた、もうかっこよすぎ。一目惚れしちゃったよ」
「だから？」
「えーと、その……信一君って、年上は嫌い？　外国人は？」
「年上も外国人も嫌いじゃない、でも」
「でも？」
「お前は嫌いだ」
イザベルはかなりショックを受けたようで呆然としている。当たり前だ、誰があんな組織の一員なんか好きになるもんか。俺に好意を持ってもらいたいなら脱退して出直してこい。
「信一君は、お姉さんの愛を受け入れてくれないんだね……」
「ああ」
「私のことを敵だと思ってるんだね……」
「そうだよ」
「後悔させてあげる……奈落の底に突き落としてあげるよ……」

彼女はゆらりと立ち上がり、薄笑いを浮かべた。や、やばい。この女はかなりやばい。どうやら俺は地雷を踏んだようだ。
「覚えておきなさい。あなたはいつか、散々痛めつけられて倒れることになる。そのとき頭を踏みつけてるのがこの私だよ。もうぐりぐりとね」
「お前、なんでそこまで……」
「私は生まれてこのかた、振ることはあっても振られることなんて一回もなかった。それをよくも手ひどく振ってくれたね。もうプライドがズタズタだよ。だからあなたもズタズタにしてあげる。『目には目を、歯には歯を』って言うじゃない？」
恐怖の余り硬直していると、イザベルは俺の顔をなで回して笑った。
「ふふふ、あはははは。いいよ、その顔！　私を拒絶したことを死ぬほど後悔させてあげる。楽しみに待っててね！」
こ、怖い。めちゃくちゃ怖い。ここまでアブナイ女の人に会ったのは生まれて初めてだ。
彼女は哄笑しながら立ち去った。なんだか死刑宣告をされた気分だ。あいつはイカレた協会の人間だし、さっきの言葉は単なる脅しじゃないだろう。きっと全力で潰しにかかるに違いない。
いや、待てよ。イザベルは個人的に俺を狙ってるだけだ。いくらなんでも、そのために組織を動かすことはできないだろう。彼女一人に狙われたくらいで、この俺がピンチに陥るとも思えない。
結論。放置して問題なし！
俺は再び武器屋のカウンターに戻り、フレアバスタードの強化にいそしんだ。剣を渡して待っていると、ジェシカが話しかけてくる。
「ねえ、あの人だれ？」
「俺のサポート担当でイザベルって人」
「すっごい美人だねえ、なんの話してたの？」
「俺のことが好きなんだってさ」
「え、ええー！　愛の告白じゃん！」

ジェシカは色めき立ち、エドやリンファンも目を見開いている。
「ねえねえ、それでなんて答えたの？」
「お前なんか嫌いだ、って」
「うわっ、何その言い方。ひどすぎない？」
「別に」
「それでイザベルさんの反応は？」
「俺を半殺しにして頭を踏みつけてやるってさ」
三人とも完全に硬直してしまった。まあ、どっちもどっちだよね。
「そういうわけだから、あの女が近づいてきたら追っ払ってくれ。頼むよ」
「う、うん」
みんな心配そうな顔をしていたが、俺に不安はなかった。どんな敵が現れようが、叩きのめして進むだけだ！

ミノタウロス

さて。武器の強化も終わったし、また魔物の討伐に行くとしよう。
俺は相変わらずフレアバスタード、エドワードはライジングエストックを使っている。ジェシカとリンファンはエクスプロードボウに切り替えた。撃った矢が、相手に刺さった途端に爆発するという強力な武器だ。
俺たちが次に向かったのは街の北に位置する神殿だった。中は真っ白で床が大理石でできており、森の木々を思わせるような丸く太い柱が林立している。壁には神や天使の彫刻や絵画が飾られている他、銀色の燭台も埋め込まれていてなかなか壮麗だ。
ここに住んでいるのはミノタウロスという魔物らしい。頭が牛で体が人間、戦闘能力はサンドガルーダをはるかにしのぐそうだ。それだけに倒せばランクアップも見込める。よし、がんばろう。
奴を狙っているのは俺たちだけではなく、前回と同じように他のチームも参加している。革の鎧や鉄の鎧を着込んだ人間が多いが、中には俺のように普段着で参加している者もいるようだ。危険ではあるけど、その方が動きやすいんだろう。
柱が立ち並ぶ神殿の中を歩いていくと、やがて広々とした部屋に出た。さて、このどこかにミノタウロスがいるはずだ。周囲を警戒していると、右側にいたチームから悲鳴が上がった。
「ぎゃあああっ！」
「うわっ、わあああーっ！」
くっ、しまった。また犠牲者が出たか！
慌てて視線を向けると、さっきまでそこを歩いていた人たちが肉塊に変わっていた。その前にはミノタウロスが立っている。首から上が牛、下は人間。その身長は三メートルをゆうに超える。しかも筋肉隆々で、ばかでかい斧まで持っているのだから危険極まりない。
「ジェシカ、リンファン、撃て！」

二人はミノタウロス目がけて矢を連射した。それらは残らず命中して炸裂している。だが奴の巨体は揺るぎもしない。とんでもない化け物だ。
さらに他のチームの人たちも次々と飛び道具を投げつけ、連続で爆炎が巻き起こった。奴の辺りにもうもうと煙が立ち込める。よし、今度こそ仕留めただろう……と思ったそのとき、横薙ぎの一閃が俺の前方にいる連中を襲った。凄まじい血飛沫が上がり、上半身を失った人々が崩れ落ちていく。ち、畜生。また犠牲者が！
やがて他のチームの面々が一斉に剣を抜き、喚声を上げながらミノタウロスに斬りかかった。そのときだ。
奴は大きく口を開き、バレーボール大の火の玉を連続で吐き出した。襲いかかった剣士たちは直撃を受け、炎に包まれてのたうち回っている。こ、こんな技までかますとは……いよいよやばい。
周囲の人々は青ざめ、戦意を喪失してしまっている。遠距離からの攻撃が効かない上に、近づこうとすると火の玉を喰らってしまうのでは確かにどうしようもない。
ただ一人、俺を除いては。
皆が浮足立つ中、俺は自分のチームメイトを下がらせ奴に向かって歩いた。周囲の人々は「こいつ、正気か？」と言いたげに目を見張っている。まあ、そう思うのはもっともな話だ。誰だってこんな強い魔物と戦いたくないだろう。
俺はミノタウロスにバスタードを突きつけ、奴を見据えた。
「死して屍、拾う者なし！」
それに呼応し、奴が大きな口を開けて火の玉を連射する。
「カアアアアッ！」
おお、来るわ来るわ。だけどな、何度も同じ手が通用すると思うなよ。
「お前が燃えろ！」
フレアバスタードを振りかざすと獄炎が噴き出し、火の玉を呑み込んで奴を直撃した。おらおら、燃えろ燃えろ！

「グワアアアッ！」
苦しんでるとこ悪いけど、こんなチャンスを見逃すほど甘くない。
「うおおらあああっ！」
俺は一瞬で間合いを詰め、奴の腹を真一文字に斬り裂いた。凄まじい返り血を浴びたけど知ったことじゃない。
「お前が殺した人たちに、あの世で詫びてこい！」
ミノタウロスは悲鳴を上げながら斧を振り下ろしたが、そんな苦し紛れの一撃なんか見切るのはたやすい。悠々とかわして、奴の腹にフレアバスタードを突き刺した。さらに柄の部分を握りしめ、そのエネルギーを注ぎ込んでいく。
剣を引き抜いて跳び下がった直後、奴の腹が爆発した。もう鮮血の噴水状態だ。さて、あまり苦しめるのもなんだしとどめを刺すか。
「じゃあな」
俺は崩れかかるミノタウロスの真横をすり抜けた。同時に横薙ぎの一撃を放っている。充分距離を取ってから振り返ると、奴は大爆発を起こして粉々に吹き飛んだ。
火の玉の直撃を受けた人たちもなんとか助かったようだ。胸を撫で下ろしていると、周りにいた若者たちが笑顔で声をかけてきた。
「すげーよ、アンタ強すぎ！」
「もしかしてAランク？」
「いや驚いたわ、こんな人もいるんだねー」
なんだか悪くない気分だ。愛想笑いを振り撒いていると、いきなり背中を衝撃が襲った。え、なんだよ。ここにいるのはミノタウロスだけなはずだろ！

イザベルの襲撃

続けて二回、三回と衝撃波が襲ってくる。俺はまともに喰らってしまい、その場に倒れ込んだ。

「な、なんだ。一体誰が……」

後ろを見るとイザベルが立っていた。と言っても以前のようなスーツ姿ではなく、革の鎧を着て剣を振りかざしている。こいつもいたのか、全然気づかなかった。

「お、お前……」

うめくように言うと頭を踏みつけられた。ちょ、容赦ねえ。そんなに俺が憎いのか。

「ふふっ、気分はどう。言った通りになったでしょ？」

彼女はぐりぐりと踏みにじってくる。それを見かねたジェシカが叫んだ。

「何するんですか、やめてください！」

「あなたは黙っててよ、これは私と彼の問題なんだから」

「黙ってられません！」

するとイザベルは、血も凍るような冷たい目つきでジェシカをにらみつけた。

「私は格付け協会の人間なんだよ、わかってるの？」

こうなると誰も口を出せない。皆、自分の命が協会に握られていることを知っているからだ。

イザベルは、周囲が静まり返ったのを見ると満足そうにうなずいた。虎の威をかる狐もいいところだ。

やがて彼女は俺を解放し、屈み込んで口を開いた。

「優しいお姉さんはあなたに助かるチャンスをあげちゃうよ。私の愛を受け入れるか、ここで死ぬか選びなさい」

「誰が……」

「え？　聞こえないよ」

「誰がお前なんか受け入れるか！」
その途端、彼女は目をむいてぶるぶると震えだした。一度ならず二度も拒絶されてよほどショックなんだろう。俺の知ったことじゃないけど。
「ふーん、そうなんだ。あくまでもそんな態度を取るんだね」
彼女はまたもや踏みつけてくる。さっきより力が入っていて痛いことこの上ない。
「ねえ、まだー？　『僕が悪かったです、イザベル様』って早く言いなよ」
「ふ、ふざけ……」
「ほら、『今後はあなたの言うことをなんでも聞きます』でもいいよ」
「ふざけんな！」
彼女は顔をしかめて大きなため息をついた。いい加減あきらめろっつーの！
「本っ当に強情だね、そんなあなたも好きだよ」
「俺は嫌いだ！」
「じゃあ、好きになるまでいじめてあげるね」
誰か、このドS女から俺を解放してくれ。
ひたすら痛みに耐えていると、周囲の人たちが集まってきた。あれ、なんだなんだ。まさか止めてくれるのか？
やがて、一人の男性がイザベルに話しかけた。
「もうやめろ」
「は？」
「その人を解放してやれよ」
「誰に向かって口を聞いてるの？」
「お前に決まってんだろうが」
彼女に逆らったのは、この男だけではなかった。他の人たちも次々と口を開き「いい加減にしろ」「調子に乗んな」といった言葉を浴びせかける。イザベルも負けてはいない。目をむいて男性に剣を

突きつけた。
「いい度胸してるね、ここで死にたいの？」
「冗談じゃない、こんなところで死んでたまるか」
「だったらなんで逆らうわけ？　馬鹿じゃないの？」
「その人を助けたいからだよ。彼がいなかったら、俺たちはミノタウロスに殺されていた。言うなれば命の恩人だ。それが苦しめられているのを見て黙っているわけにはいかないだろう」
「あなたたちが束になったところで私にはかなわないよ、わかってるの？」
「それはどうかな、これだけ人数がそろってるし」
すでに十人を超える男性がイザベルを包囲していた。さすがの彼女もこれには恐怖を感じたらしく、俺を解放して縮こまっている。
「くっ……」
「ほら、さっきの威勢はどうしたんだよ」
そのとき、彼女が目を見開いた。口元にはかすかな笑みを浮かべている。
「いよいよ私を怒らせたね、全員あの世に送ってあげる！」
イザベルの体から真っ黒な煙が噴き出して視界を閉ざしていく。俺は慌てて起き上がり剣を構えた。もしかして、こいつは人間じゃないとか……
やがて煙が消え去ったとき、そこには一人の悪魔が立っていた。ふわっとした銀色のロングヘア、浅黒い肌。切れ長の目にしなやかな輪郭、豊かなバストにきゅっとくびれたウエスト。頭に雄牛のような角、背中にコウモリのような羽根、お尻の辺りからは先端がスペード型になった黒く長いしっぽが生えている。装備しているのは漆黒のサーベルだ。
「ふふ、驚いた？」
口角を吊り上げている彼女を見て、さっきの男性が剣を振りかざした。
「こ、この化け物が！」

「ん？　やる気？　本当に殺しちゃうよ？」
イザベルもサーベルを引き抜いた。まさか、十人を超える敵を相手にするつもりなんだろうか。だとしたら相当な度胸だ。
やがて、さっきの男性が勢いよく斬りかかった。
「たあっ！」
しかし、イザベルは少し横に移動しただけでかわしている。直後にしっぽがするすると伸び、男性の首に絡みついてしめ上げた。
「ぐ、ぐえ……」
もう黙って見ているわけにはいかない。俺はフレアバスタードを引き抜いて疾走した。これ以上犠牲者を出すのはまっぴらごめんだ。
「らあああっ！」
完全に間合いにとらえたと思ったが、彼女の姿は消えていた。まずい、やられる。思いきり屈み込むと、頭上をイザベルの斬撃が通りすぎていく。間一髪だ。
「さっすが信一、いい勘してるう！」
「お前にほめられても嬉しくない！」

悪魔との激突

俺は一旦跳び下がり体勢を立て直した。エドやジェシカ、リンファンが武器を構えている。援護するつもりなんだろう。

「みんな、手を出さないでくれ。俺一人で充分だ！」

エドたちは引き下がり、他のチームの人たちも後ずさった。よし、これでいい。敵は悪魔であるとは言え女だし、しかも一人だ。みんなで袋叩きにしたら男がすたる。

イザベルは薄笑いを浮かべながらこちらを見つめていた。彼女の鎧はいつのまにか消え去り、今はエナメルで光沢を出した黒いブラとパンツ、長手袋とロングブーツを身に着けている。女性である上にこんな軽装でよく戦う気になるものだ。俺も普通の服しか着てないし人のことは言えないけど。

「ふふ、一人で戦う気なの？　無理しなくていいんだよ」

「別に無理なんかしてないさ」

「一つ約束してよ、あなたが負けたら私のものになるって」

「ああ。その代わり、俺が勝ったら二度と目の前に現れるな」

「いいよ」

次の瞬間、彼女は空中に舞い上がった。まずい、飛ばれてしまったら大幅に不利だ。向こうは好き放題斬りつけられるが、こっちはそうはいかない。

焦っていると、イザベルが急降下してきて突きを放った。なんとかかわしてバスタードを一閃させたが、奴は飛び上がって逃げている。

「く、くそっ！」

「ふふっ、こっちだよー。あはははは！」

彼女は目を見開き、左の手の平を開いて突き出した。その前にどす黒い玉が現れ、どんどん巨大化していく。

「ちょっと痛いけど我慢してねー」

十メートルくらいにまで膨れ上がったところで、彼女は玉を発射した。うお、やばい。こんなもんどうやって避ければいいんだ。
「うわああっ！」
ひたすら横に跳んでかわすと、それは大理石の床に衝突して大爆発を起こした。まともに喰らったら死んでいただろう。ちょっと痛いどころの騒ぎじゃない。
「こいつ！」
俺はフレアバスタードを振りかざした。相手目がけて凄まじい炎が噴き出し、螺旋状に絡み合いながら襲いかかる。今度はイザベルが追われる番だ。
「くっ、生意気ね……」
彼女は全速力で逃げ回った。しかし、炎はしつこく追尾している。さらに二発三発と追い打ちをかけると、奴はついに悲鳴を上げた。
「ちょっと、飛び道具なんて卑怯だよ！」
「じゃあさっきの玉はなんだよ、お前が言うな！」
「わかった、もう使わない。だから剣で決着をつけようよ！」
「おお、いいぜ。かかってこい！」
俺は炎を収めてフレアバスタードを構えた。彼女も地上に降りてきてサーベルを構える。こいつは剣も相当使えるみたいだし油断は禁物だ。
イザベルはじりじりと間合いを詰め、地を蹴って斬りかかった。
「はあああっ！」
鋭い斬撃が襲ってきたが、俺はがっちりと受け止めた。奴は続けざまに頭、胴、足を狙って斬りつけてくる。とても女とは思えない剣さばきだ。
だからと言ってむざむざやられる気などない。俺は隙を見て反撃に出た。
「おおらああっ！」
首を狙った一閃、足を狙った薙ぎ払い、胸を狙った突きが次々と奴に襲いかかる。

「ちょ……やばっ……」
相手は辛うじてさばいているものの、必死の表情だ。そろそろ限界だろう。
「終わりだ！」
俺は渾身の力でイザベルの剣を叩き落とした。周囲から歓声が上がり、彼女の顔が蒼白に変わっていく。
「さあ、どうする。まだやる気か？」
「くっ……」
「これ以上抵抗するなら、女だろうが容赦なく斬るぞ」
すると彼女はふっと笑みをこぼした。
「わかったわかった、私の負けだよ。どうもすみませんでした」
「じゃあさっさと消えろ」
「はいはい」
イザベルが舞い上がったのを見て、俺は念を押した。また襲われたらたまらないからね。
「約束だ、もう目の前に現れるなよ」
「約束？　何それ？」
「こら、しらばっくれんな！」
「えー、聞いた覚えないしー。またね、信一」
彼女は手を振りながら飛び去った。約束一つ守れないのか、あいつは……
周りのみんなは勝利を喜び、俺の肩を叩いたり手を握ったりしている。でも、気分はすぐれなかった。また今回も多くの犠牲者を出してしまったのだ。
あと、気になることが一つある。格付け協会は、誰がなんのために作ったのかということだ。
金儲けのためというのが一番ありそうな線だが、それには疑問が残る。この世界には少なくとも八万人が生活しており、その衣服や住居、食料を確保するだけでも莫大な費用がかかるはずだ。戦いのようすを有料の動画サイトに公開したくらいでどうにかなるとも思

えない。いくらなんでも割に合わなすぎる。
それに、協会員が悪魔というのもすごい話だ。もう何がなんだかわからない。結局のところ、俺は悪魔にもてあそばれているだけなんじゃないだろうか。
皆が勝利に酔いしれる中、俺は呆然と立ち尽くしていた。

選抜コース

その日、俺たちは街にある旅館に泊まった。俺とエドワードが同じ部屋、ジェシカとリンファンが同じ部屋だ。壁は白く、床には真っ赤なカーペットがしかれており、テーブルや椅子、クローゼット、ベッドといった家具が置かれている。広さは二十畳くらいありそうだ。

俺はベッドに寝転びながら格付け協会について考えていた。一体彼らの正体はなんなのか、目的はなんなのか。いくら首をひねっても答えが出ない。

やがて、隣にいるエドが話しかけてきた。

「信一はすごいよね、来た初日にもうAランクなんて。ポイントも三百万以上貯まってるみたいだし……」

「別にたいしたこっちゃないよ」

「そんなことないって。僕たちも上がったけど、まだCランクだよ。とても君には及ばない」

「とりあえずがんばってくれよ、俺はひたすらSランクを目指すからさ」

「Sになったら、ここを脱出するつもりなのかい？」

「もちろんそうだけど、その前にやることがある。協会について詳しく調べたいんだ」

エドは無言で首をかしげた。そんなもの調べてどうするとでも言いたげだ。

「俺は、できれば他の人たちも解放してやりたい。さらに言うなら、協会を解散させたいと思ってる。他人を別の世界に閉じ込めて帰らせないなんて自分勝手もいいとこだ。あんなふざけた連中を野放しにはできないよ」

「信一は正義感が強いんだね」

「そうかな、普通だと思うけど。だって何人も死んでるんだぞ？」

「僕は自分が帰れればそれでいいと思ってるよ。格付け協会が危険な存在であることは一目瞭然なんだし、必要以上に関わるのは嫌だ」
なるほど。確かに、あんな連中とできる限り関わるべきではないというのは一理ある。安全に生きていこうと思うならそう考えた方が利口だ。
「エド、お前の意見はわかったよ。でも、せめてあいつらの正体がなんなのかということだけは確かめたい。そのために接触するのを許してくれないかな？」
「君がそうしたいっていうのなら従うよ、信一が僕たちのリーダーなんだしね。でも、面と向かって彼らに逆らうのはやめてほしいんだ。あまりにも危険すぎるから」
「わかった。もし奴らに逆らうのであれば俺一人でやるよ。エドに迷惑はかけないからさ」
俺たちは互いに沈黙した。なんだか悲しいものがある。こんな世界に閉じ込められた以上、大体の人間は不満を持っているはずだ。みんなで一致団結して立ち上がれば、協会の連中を引っ捕らえて言うことを聞かせることも可能だろうに……
エドは恐怖が先に立ってしまいそれどころではないらしい。彼を「このヘタレ」と罵倒するのは簡単だ。でも、得体の知れない強力な組織に一般人が立ち向かおうというのも無謀の極みだと思う。それだけに彼を責めることはできなかった。
翌朝、俺たちは協会の建物に行ってみることにした。奴らについて調べるためだ。ただ、間違っても逆らわないようエドに釘を刺されている。ジェシカとリンファンも協会に盾突くのは嫌だという意見で一致していた。自分たちの命が彼らに握られている以上、逆らうのは危険すぎると言うのだ。
行く途中で掲示板を見てみると、俺の名前の下にこんな文章が表示されていた。
「格付け協会本部までお越しください」
なんだか知らないけどちょうどいい。こっちもあいつらに用があ

るんだ。俺は早足に歩き、協会の建物へ入った。
中は多くの人間でごった返している。五階に上がってカウンターの中を見ると、スーツ姿のイザベルがパソコンのキーボードをカタカタと叩いていた。髪は以前のように黒くなっている。うーん、できればこいつ以外の人間と話がしたい。よし、他の奴に声をかけよう。そう思っていたのだがあっさり見つけられてしまった。彼女は特に嬉しいといった風でもなく、無表情のまま声をかけてくる。
「高木様、お待ちしておりました」
あれ、なんだか感じが違うぞ。
「掲示板を見て来たんだけど」
「左様ですか、ご足労いただきありがとうございます。こちらのお部屋へどうぞ」
「あの、つれの三人はどうすれば？」
「お話をさせていただくのは信一様だけで結構ですから、好きにしていただいて構いません」
じゃあいいや、エドたちにはどこかで時間を潰してもらおう。彼にそのことを告げると、買い物をしたいとのことだった。
「信一、僕たちはここの隣にある店にいるからさ。終わったら来てよ」
「ああ、わかった。じゃあまた後でな」
こういうとき、携帯がないのはつくづく不便だと思うけど仕方がない。俺はエドたちと別れ、イザベルにつれられて部屋に入った。真ん中に向かい合ってソファーが置いてあり、その真ん中にガラスのテーブルがある。
「どうぞ、おかけください」
「はあ、どうも」
ソファーに座ると、彼女はカップに入った紅茶を持ってきた。ハーブの香りが鼻をくすぐる。
「どうぞ」
「あ、ありがとうございます」

なんだかこっちまでかしこまってしまう。
「あの、それで俺に話っていうのは……」
彼女は向かい合ってソファーに座り、口を開いた。
「選抜コースへのお誘いです」
「選抜コース？」
「はい。Aランク以上、もしくは私どもが選ばせていただいた方のみが参加できるものです。目的は廃屋にある金塊を持ち帰ることでして、達成された方には一千万ポイントを差し上げます」
「なるほど……それだけ難易度は高いんですよね？」
「はい。しかし高木様なら可能かと存じます。また、今回はそれぞれのチームに一人ずつサポート担当がつきまして、同行させていただきますのでご了承ください」
「となると、俺につくのは……」
「私です」
「はあ、あなたですか……」
「ご不満ですか？」
沈黙していると、イザベルは俺の背後に回って抱きついてきた。
ちょ、胸を押しつけんな！
「なーに、信一？　私じゃ不満なわけ？」
彼女は甘ったるい声でささやいてくる。うわあ、なんだよ。豹変しやがって！
「何が気に入らないの？　お姉さんに言ってみなさい」
「全部だよ」
「やん、冷たーい！　ゾクゾクしちゃう」
「勝手にしてろ」
「ねえ、なんでそんなに強情なの？」
「は？」
「もしかして彼女がいるわけ？」
「いるよ！」
……二次元にだけどね。

「へー、どんな？　その子ってかわいいの？」
「か、かわいいよ……」
「どこで知り合ったの？」
「えっと、高校で……」
「同じクラスの子？」
額に冷や汗がにじんでくる。なんでそんなに根掘り葉掘り聞くんだよ！
「えーと……」
顔をひきつらせているとイザベルは俺の隣に座り、額を人差し指でツンと突いた。
「お姉さんはわかってるんだぞ」
「なな、何を？」
「信一君に彼女がいないってこと」
なんでわかるんだ、こいつエスパーか？
「だって、すごく余裕がないもん。彼女がいる子ってもう少し落ち着いてるよ」
そ、そうすか……
「お、俺に彼女がいなかったらなんだっていうんだよ！」
「んもう、なんで通じないかなあ。私が立候補してるでしょー？」
イザベルは俺の左腕を抱え、胸をむにゅうっと押しつけてくる。
ううっ、やめてください。もう耐えられません。キャパオーバーです。
「やめてくれええー！」
「やだ」
彼女は寄り添い、満面に笑みを浮かべながら俺の顔をのぞき込んだ。
「このかっこじゃセクシーさに欠けるかな？」
「いえ、いいです。そのままで結構です！」

イザベルの誘惑

そのとき突然、イザベルの体から黒い煙が噴き出した。また悪魔の姿に変わるつもりだ。もう本当に勘弁してほしい。

「ううっ……」

俺がうめいているうちに彼女の変身が終わった。ふわっとした銀色のロングヘア、浅黒い肌。切れ長の目にしなやかな輪郭、はちきれそうなバストにきゅっとくびれたウエスト。頭から牛のような角、背中からコウモリのような羽根、お尻の辺りから先端がスペード型になった長いしっぽが生えている。着ているのはエナメルで光沢を出した黒いブラとパンツ、長手袋とロングブーツだ。前回はそれだけだったのだが、今日は黒いガーターベルトとストッキングも身に着けている。

「うふふ、どう？」

「ど、どうって言われても……」

「このかっこ、いいと思うんだよね。男を悩殺するのにさ」

「は、はあ」

「なんで目をそらすのー？」

あなたの爆乳がまぶしすぎるからです。胸の谷間がやばいです。

「ねえ、信一って何歳？」

「じ、十七」

「へー、私より二つ年下なんだ。おいしそう」

……おいしそう？

聞かなかったことにしよう。それにしてもこいつ、未成年だったのか。てっきり二十歳超えてると思ってた。

イザベルは俺にぴったりと寄り添い、爆乳をぎゅうぎゅう押しつけてくる。もうほとんど嫌がらせに近い。

「ねえ、信一。ねえってばあ」

だ、誰か助けて……

「何か言ってよお、どうしたの？　どうしちゃったの？　顔が真っ赤だよ？」
「う、ううっ」
「ねえ、キスしよっか」
彼女は舌を出してちろちろと動かしている。ううー、なんだこの色気は。とても未成年とは思えない。
「ねえ、キスしてよ。女の子から誘ってるのにシカトする気？」
イザベルは媚びた笑顔を浮かべながら俺の体をなで回している。やばい、絶対やばい。こいつに少しでも気を許したらあっちの世界へ突入だ。なんとしてもそれは避けないと。
「ダ、ダメだよ。俺たちは恋人同士じゃないんだし」
「えー、じゃあ彼女にしてよ」
「それはちょっと……」
「何が不満なの？」
「協会の人間は基本的に嫌いだから」
「じゃあ、協会を抜けたら彼女にしてくれる？」
そ、そう来たか。まずい、断る理由が……
「ねえねえ、どうなの？」
「えーと……」
「逃げられると思わないでね」
彼女は俺の耳元に息を吹きかけ、そっとささやいた。
「ねえ見て、あなたの下半身は私を欲しがってるみたいだよ」
こ、こんな美女に抱きつかれたら誰だってそうなるよ！
「と、とにかくダメだ。俺は人間、君は悪魔なんだし」
すると彼女は目をしばたたいた。
「私、人間だよ」
「どこが！　角が生えてるじゃんか！」
「変身してるだけ。コスプレだと思ってもらえばいいよ」
そ、そうっすか……
実を言えば、イザベルを彼女にしたくない理由はそんなことじゃ

ない。こんなエロ女を相手にしていたら自制心を失い骨抜きにされてしまうだろう。それが怖いんだ。
「イザベル、もう離れてくれよ。理性が吹っ飛びそうだから」
「いいんじゃない、吹っ飛べば」
「ダメだよ！」
「ふふっ、信一は真面目な子なんだね。お姉さんは不真面目なんだよ。だからこういうことをしちゃうの」
しっかりと抱きついてきた彼女を見て俺は慌てまくった。まずい、心の城塞が崩壊しかけている。このままイザベルを受け入れたら、虜になってしまい二度と引き返せなくなるだろう。そうなれば俺は彼女の操り人形だ。
「イザベル、お願いだよ。これ以上誘惑するのはやめてくれ。もう耐えられないから」
「ふふ、やだ」
俺はついに悲鳴を上げた。もう無理、本当に無理。
「だ、誰か助けてくれー！」
すると、ドアを開けてジェシカが入ってきた。彼女は目を見開いて硬直している。うおお、救いの神が！
「し、信一……何して……」
「ジェシカ！　よかった！」
「邪魔しちゃってごめんね、また後で」
「わー、待て待て！　こいつを止めてくれ！」
「は、はあ……」
必死にジェシカを引き止めていると、イザベルが舌打ちをしながら離れた。
「信一、また今度ね。次は逃がさないよ」
やばい、完全にロックオンされてる。
俺は彼女から集合の日時を聞き、逃げるように協会の建物を後にした。これから先どうなるのか不安でしょうがない。俺は理性を保てるんだろーか……

翌日。薄汚れた不気味な洋館の前に、参加者十チームと十人のサポート担当が集まった。先頭で、鉄の鎧を着た三十歳くらいの男性が皆に呼びかけている。

「これから金塊の争奪戦を行います。偽物も置いてありますので充分ご注意ください。本物は一つだけです。それを協会本部にお持ちいただければ一千万ポイントを進呈致します。それでは、スタート！」

他のチームが続々と洋館に入り込んでいく中、俺は黙ってそのようすを眺めていた。横に悪魔の姿をしたイザベルがぴったりと寄り添っており、首をかしげながら話しかけてくる。

「ねえ、私たちは行かないの？」

「どうせ中には様々な障害があるんだろう。慎重に進んだ方がいいよ」

「へー、真っ先に突撃するかと思ったよ。意外ー！」

俺一人なら特攻しても構わないが、エドワードたちもいるしイザベルもいる。できる限り、こいつらを危険な目に合わせたくない。他のチームの連中も心配ではあるけど、Ａランクかそれに匹敵する人たちだし俺が心配するまでもないだろう。

サーベルライガー

俺たちは他のチームが中に入ってからゆっくりと後に続いた。全員が武器を構えている。どうせ魔物が出ることはわかりきってるし、用心するに越したことはない。

洋館の中に入るといきなり大広間に出た。床には金糸で刺繍した絨毯が敷き詰められ、ベージュ色の壁には瀟洒なランプが取り付けられている。奥には二階へ続く階段があるのだが、皆はそこに行けず足止めを喰っていた。強力な魔物が道を阻んでいるらしい。

彼らの中央でうなっているのは体長が五、六メートルありそうな猛獣だった。見た目はライオンなのだが、うっすらと虎のような縞模様がある。一番の特徴は巨大な牙だ。長さ一メートルはあるだろう。

「な、なんだあれ……」

呆気に取られていると、イザベルがぽつりと言った。

「ライガーって知ってる？」

「いや」

「ライオンが父親、虎が母親の生き物。それを魔物化させたのが『サーベルライガー』だよ」

え、魔物化させたって……

まあいい、それはとりあえず置いておこう。奴を排除するのが先だ。

他のチームの面々がものすごい勢いで矢を放っているが、サーベルライガーは素早く跳び回りかわしている。その巨体からは想像できないくらい身が軽い。やがて奴は立ち止まり、前方にいる人たちをにらみつけた。なんだかやばそうだ。

次の瞬間、その体が五本のサーベルに変わり一斉に斬りかかった。直後に悲鳴と血飛沫が上がる。男性が一人やられたようだ。

サーベルは集束して再びライガーに変わると、今度は前方にいる

別の男性を押し倒した。さらに相手目がけて一気に牙を振り下ろす。
「ぎゃあああああっ！」
鮮血が噴き出し、周囲を赤く染めていく。もう黙って見ているわけにはいかない。俺はフレアバスタードを握りしめて斬りかかった。
「この野郎！」
途端に奴はサーベルに変形し、俺を目がけて飛んでくる。屈み込んでかわしたのはいいが攻撃の機会も失ってしまった。くそ、なかなかやるな。
押し倒された男性に駆け寄ると、彼は鉄の鎧の上から肩を突き刺されたようだった。普通なら無傷で済みそうなものだが、驚いたことに牙が鎧を貫通している。う、嘘だろ。ありえないぞこれ……
「大丈夫ですか！」
「あ、ああ……すまない」
俺は男性を助け起こした後、再びライガーの姿を目で追った。奴は何度も変形して周囲の人々に襲いかかっている。みんなはそれをかわしているものの、反撃の糸口を見いだせないようだ。
「エド、ジェシカ、！　全員来い！」
俺はチームメイトを呼び集めて指示を与えた。
「ジェシカとリンファンは、あいつが着地した瞬間を狙って一斉に撃つんだ。かなり動きが速いから先読みして撃つといい。エドはその直後に奴を突き刺して注意を引きつけてくれ。俺がその瞬間を狙って横から真っ二つにする」
三人がうなずく中、イザベルが怪訝そうな顔をしている。
「あれ、私は？」
「俺たちの誰かがピンチになったらフォローしろ。あとは自分の判断で動け」
「りょーかい」
さて、行くとするか。
チームメイトを引きつれて進み出ると、奴がサーベルに変形して飛んできた。それに向かって思いきりフレアバスタードを振り下ろ

す。
「うおおおらあっ！」
凄まじい炎がサーベルを襲う。奴はたまらず軌道を修正し、一旦横に飛んでから変形して降り立った。今だ！
「ジェシカ、リンファン！」
俺が叫ぶとほぼ同時に、二人の放った矢が空気を切り裂いて飛んでいく。それはサーベルライガーの体に残らず突き刺さり爆炎を上げた。さらにエドが疾走する。
「おおおおっ！」
彼のライジングエストックが閃光と化し、魔物の顔面に突き刺さった。同時に俺が跳び上がっている。
「らあああああっ！」
渾身の力でバスタードを振り抜くと、凄まじい絶叫が上がった。サーベルライガーは鮮血を噴き出しながら後ずさる。残念ながら致命傷は与えていないらしい。
「逃がすかあああっ！」
フレアバスタードが轟然と火を噴き、奴の体を獄炎と爆風が包み込んでいく。そのとき、イザベルの声が鳴り響いた。
「あっはっは！　あーっははは！」
彼女の放った黒く巨大な玉が、魔物を直撃して大爆発を起こす。ナイス、よくやった。さすが俺の彼女……じゃない、サポート担当！
やがて爆風が収まると、そこには肉片と骨のかけらが転がっていた。自分でやっておいてなんだけどものすごく痛ましい。ごめん、許してくれ。俺だって死にたくなかったんだ。
周囲が静まり返っているので見回すと、他のチームのメンツが一人残らず沈黙していた。あまりの強さにドン引きしたらしい。いや、あの……引かないでください。引くなってば、お願いだから！
肩を落としていると、イザベルが耳元でささやいた。
「うふふ、注目されてるね」
あ、わかった。強いからじゃなくて、こいつをつれてるから引か

れてるんだ。こんな露出度の高いエロ悪魔なんか見たら何事だと思うよね、普通は。性格もやばいし。
そのとき、若い男性が進み出た。女性を一人つれている。げ、アレクセイとビオレッタじゃんか！
彼は俺とイザベルを交互に見てから口を開いた。
「おい、その悪魔はなんだ？」
イザベルがにこにこしながら答える。
「信一の彼女だよ」
ぎゃあああ、さらっと嘘つくんじゃねええ！
「ちっ違……違……」
必死に手を振って主張したけど、誰も聞いちゃいない。うおお、なんて連中だ。鬼、悪魔！
アレクセイはイザベルを上から下まで眺め、ふっと笑みをこぼした。うわ、なんかムカつく。
「欲望丸出しって感じだな」
「……何よ、その言い方」
「色香を振りまいて男を釣りたいっていう……いや、その男にふさわしい女性じゃないか」
その途端、イザベルがブチ切れた。
「信一、聞いた？　こいつ私を侮辱してるよ！」
「はあ」
「はあ、じゃないよ！　彼女がけなされてるのに黙ってるつもり？」
いや、そもそも彼女じゃないし……
「信一、私もう我慢できない！　やっちゃおうよ、こいつ！」
「いや、ちょっと待……」
「待てない！」
いくらなだめすかしても、彼女は怒りを収めようとしない。その間に他のチームはどんどん先に進んでしまう。ああ、こんなことしてる場合じゃないのに！
「信一、あのスカした男をフルボッコにしてやってよ！」

「いや、そんなことでもめるのは……」
「そんなこと？　今『そんなこと』って言ったね？」
やばい、火に油を注いだ。もう消火できそうにない。
「あああああ！　ムカつくううう！」
イザベルが右手を突き出し、どす黒いエネルギーを集束させていく。ああ、もう無理だ。俺にはどうしようもない。
そのとき、アレクセイが振り向いてビオレッタに声をかけた。
「頼む！」
「了解」
彼女が進み出て右手を開くと、イザベルと同じようにエネルギーが集束していく。ただ、色は違う。こっちは青白い。
イザベルはそれを見て毒づいた。
「生意気ー！　あなたなんか吹っ飛ばしてあげるからね！」
「やめときなよ、ひどい目にあうのはあなたの方だし」
「はあ？　こ、この女……私をなめるのもいい加減にしなよ！」
いよいよやばくなったので、俺は慌ててイザベルを引き止めた。
「もうやめろって、もめたところでなんのメリットもないから」
「そういう問題じゃないし！」
いくらなだめても彼女は耳を貸さない。これはもうお手上げだ。
俺は呆然と立ち尽くしていた。

最強の証明

イザベルが黒い玉を発射すると、ビオレッタも対抗して青白い玉を撃ちだした。それらは二人の間で激突して爆発を起こす。
イザベルは一瞬目を見開き、その後に眉を吊り上げて叫んだ。
「くうー、本当に生意気！」
「あなたなんなの？　どうして悪魔が人間に手を貸してるわけ？」
「私、人間だけど」
「呆れた、堂々と嘘をつかないでよ」
どこからどう見ても悪魔そのものだし、そう言われても仕方がないと思う。
ついに、イザベルが漆黒のサーベルを引き抜いた。やばい、いよいよ刃傷沙汰になりそうだ。それを見たビオレッタも細身の長剣を抜いている。困ったことに止める人間が誰もいない。俺は慌てて叫んだ。
「二人ともやめろよ、こんなことをしても意味ないだろ！」
残念なことに、どっちも耳を貸そうとしない。互いに凄まじい殺気を放ちながら相手をにらみつけている。
「アレクセイ、その人を止めてくれよ！」
「断る」
彼はそう言い放ち、すらりと剣を抜いた。こ、こいつ……
「ビオレッタの敵は俺の敵だ、お相手する」
さらに、彼らの後ろにいる赤いローブを着た男性も杖を振りかざした。たぶんサポート担当だろう。つか、少しは止めろよ！
こうなったら仕方ない、戦おう。黙ってやられるのだけはごめんだ。
「イザベル、ビオレッタの相手は任せる！」
「ＯＫ」
「エド、ジェシカ、リンファン。　赤いローブの男を頼む！」

「おおっ」
「はーい」
「了解」
俺は、フレアバスタードの柄を握りしめてさらに言った。
「アレクセイは俺が倒す。みんな、絶対に勝って生き残れ！」
周囲から仲間たちの返事が聞こえてくる。よし、行くぜ！
「うおおおっ！」
フレアバスタードを引き抜いて一閃させると、燃え盛る炎が螺旋状に絡み合いながら飛んでいく。するとアレクセイは目を見開き、炎を斬り払った。
「なめるな！」
途端に爆発が起きたが、彼にさしてダメージは与えていないようだ。俺は続けてバスタードを振りきった。今度は直径一メートルくらいの火の玉がいくつも発生し、アレクセイめがけて飛んでいく。
「ぬうううっ！」
彼は縦横無尽に動いてかわしたものの、それらの爆発に巻き込まれた。
「ぐあっ！」
彼は爆炎に包み込まれて苦悶の表情を浮かべている。この辺でやめた方がいいだろうか。そう思って剣を引いたとき、凄まじい殺気を感じた。だ、誰だ？
視線を向けると、そこには目尻を吊り上げたビオレッタの顔があった。直後に閃光が走る。
「うわっ！」
慌ててその一撃をかわしたものの、体勢を崩してしまった。倒れかかる俺に、彼女の鋭い斬撃が襲いかかってくる。やばい、死ぬ！
「わああっ！」
思わず悲鳴を上げた瞬間、彼女の剣をイザベルがサーベルでがっちりと受け止めていた。あ、危ねえ……
イザベルがにやりと笑った。

「あなたの相手は……」
その前蹴りがビオレッタの腹を直撃する。
「私だよ！」
さらに、彼女はサーベルを振り下ろした。どす黒い衝撃波がビオレッタを弾き飛ばす。
「きゃあああっ！」
「あっはははは！　あっはははは！」
イザベルは黒い玉を連発し、倒れた相手に追い打ちをかけまくる。あ、悪魔かこいつ。いや、言うまでもないよね。見た目もばっちり悪魔だし……
そのとき、激痛が全身を襲った。いつの間にか空中に放り出されている。しまった、アレクセイを忘れてたよ！
「死ね！」
彼は俺を目がけて突き上げてきたが、体をひねってなんとかかわした。しかし、地面に落ちた途端に膝を強打して立ち上がれない。くそっ、こんなところで死にたくないぞ！
アレクセイが真っ向から斬り下げてくる。
「これで終わりだ！」
必死に斬撃を受け止めようとしたが、押しきられてしまった。奴の剣が左肩に食い込んでいる。ま、まずい……
「貴様は目障りだ、ここで消えろ！」
勝手なこと言いやがって、目障りなのはお互い様だ！
「おおおらああっ！」
俺はフレアバスタードを握りしめた。途端に火の玉が発生してアレクセイを直撃する。
「ぐあああっ！」
「もらった！」
すかさず火の玉を連発して奴を追い詰めていく。膝の痛みも和らいだし、そろそろ決着をつけてやろう。俺は立ち上がり、フレアバスタードを構えて疾走した。

「らあああああっ！」
狙うのはアレクセイの剣だ。あれを叩き落とせば奴も降参するだろう。
よし、間合いに捕らえた。これで終わり……
「ぐあっ！」
完全に勝ったと思ったが甘かったらしい。俺はアレクセイの放った衝撃波に弾き飛ばされていた。体勢を立て直すこともできないまま、床に叩きつけられてしまう。い、いてえ……
痛みをこらえながら立ち上がると、奴が肩で息をしながらこちらをにらみつけていた。髪や鎧が焼け焦げ、顔もところどころ黒くなっている。
「貴様……また腕を上げたようだな」
「ああ。男がいつまでも同じ位置にいると思うなよ」
「いよいよもって目障りだ。絶対に消えてもらう！」
「やれるもんならやってみな！」

死闘の結末

アレクセイの剣からまばゆい光がほとばしり、それが彼の全身を包み込んでいく。まずい、突進技がくる。以前喰らって死にかけたやつだ。

「行くぞ、信一！」

彼が閃光となって疾走した。くそっ、何度も同じ技が通じると思うな！

俺はフレアバスタードを振りかざしてそれに応じた。途端に獄炎が噴き出してアレクセイを直撃する。

「ぐあっ！」

奴の動きが止まった。今だ！

「らあああああっ！」

一瞬で間合いを詰めて真っ向から斬り下ろしたが、がっちりと受け止められてしまった。一旦剣を引いてさらに斬りつけようとすると、鋭い突きが連発で飛んでくる。

「くっ！」

さすがは八万人の頂点に立つ男だ。一筋縄ではいかない。

激しく襲ってくる突きをかわして足を払うと、後退してかわされた。さらに胴を狙って一閃したがこれも当たらない。続けて袈裟がけに斬りつけ、間髪入れず逆袈裟に斬りつけたがいずれもかわされている。いよいよもって強敵だ。

そのとき突然、アレクセイが叫んだ。

「調子に乗るな！　俺を誰だと思ってる！」

直後に凄まじい斬撃が降ってきた。かろうじて受けたが、そのまま押しきられそうな勢いだ。俺は相手の剣を横に受け流すと同時に、腹を思いきり蹴飛ばした。

「ぐあっ！」

アレクセイは顔をしかめて後退する。よし、今度こそもらった！

「喰らえ！」
フレアバスタードが轟然と火を噴き、奴を包み込んでいく。燃え盛る炎に炸裂する火の玉、弧を描いて飛びかかる赤い閃光。これで逃げることができたら神だ。
「くそっ！」
アレクセイは衝撃波をを連続で放って炎を押し留めようとしたが、とても間に合わない。彼の周囲で次々と爆炎が上がる。いくらSランクの猛者と言えどこれはたまらないはずだ。
俺はその間に疾走した。今度こそ、奴の剣を叩き落とすチャンスだ。ここで勝負を決めてやる。
アレクセイの剣目がけて斬りつけようとしたその瞬間、俺を光の玉が直撃した。
「ぐうっ！」
だ、誰だ横槍を入れたのは。これで決まるはずだったのに……
痛みのあまり屈み込むと、アレクセイのサポート担当が立っていた。赤いローブをまとっている上に口元を赤い布でおおっており、顔はよく見えない。彼は俺を見下ろしながら言った。
「そこまでだ。この勝負、私が預かる」
二十歳くらいの男の声だ。
「アレクセイも信一もたいしたものだ。いずれも死なせるには惜しい。今回はここまでにして双方剣を収めてもらおうか」
なんだこいつ、今さら。止める気があるなら、なんでもっと早くしないんだよ。
「信一、不満そうだな」
「当たり前だろ、なんで今まで……」
「そう怒るな、お前たちの実力をじっくり見せてもらいたかったんだよ」
「じっくり見る？　馬鹿言うなよ、三人と戦いながらどうやって……」
周囲を見回して凍りついた。エドワードたちが一人残らず倒れて

いる。
「エド！　ジェシカ！　リンファン！」
そのとき、赤いローブの男が静かに言った。
「安心しろ、殺してはいな……」
「てめええ！」
俺は男を目がけて疾走した。体の痛みなど吹っ飛んでいる。
「おらあああ！」
間合いに捕らえて斬りつけたが、奴は杖を突き出して受け止めている。こ、こいつ……
すかさず後退し、今度は火の玉を連発した。男は無言のまま弾き返す。まるで攻撃が通じない。
「お、お前……一体何者だよ！」
「私はオズワルド、創世神とでも思ってくれればいい」
なんだこいつ、自分を神だと思ってるのか。アブナイにも程がある。
じろじろと彼を眺めていると、いきなりイザベルがひざまづいた。
「オ、オズワルド様でいらっしゃったのですか！　そうとは気づかず、お仲間にとんだご無礼を……」
「気にするな、別に彼らを仲間とは思っていない」
俺はその間に、エドのそばへ駆け寄った。
「おい、大丈夫か！」
「うう……信一、ごめん」
よかった、生きてる。死んでたらどうしようかと思ったよ。
ジェシカとリンファンにも声をかけてみると、どちらも顔をしかめながら立ち上がった。こっちの二人も問題なさそうだ。
俺は改めてオズワルドに視線を移した。
「おい、オズワルド」
「なんだ」
「創世神と言うからには、お前がこの世界を創ったのか？」
「その通りだ」

到底信じられない話ではある。
「なんのために？」
「刺激的な動画を作るためさ」
俺は呆れ返った。そんなもの、コンピューターグラフィックでいくらでも作れるだろう。
「わざわざそんなことのために……」
「なんだって？」
オズワルドは「わかってない」と言わんばかりに首を振っている。
「信一、この世でもっとも刺激的な動画って、どんなものだと思う？」
それは人によって違うだろう。かわいい女の子が映ったものを刺激的と言う人もいれば、スポーツの大会を撮影したものを刺激的と言う人もいるんじゃないだろうか。
「さあ、わからないな」
「私は、人と人が殺し合うのが一番だと思ったんだよ。でもよくよく考えてみると、もっとすごいのがあることに気づいた」
「それは？」
「人間と未知の化け物が、命を賭けて戦うものだよ。コンピューターグラフィックじゃなくて実写版ね」

オズワルドの世界

俺は戦慄した。たかがそれだけのために、八万もの人間をこの世界に閉じ込めるなんて正気の沙汰じゃない。

いや、そもそもこの男はどうやってそんなことができたのだろう。首をかしげていると、オズワルドがまた話し始めた。

「新しい世界を創り出し、しかも他の世界に生きている人間をその中に放り込むなんて考えられない。そう思うだろう？」

「ああ」

「俺はいにしえの魔法を復活させて、それを可能にしたんだ」

あまりにも荒唐無稽すぎる。俺は苦笑を禁じ得なかった。

「信一、なぜ笑う」

「いや……魔法なんてものは想像の産物で、実在するものじゃないだろ」

「なぜ『実在しない』と言い切れるんだ？」

「科学的根拠がないからだよ」

すると彼は声を出して笑った。なんだこいつ。笑われたお返しのつもりか？

「科学的根拠がないだと？　この世の中のものはすべて科学で証明できるとでも思ってるのか？」

「いや、それは無理だけど……」

「だろう。なのになぜ『存在しない』と言い切れるんだ？」

そう言われるとなんとも……

「まあいい、それは置いておこう。俺は魔法について研究を重ねた結果、使えるようになったんだ。そこで……」

「そこで？」

「地元のテレビ局にかけ合って番組に出演させてもらった。『この事実を全世界の人たちに知らせないといけない』と思ったんだ」

ふんふん、なるほど。まあその気持ちはわかる。

「俺はその番組で様々な魔法を披露した。空中を浮遊し、ガラクタを金塊に変え、老人を若返らせ……ところが、次の日の新聞にはこんな見出しがあった。『奇跡の手品師オズワルド』ってな」
ああ、勘違いされたのか。困ったもんだね。
「思わずその新聞を破り捨てたよ。何が『奇跡の手品師』だ。手品には種も仕掛けもあるんだから、奇跡でもなんでもないだろうが！
俺が使ったのは魔法だ。魔法を使って空中を浮遊し、ガラクタを金塊に変えたんだ！」
オズワルドはぶるぶると震えた。その怒りがはっきりと伝わってくる。
「俺は何度も主張した。『これは手品じゃない、魔法なんだ』ってな。ところが信じてくれるのは子どもたちだけで、大人たちは信じないんだ。実際に使って見せてるのにこんな馬鹿な話があるか！」
彼の怒りはＭＡＸだ。アレクセイたちもエドたちも呆気に取られている。
「……俺はそのとき気がついた。信じない以前に、彼らは『信じようとしていない』んだとな。そんなものが実在したら、自分たちが培ってきた世界観が覆されてしまう。だから存在しないことにしようとしているんだよ」
オズワルドの声は、さっきと打って変わって小さくなっていた。すごい落胆ぶりだ。
「だから、俺は信じてもらうことをあきらめた。ひたすら自分の好きなように魔法を使うことにしたんだ。そこで真っ先に思いついたのが、刺激的な動画を作ることだった。俺の趣味は自作の動画を公開することなんでね」
ふーん、俺はやったことないなあ。
「ネット上に公開したらすごい反響だったよ。『怖すぎてびびりまくった』とか『あまりのリアルさに驚いた』とかね。『とてもＣＧとは思えない』なんてのもあったな。当たり前だろ、ＣＧじゃないんだから」

なるほどなるほど。
「ま、そういうわけだ。信一もアレクセイも、俺にとっちゃアクセスを稼ぐための立派な道具なんだよ。簡単に死なれちゃ困る。これからもがんばってくれ」
「……ふざけるな」
「え？」
俺はオズワルドをにらみつけていた。我慢にも限度がある。
「人を道具扱いしやがって、今すぐ元の世界へ戻せ！」
「だから、指定した敵キャラを倒したら帰してあげるよ」
「大体、八万もの人間が消えたら大問題だろうが！」
「ああ、それは」
彼は一呼吸置いてから話し始めた。
「代わりに精巧な偽物を置いてある。もっとも所詮はまがい物だから、本人と同じ記憶を持っていない。まあ『多くの人間が記憶喪失になった』ってニュースは流れるかもしれないけど、まさか本物が別世界に転送されてるなんて誰も思わないだろう」
偽物の人間まで作れるとは恐れ入った。魔法ってなんでもありだな。
「信一、教えておくことがある。お前は今や、八万人の中で最強だ。だが、それでも俺には勝てない。何せこの世界を創った人間なんだからな」
確かに、今こいつと戦って勝てる見込みはなさそうだ。俺は握り拳を作ったまま沈黙した。
「でもな、信一。お前はまだまだ強くなる。あの街で手に入れられる剣や杖は、俺が魔力を注ぎ込んで作ったものだ。それらを手にすれば誰でも魔法を使うことができる」
彼は杖を突きつけた。できればへし折ってやりたいところだが、どうにもならない。
「俺に文句があるのなら、もっと強い武器を手に入れてから挑戦しろ。勝つことができたら無条件で元の世界に帰してやる」

「その言葉、忘れるなよ！」
「おお、忘れるもんか。お前の挑戦を楽しみにしてるよ」

残虐なる守護者

さて、非常に腹立たしい限りなのだがもうしばらくこの世界にいる必要があるようだ。

俺はイザベル、エドワード、ジェシカ、リンファンを引き連れて二階へ登った。他のチームの人たちはすでに登ってしまっている。少し急いだ方がいいかな？

二階は大広間になっていた。奥の方に台座があり、その上に金塊が置いてある。なんだ、簡単に見つかったじゃないか。

すでに他のチームの人たちが、金塊を囲んでわあわあ騒いでいる。誰が取るかでもめているらしい。一つしかない以上こうなるだろうと思った。さて、どうしたもんかね。

そのとき、広間の中央に黒い玉が現れた。俺が驚いているうちにどんどん大きくなっていく。

「な、なんだあれ……」

やがてそれは、漆黒の鎧に変わった。中世ヨーロッパの騎士が着るような全身鎧だ。身長は俺の二倍くらいで、手には巨大な剣を握っている。外側からじゃ見えないけど、たぶん人が入っているんじゃないかと思う。

巨人は金塊に群がっている人たちに視線を向けた。まずい、やられる。俺は思わず叫んだ。

「みんな逃げろ！　危ないぞ！」

彼らは巨人を見て仰天し、散り散りになって逃げ出した。奴は剣を振り上げて狙いを定めている。このままじゃ何人かやられそうだ。

「ジェシカ、リンファン、撃て！」

二人が矢を連射した。それらは巨人にぶつかって爆発したが、まるで効いていない。こうなったら俺の出番だ。

「うおおおっ！」

フレアバスタードから炎が噴き出し、渦を巻きながら巨人目がけ

て飛んでいく。これも見事に直撃したものの、まったくダメージを与えていない。
「くそっ、マジか……」
俺が突撃しようとしたそのとき、巨人は近くにいる男性に向かって剣を振り下ろした。その馬鹿でかい体に似合わず凄まじい速さだ。くそっ、間に合わない！
次の瞬間、巨大な剣が男性を叩き斬った。血飛沫が上がり、鮮血が周囲の床を染めていく。うっ、人間が縦に真っ二つに……。
他のチームの人たちが次々と矢を連射し、エネルギー弾や衝撃波をぶつけた。連続で爆発が起こり、煙が立ち込める。しかし、やはり効き目はない。もしかしてこいつ、無敵キャラ？
俺はオズワルドの姿を探した。この世界を創ったのはあいつなんだし、巨人の弱点も知っているはずだ。
「オズワルド、オズワルド！」
叫んでいると、彼がひょっこりと現れた。
「なんだよ」
「あの馬鹿でかい奴は不死身なのか？」
「いや、それはない」
「弱点があるなら教えろ！」
「自分で探せよ、そんなもん。俺に頼るな」
くそっ、このままじゃ全滅するぞ。
「イザベル！」
「なーに？」
「奴の弱点を知らないか？」
「ごめん、知らない」
ちくしょう、どうすりゃいいんだよ。あんなの倒しようがないぞ！
その間に、巨人が剣を一閃させた。逃げきれなかった二人が胴体を斬り離されて転がる。ま、また犠牲者が。
駄目だ、さすがにこれ以上戦うのはまずい。一旦退却……と思ったが、背後の扉が閉まっていて開かない。ちょ、冗談だろ。ふざけ

るなよ！
「オズワルド、どうなってんだ！」
「ああ、奴を倒さないと出られないんだよね」
「ふざけんな！」
俺はフレアバスタードを構えた。こうなったらやるしかない。
「ジェシカ、リンファン！　奴の前面を狙って撃て！」
「うん」
「了解」
「エドはその間に背後に回って、奴の足を突くんだ！」
「わかった」
「イザベルは顔面を狙ってエネルギー弾をぶちかませ！」
「はーい」
「全員、俺が『攻撃やめ』と言ったら即座に攻撃を中止しろ。俺が正面から奴をぶった斬る！」
四人が力強くうなずく。
「さあ、行くぞ！　絶対に生きて帰るんだ。散開！」
皆が指示に従い散っていく。正直なところ、俺が斬ったところで効果はないだろう。でも万が一ということもある。何もしないでやられるよりはよっぽどマシだ。
ジェシカとリンファンが凄まじい勢いで矢を連射し、爆風が巻き起こった。続けてエドが足を突いたが、やっぱり効果はないようだ。イザベルのエネルギー弾も炸裂しているけど、奴はうんともすんとも言わない。こいつ、本当に不死身なんじゃないだろうか。
フレアバスタードを構えていると、奴は俺を目がけて剣を振り下ろした。今だ！
「攻撃やめ！」
俺は巨人の剣をかわし、振り下ろされた奴の腕を踏んで大きく跳び上がった。
「うおおおっ！」
渾身の力で顔面を斬り下ろした瞬間、ものすごい金属音が響き渡

った。地面に降り立ってよく見ると巨人の首から上がなくなっている。あれ、もしかしてやったのか？
ところが、奴はすかさず斬りつけてきた。ちょ、どうなってんだ。こんなの倒せないっつうの！
必死に斬撃をかわしていると、イザベルが近寄ってきた。
「大変なことになったねえ」
「なんだ、その呑気な態度は！」
「だって、あせってもしょうがないでしょ」
「そりゃそうだけどさ」
「きっとどこかに急所があると思うんだよね、生き物である限りは」
……つか、あれは生き物なのか？
「イザベルはどこだと思うんだよ！」
「やっぱ鎧の中とかかな」
なるほど。確かに、鎧の上から攻撃しても効かないしね。
「イザベル、魔法で俺を奴の上まで飛ばせるか？」
「無理無理、そんな魔法使えないよ」
「じゃあ俺を抱えて飛べるか？」
「え……え？」

守護者の弱点

イザベルは巨人の剣をかわしながら俺に言った。
「できなくはないと思うけど……危険だよ」
「危険なのは承知の上だ、奴の頭上につれてってくれ」
「わかった、じゃあしっかりつかまって！」
彼女にしがみつくと、その体がゆっくりと舞い上がった。顔をしかめているところを見るとかなり辛いようだ。
「お、重ーい！」
「なんとか頼む！」
「うん、がんばる……」
やがて巨人の頭上まで来た。奴の首から中をのぞいてみると空洞になっている。げっ、嘘だろ。これじゃ攻撃しても意味がないぞ。
いや、待て。鎧の中に赤く光る玉が見える。あれが奴の核か！
「イザベル、ありがとう。ここで降りるよ」
「えっ、ちょ……」
「生き残ることができたらまた会おう」
俺は手を離し、巨人目がけて落下した。上からイザベルの声が聞こえる。
「信一、信一！　無茶しないで！　一人でかっこつけないでよ！」
別にかっこつけてるわけじゃない、なんとしても生き延びたいだけだ。勘違いして惚れるなよ。あ、もう惚れてるんだっけ。
俺は巨人の肩に降り立ち、首の中に剣を入れて赤い玉を突き刺した。これで終わりだ！
「うおらああっ！」
フレアバスタードが火を噴き、鎧の中で爆発が起こる。巨人は必死に振り落とそうともがいているけど、もう遅い。
「とどめだ！」
続いて大爆発が巻き起こり、核を粉々に吹き飛ばした。奴の巨体

がぐらりと傾き崩れ落ちる。よっしゃあ、仕留めたぜ！
地面に降りて肩で息をしていると、エドが駆け寄ってきた。
「信一、さすがだよ！」
「ありがとう」
ジェシカも声をかけてくる。
「やっぱ強いね、たいしたもんだよ」
「いや、まぐれと言うかなんと言うか」
ひたすら照れていると、イザベルに思いきり抱きつかれた。ちょ、爆乳が俺の胸に……勘弁してくれ。
「信一、よかった……心配したよ」
「あ、ありがとう」
「さすがは私の彼氏だね」
……え、いつから俺はお前の彼氏になったんだ？
それはさておき、金塊はどうなったんだろう。視線を向けると前回と同様に取り合いが始まっていた。さて、どうしよう。俺もほしいけど、強引に割り込むのもなんだし。
やがて、鉄の鎧を着込んだ二十歳くらいの男性が金塊を手にして叫んだ。
「もーらい！　やったぜ！」
ところが、金塊ははらはらと崩れ去ってしまった。彼は呆然と立ち尽くし、周りの人たちも呆気に取られている。俺はオズワルドに向かって叫んだ。
「おい、どういうことだよ！」
「何が？」
「なんで金塊が消えたんだ！」
「偽物だからだよ。がんばって本物を探してくれ」
……こいつ、本当にいい性格してるな。あんなごつい敵と戦わせておいて、よこすのは偽物か。
俺たちは手分けして広間の中や他の部屋を探したが、それらしきものは見当たらない。上に続く階段もないし、どうすればいいんだ

ろう。
　他のチームの人たちも必死になって探している。このままじゃどうにも……と思っていた矢先、リンファンが近寄ってきてささやいた。
「ねえ、なんか周りの人たちが減ってきてない？」
　見回してみると、確かにその通りだった。四十人くらいいたのが半数になっている。
「あれ、これは一体……」
「きっと、誰かが抜け道を見つけたんだよ。でも他の人に教えるとまた金塊の取り合いになるから、自分たちだけこっそりと先に進んだんだろうね」
　なるほど。ってことは、二十人くらいが先行したわけだね。そんで俺たちはいまだに進めないと。
　……って、出し抜かれたああっ！
「エド！　抜け道は見つからないのか？」
「うーん、ないなあ」
「ジェシカは？」
　って、ジェシカがいないし。
「おーい、ジェシカー！」
　叫んでいると、彼女が走ってきた。なんか息を切らせている。
「向こうの部屋に変なものが！」
「ナイス！　よし、みんな行くぞ！」
　急いでその部屋に向かうと、三畳くらいの広さだった。中には真っ白な壁と、群青色の絨毯が敷かれた床があるだけだ。
「ジェシカ、どこにあるんだ？」
「ほら、ここに」
　彼女が絨毯をめくると、その下から魔法陣が現れた。よくこんなものを見つけたな。
「おお、確かに」
「この上に乗れば、どこかに転送されるんじゃない？」

「なるほどね、じゃあ試しに何か乗っけてみるか」
俺はオズワルドを引っ張ってきた。こいつなら、どこに転送されようが死ぬことはないだろう。
「オズワルド、この魔法陣はどこに続いてるんだ？」
「さあな、自分で確かめろ」
「それじゃ危険だから聞いてるんだよ」
「答えるつもりはないね」
「じゃあいい、試しにお前が乗ってみろ」
「創造主に向かってその態度……」
「いいからさっさと乗れよ、張り倒すぞ」
彼はぶつぶつ言いながら魔法陣に乗った。途端にその体が光輝き、少しずつ消えていく。やっぱりどこかに転送されるらしい。
やがてオズワルドは完全に消え去った。とりあえず罠ではなさそうだ。俺たちは一人ずつ魔法陣に乗り、彼の後を追った。

アビスドラゴン

俺たちはだだっ広い荒野に出た。乾いてひび割れた地面が広がり、木はおろか草一本生えていない。空はどんよりと曇って薄暗く、陰鬱な雰囲気をかもし出している。

ちょ、どこまで続いてるんだこの荒野は。めちゃめちゃ広いぞ。いくら目をこらしても地平線しか見えないど……と思ったら、向こうになんか見える。あれはなんだ、人か？

近づいてみると、他のチームの連中だった。人数は五人で、全滅している。う、嘘だろ……Aランクがこんなにあっさりやられるなんて、どんだけやばい敵がいるんだよ。

それにしても、他の人たちはどこにいるんだろう。俺たちは目をこらしながら歩き続けた。

リンファンがぽつりと言う。

「まずいね、これは」

「何が？」

「他のチームが先に行ってから、まだたいして時間はたってないよね。それなのに姿が全然見えないのはおかしいと思わない？」

「確かに」

「私が思うに、それぞれが別の場所へ転送されたんじゃないかと思うよ。オズワルドもいないし」

そう言えばその通りだ。ここにいるのは俺とエド、ジェシカにリンファン、イザベルだけ。洋館に残っていた連中にも魔法陣のことを教えたのに、誰一人として現れない。

つまり、俺は自分のチームだけで強敵と戦わなきゃならないってことだ。しかもAランクを全滅させるような強敵と。

戦慄していると、イザベルが耳元でささやいた。

「どうしたの、顔色が悪いよ」

「いや、その」

「リーダーがそんなだとチームの士気が下がるよ」
「そ、そうだな」
忠告してくれるのはいいけど、耳元に息を吹きかけるのはやめてくれ。あと、体を密着させるのも勘弁してほしい。
「それにしても、敵はどこに……」
つぶやいた瞬間、雲を突き破って竜が急降下してきた。凄まじいでかさだ。やばい。
「来たぞ、上だ！　戦闘態勢！」
俺の声に応じて皆が武器を構える。その間に竜は地面に降り立った。頭にはまっすぐ伸びた角があり、全身真っ赤で二足歩行、高さは五階建てのビルに匹敵する。こ、こんな奴相手にどうしろっつーんだ。
「イザベル、こいつの名は？」
「アビスドラゴンだね」
って、聞いたことがあるな。これを倒せば元の世界に戻れるとかなんとか。
「弱点はないのか？」
「さあ」
どうやら正面から戦うしかなさそうだ。
「ジェシカ、リンファン！　奴の目を狙って撃て。エドは背後に回って足を突くんだ！　イザベルは俺についてこい！」
ジェシカたちが矢を連射した。それは竜の顔面を直撃して爆発を起こしている。その間にエドが後方へ回り、足元目がけて強烈な突きを放った。だが、奴は揺るぎもしない。
イザベルが心配そうに話しかけてくる。
「ねえ、私はどうするの？」
「あいつはいずれ、攻撃しようと口を開くだろう。そのときにエネルギー弾を叩き込んでくれ」
「信一は？」
「隙を狙って斬りつける」

そのとき、竜の首が大きく後ろにしなった。口元からまばゆい光を発している。どうやら何か噴き出すつもりらしい。
「来るぞ、全員退避！」
仲間たちが散り散りになって避難した途端、アビスドラゴンが真っ白に輝く息を噴き出した。それが地面を直撃したとたんに轟音が響き渡り、ものすごい量の蒸気が湧き上がる。こ、こんなの喰らったら即死だぞ。
「イザベル、撃て！」
「りょーかい！」
彼女が放った漆黒のエネルギー弾が、竜の口元で炸裂した。その体は一瞬震えたが、あまり効いていないようだ。くそっ、本当にどうすりゃいいんだよ。このままじゃ全滅するぞ。
アビスドラゴンが体を回転させた。その尻尾を大きくしならせ、俺たち目がけて薙ぎ払ってくる。皆が必死にかわす中、エドが一撃を喰らって弾き飛ばされてしまった。
「エド！」
叫んでいる間に、今度は竜の足がジェシカ目がけて襲いかかる。彼女は必死に逃げているが、このままじゃやられるのは時間の問題だ。
「こいつ！　お前の相手はこっちだ！」
フレアバスタードが火の玉を連発した。竜の顔面で大爆発が起こる。なんとか奴の注意をこっちに向けさせることができたものの、ダメージらしいダメージは与えていない。
「イザベル、奴の背後に回れ。俺が引きつけている間に、後頭部を狙ってエネルギー弾を撃つんだ」
「わかったよ」
俺は彼女が舞い上がったのを見届け、アビスドラゴンに向かってフレアバスタードを突きつけた。
「死して屍、拾うものなし！」
直後に奴の両手が光り、白いエネルギー弾を発射した。そんな小

技にやられるつもりはない。横に走ってかわすと、それらは俺の後方の地面に激突して大爆発を起こした。さらに竜の輝く息が襲ってくる。

一瞬でも気を抜けば即死。そんな状況で俺は笑っていた。今までに、これほのスリルを味わったことは一度もない。高揚感が全身を駆け巡る。

「やってやるさ」

思わずつぶやいた。例え死んだとしても、これほどの敵にやられたのなら恥でもなんでもない。相手にとって不足なしだ。さあ、いくぞ！

激闘の終焉

俺はフレアバスタードを竜に向けた。炎が渦を巻いて飛んでいき足に激突する。それでも奴は倒れない。

「らあああっ！」

さらに火の玉を連発してみた。これも足にぶつかって大爆発を起こしたが、やはりダメージは与えていないようだ。

「くそっ！」

その間にもエネルギー弾が次々と降ってくる。このままではいずれやられてしまう。

折れそうな心を必死で支えていると、アビスドラゴンの頭部で爆炎が上がった。イザベルが一発かましたらしい。よし、チャンスだ！

「うおおおっ！」

俺は疾走し、渾身の力でアビスドラゴンの足を斬りつけた。今のままでは勝ち目がないが、バランスを崩して倒れてくれればこっちのものだ。赤い閃光が走り、青い血飛沫が上がる。しかし、まだ表面を傷つけたに過ぎない。

「もう一丁！」

再び強烈な斬撃を浴びせると、竜の足がぱっくりと裂けた。この調子だ。

「うおらあああっ！」

一気に突進し、奴の傷にフレアバスタードを突き刺した。さらに柄を握りしめてエネルギーを注入する。これで爆発させればなんとかなるだろう。

爆風に巻き込まれてはたまらないので、すかさず剣を引き抜いて跳び下がった。そのときだ。

「グガアアアッ！」

アビスドラゴンが咆哮し、その体を大きく回転させた。直後に尻尾の一撃が襲ってくる。げっ、よけきれない！

「ぐあっ！」
避ける間もなく見事に喰らってしまい、跳ね飛ばされた。竜はバランスを崩すようすもない。その足は爆発したものの表面を削っただけのようだ。
慌てて立ち上がろうとしているうちに、奴が踏み潰そうとしてくる。
「くうっ！」
必死に転がって避けると、今度は大きな口を開けて噛みつこうとしてきた。並んだ鋭い牙が眼前に迫る。まずい、やられる！
俺が歯を食いしばった瞬間、竜の口の中で爆発が起こった。ジェシカとリンファンが撃ったらしい。さらに漆黒の玉が直撃する。横を見るとイザベルが立っていた。
「信一、がんばって！　あなただけが頼りだよ！」
「わかった、任せてくれ！」
すぐ前にアビスドラゴンの顔がある。俺は疾走してその上に跳び乗った。今度こそ仕留めてやる。
「喰らいやがれ！」
その目に深々と剣を差し込むと、凄まじい絶叫が響き渡った。奴は立ち上がって振り落とそうとしているがそうはいかない。俺はその角とフレアバスタードをしっかりとつかみ、柄を握りしめてエネルギーを注ぎ込んだ。
「いい加減に沈め！」
竜の頭の中から轟音が聞こえた。爆破成功だ。いくらなんでも、これはたまらないだろう。
「グギャアアアッ！」
アビスドラゴンが激しく首を振り、ついに俺は落っこちてしまった。すかさずイザベルが飛んできて受け止めてくれる。
「信一、もう少しだよ！」
「ありがとう、あいつの頭上を目指して飛んでくれ！」
竜の真上まで来たところで俺はすかさず飛び降り、同時にその顔

を真っ向から斬り下げた。
「おおおらあああっ！」
竜の絶叫が響き渡り、青い血液が四方八方に飛び散る。それはいいが、このままでは地面に落下して死んでしまう。そこで、フレアバスタードを下に向けて炎を噴射した。地上数メートルのところで体が浮き上がり、その手をイザベルがつかんで引き上げてくれる。
ゆっくりと地面に降り立って見上げると、アビスドラゴンが膝をついて倒れるところだった。これで仕留めたかと思ったがそうでもないようだ。奴は俺を目がけて輝く息を吐き出した。
「しぶとい！」
俺は横に跳躍してそれをかわし、すかさず疾走した。牙が並んだ巨大な口が見える。
「これで終わりだ！」
その中にフレアバスタードを深々と突き刺し、さらにエネルギーを注入した。直後に竜の頭部が爆発し、巨体が地響きを立てて崩れ落ちる。完全終了だ。
「やった……」
力が抜けて屈み込んでいると、イザベルに抱きつかれた。ちょ、爆乳が顔に……息ができねええええー！
「さっすがー！　すごいよ信一！」
「もがもが」
「今まで生きてきて、あなたほど強い人を見たことない。超一流だよ！」
「んがっ、んがっ！」
「ねえねえ、お願いだから私とつき合ってよ！」
……あっ、意識が遠くなってきた。竜じゃなくて爆乳に殺される。
「え、ちょ、信一！　どうしたの！　ねえ！」
激しい往復ビンタをされて、俺は息を吹き返した。必死でがんばったのになんだよこの仕打ちは。
そうだ、エドはどうなったんだ。あいつも跳ね飛ばされたよな？

「エド、エド！」
「僕なら大丈夫だよ」
彼は満面に笑みを浮かべて立っていた。ジェシカやリンファンも俺を囲んでほほえんでいる。
「エド、よかった……」
「信一、ありがとう。君のおかげで生き延びることができたよ」
「いや、こっちこそ」
ジェシカやリンファンも俺の手を取り礼を言ってくる。とにかく全員無事でよかった。全滅した人たちは気の毒だったけど。

異世界からの帰還

みんなで勝利の喜びを分かち合っていると、倒れたアビスドラゴンが金塊に変わった。さて、誰がもらえばいいだろう。
「ほしい奴はいるか？」
応じる人間はいなかった。捨てるのももったいないので一応もらっておこう。
「ところで、どうやって帰るんだ？」
イザベルに聞くと彼女は周囲を見回した。
「あれー？　オズワルド様が来ると思うんだけど」
え、本当かよ。どこにも姿が見えないぞ。
そのとき目の前の空間がぐらりと揺れ、赤いローブ姿の人間が姿を現した。オズワルドだ。
「やあ、アビスドラゴンを倒したみたいだね。おめでとう」
「これで俺たちは帰れるのか？」
「ああ、今すぐ帰してあげるよ。それでね……」
彼は全員を見回しながら言った。
「君たちは今後、この世界と元の世界を自由に行き来できる。やり方は簡単だ。『ヘブンズ・ウォーリア』ってサイトを開いてログインすればいい。一般の会員は動画を視聴できるだけだけど、君たちはこの世界に来ることができる」
「帰るときは？」
「元の世界に戻れるよう強く念じるだけだ。簡単だろ？」
確かに簡単だ。でも正直な話、二度とこんなところに来たくない。
沈黙していると、オズワルドがみんなに一枚ずつカードを渡した。
「それにログイン用のパスワードが書いてある。それじゃあ転送していいかな？」
「おい、この金塊はどうするんだよ」
「ああ、忘れてた。イザベルに預けておけばいいよ。またこの世界

に来たときに使うことになるだろうから」
「元の世界に持っていけないのか？」
「残念ながら無理だね」
なんだ、じゃあこんなものに興味はない。さっさと帰ろう。俺はエドワードの手を握りしめた。
「エド、今までありがとう」
彼は笑顔で握り返してくる。
「こちらこそ。信一、元気でね」
ジェシカも手を握ってきた。
「信一、あなたのことは忘れないよ」
「ああ、俺もだ」
リンファンも頬をかきながら言う。
「……ありがとね」
「俺の方こそ世話になったよ、ありがとう」
最後にイザベルを見ると、思いっきりうつむいていた。
「おい、大丈夫か？」
「信一、帰っちゃうんだ……」
「あ、ああ」
「ここに残って私といちゃいちゃしようよ」
「申し訳ないけど、俺は元の世界に戻りたいんだ」
「じ、じゃあメールアドレス教えて！」
「え？」
「いつか、日本語覚えて会いにいくからさ」
「う、うん」
メアドを教えると彼女は涙ぐみながら手を振った。元の世界に戻ったら、お互い言葉が通じなくなるだろう。なんだか悲しいものがある。
やがてオズワルドが声をかけてきた。
「じゃあ転送するぞ、いいか？」
皆がうなずく。イザベルがめそめそ泣いているのが気の毒だけど

仕方がない。
「それっ！」
彼が両手を上げた途端、周囲の空間が光に包まれた。視界が白一色に染まっていく。やがてそれが収まると、俺は自分の部屋で椅子に座っていた。目の前にはデスクトップのパソコンがある。
ヘブンズ・ウォーリアのサイトを検索すると、一発で見つかった。例の動画サイトだ。会員でなくてもいくつかの動画を視聴できるらしい。
試しに観てみると、高校生くらいの女の子たちがゴブリンの群れと戦っていた。彼女たちは剣を持っているが、まるで腰が入っていない。あまりの危なっかしさに、とても観ていられなかった。
無料で閲覧できる動画の他に、有料のものもあるようだ。こっちはログインしないと駄目らしいが、一応ラインナップだけは確認することができる。ちなみに一番上にあるのはこんな動画だった。
「Ｊａｐａｎｅｓｅ　ＶＳ　Ａｂｙｓｓｄｒａｇｏｎ」
……って、俺がアビスドラゴンと戦ったときの映像じゃないか。観たいような観たくないような。
まあいいや。もう二度とあんなところに行くつもりないし、どうでもいいよね。
とりあえず、疲れきっていたので寝ることにした。これからはいつも通りの生活が待っている。なんの変哲もない代わりにかなり安全だ。ああ、よかったよかった。

翌日、俺は自分の部屋のベッドの中で目を覚ました。さて、今日はどんな魔物を倒しに……って、違う。学校に行くんだよ学校に。つか、今日は何曜日だっけ？
着替えて二階から一階に降りると、台所で母親が朝食を作っていた。こんな普通の光景を見るとほっとする。
「母さん、おはよう。今日って何曜日？」
「あれ、まだ記憶喪失なの？　水曜日だよ」

なんだ記憶喪失って、失礼な。ちょっと忘れただけじゃないか。
ん、待てよ。そう言えば俺のいない間、オズワルドが作った偽物が代わりを努めてたんだっけ。確かそいつには記憶がないとかなんとか。だからこんなことを言われるんだね。
まあいいや、さっさと朝飯食って高校に行こう。俺は、ご飯と味付け海苔と味噌汁と焼き鮭を食べて家を出た。

優奈の受難

さて、今日は雲一つない快晴だ。実に気分がいい。
満員電車に揺られること三十分、菅田駅に着いた。ここから十分ほど歩けば俺の高校がある。すぐそばを同じ制服の男子生徒たちが通りすぎていく。誰か知ってる奴がいないかな？
あ、いた。同じクラスの相原優奈。こいつは大のゲーム好きで俺と話が合う。ちなみに外見はかなりかわいい。うっすらと茶色に染めたショートボブ、ぱっちりした目、整った輪郭、つやつやと輝くベビーピンクの唇。中肉中背で、すらりとした手足をしている。俺はすぐに声をかけた。
「お早う、相原！」
「え……あ？」
「こないだ貸した『バーゲン無双』どうだった？」
「バーゲン……ムソウ？」
なんだこいつ、寝ぼけてんのか？
「ほら、バーゲン会場で主人公のおばちゃんが他の買い物客をぶっ飛ばしながら服を買いあさるやつだよ」
「あ、ああ、あれね！　おもしろかったよ」
「どんなところが？」
「え、タイトルかな……」
こいつ、やっぱりおかしい。
相原は普段おとなしいが、ゲームのコントローラーを握ると性格が変わる。アクションやシューティングが得意で、とにかく敵を吹っ飛ばしまくるのが大好きだ。バーゲン無双なんかやった日にははまりまくること間違いない。
それなのにこの反応、絶対に変だ。
「相原、なんかあったの？」
「え、何も」

「いや、あっただろ。変だよ」
「え、どこが？　いつも通りだよ」
彼女が作り笑いを浮かべているのを見て、かなり心配になってきた。この不自然さはなんだろう。
「どっか体の具合でも悪いのか？」
「そんなことないよ」
なんだか知らないけど、しばらくようすを見てみよう。そのうち何かわかるかもしれない。
学校に着いて校門を通った後、いよいよ俺は疑念を抱いた。彼女が「私の教室どこだっけ？」などと言い出したのだ。記憶喪失なんじゃないだろうか。
「あのさ、相原」
「ん？」
「俺の名前、覚えてる？」
「えっ」
彼女は目を見開いたまま硬直している。まさかと思ったけど……確定だ。こいつ、記憶をなくしてる。いや、待て。単にからかわれてるだけってこともあるぞ。
「嘘だろ、何かの冗談だよな？」
「えっと……」
彼女はひたすら硬直している。やばい、これは冗談を言ってる雰囲気じゃない。ガチで記憶喪失だ。
「相原、早く病院行けよ。学校来てる場合じゃないだろ！」
「え、そんなことないって。大丈夫だよ」
「ど、どこが……」
いくら忠告を繰り返しても、彼女は言うことを聞こうとしなかった。以前はこんなに頑固じゃなかったはずだ。もはや別人にすら見える。
あー、なんてこった。相原のこと好きだったのに……こいつときたら、俺の名前すら思い出せないんだ。もう最悪だ、最悪だよ。

うつむきながら教室に入ると、クラスメートたちが一斉にこっちを見た。気が重くてたまらないけど挨拶はしなきゃな。
「おはよー……やばいよ、相原が記憶喪失になってる」
小さな声でそう言うと、周囲の男子が集まってきた。その中の一人が話しかけてくる。
「え、マジで？　お前の記憶喪失が移ったんじゃね？」
ちょ、待て。そんなものが移るわけないだろ。大体、俺は記憶喪失じゃ……ん、待てよ？
「ああっ！」
俺は思わず叫んだ。近くにいた男子たちがびくっとして後ずさる。
「相原、お前偽物だろ！」
「え、え？　なんの話？」
「とぼけるなよ、きっと本物はヘブンズ・ウォーリアの中にいるんだろ？」
周囲のクラスメートは目をしばたたいて沈黙している。やがてその中の一人がおずおずと口を開いた。
「ヘブンズ・ウォーリアって動画サイトだよな？　人間と魔物が戦ってるやつ」
「そうだよ、よく知ってるな」
「俺は会員なんだよ。相原が中にいるってどう言うこと？」
「説明すると長くなる」
「気になるなあ。昨日の夜、サイトを観てたんだよ。そしたら、相原によく似た女の子がゴブリンに襲われてる動画が……」
「なんだって！」
俺は慌てて携帯を取り出し、急いでヘブンズ・ウォーリアを検索した。周りのクラスメートが話しかけてくるけどそれどころじゃない。
「相原、待ってろ！」
ログインした途端、周囲がまばゆい光に包まれた。まさかもう一度行くはめになるとは……。

再び視界が開けたとき、俺は街の近くにある荒野に立っていた。
着ているのは高校の制服で、右手にフレアバスタードを握っている。
「相原、どこだ！　返事してくれ！」
叫びながら走り回っていると、ゴブリンの群れが襲いかかってきた。お前ら、相手を見てから喧嘩を売れよな。
「おおらああっ！」
連中を一瞬で叩き斬って再び彼女を探したけど、さっぱり姿が見えない。もしかして街へ行ったんだろうか。それとも魔物に食われたとか？
とにかく、ここにいてもしょうがない。俺は急いで街へ向かった。

優奈との再会

街の中に入った俺は格付け協会へ向かった。連中なら、この世界に来た人間のことを把握しているはずだ。

レンガ造りの建物が並んだ目抜き通りを走っていくと、協会にたどり着いた。目指すは五階だ。イザベルを呼び出して手を貸してもらおう。

五階にあるカウンターの中では、相変わらずイザベルがパソコンに向かっていた。

「おーい、イザベル！」

「え？　あれ？　何か忘れ物？」

彼女は目をしばたたいている。俺はすかさずまくし立てた。

「相原優奈って女の子が来なかったか？　俺のクラスメートなんだ」

「ああ、来たよ。日本の高校生だよね」

よかった、生きていてくれたか。

「どこに行ったか知らないか？」

「さあ、そこまではちょっと……」

「そうか、ありがとう」

きっと彼女はこの街のどこかにいるはずだ。俺は急いで協会を出ると、付近を歩いている人たちにたずねて回った。しかし誰も知らないようだ。うーん、困ったな。

電光掲示板の近くまで来たとき、一人の女の子が立ち尽くしているのが見えた。ピンク色のパジャマを着て鞘に入った短剣を握っている。相原だ、間違いない！

「おーい、相原！」

彼女はゆっくりこっちを見た。やばい、目が虚ろだ。

「高木……君？」

「よかった、無事だったんだな……よかった」

「高……ふえ……」

「ん？」
「ふええ、ふえええええーん！」
彼女は泣きながら抱き着いてきた。よほど怖い目にあったんだろう。
「相原、どうやってここに？」
「昨日の夜眠れなくって、自分の部屋でネット見てたんだよ。そしたら変なバナー見つけて、ついクリックしたらここに……」
ああ、『異世界に行けます』とかなんとかいうやつか。
「それから変な小人に追っかけられて、狼と戦わされて、『あなたはFランクです』とか言われて……」
なるほど、俺とほぼ同じ流れをたどったわけだ。ランクは違うけどね。
「ところで相原、靴をはいてるみたいだけどどこで……」
「裸足で歩いてたら、協会の人が見かねてくれたんだよ。でも服はくれなくて」
ああ、だからパジャマのままなんだね。
「そうだ、怪我はないか？　ゴブリンや狼と戦ったんだろ？」
「ないよ。戦ったって言うか、ひたすら逃げてたから」
まあそれが正解だろうな。いくらがんばったところで狼を倒せるとも思えないし。
さて、問題はどうやって彼女を元の世界へ戻すかだ。アビスドラゴンレベルの敵と戦わせたら瞬殺されるだろう。エドワードたちは強かったけど、相原の戦闘能力はゼロに等しい。なんせ運動音痴だし。
「高木君、どうすれば家に帰れるの？」
「ボス敵を倒せば帰れるよ」
「それって強いの？」
「めちゃくちゃ強いよ。気を抜いたら一瞬でやられるくらい」
彼女は完全に沈んでしまった。やばい、なんとかテンションを上げないと。

「大丈夫だって、心配すんなよ。俺がついてるからさ」
「え、高木君って強いの？」
「あれを見てくれよ」
俺は電光掲示板の一番上を指さした。そこにはこんなことが書いてある。
「シンイチ・タカギ　ランクＳ　５７０４７８０７ポイント」
「え、何？　ランクＳって……」
「この世界の人間は、強さによってランク付けされてるんだよ。Ｓは一番上なんだ」
「へー、すごーい！」
「あのポイントはお金みたいなもんだよ。１００ポイントもあれば豪華な飯が食える」
「え、じゃあ高木君って超リッチじゃん！」
「うん、まあね」
「すごいすごーい！」
相原の瞳が輝いている。ああ、よかった。あんなにへこまれたらこっちまで参ってしまう。
そうだ、いいことを思いついた。俺のポイントを使って、こいつに強い武器や防具を買ってやればいいんだ。そうすりゃボス敵相手でもなんとかなるだろ。
「相原、そのかっこじゃまずいだろ。服をなんとかしようよ」
「でも、私はポイントがゼロみたいだし……」
「俺のポイントを使えばいいよ」
「え、いいの？　ありがとう！」
俺たちは武器と防具を扱っている店に向かった。中に入ると色々な武器が展示してある。剣、槍、クロスボウ、杖、鎌、薙刀、日本刀。防具も革の鎧や鎖かたびら、鉄の鎧や胸当てなど様々だ。
いちいち選ぶのも面倒なので、俺は店員に声をかけた。
「一番強い武器と防御を見せてください」

店員は三十歳くらいの男性だ。
「お客様がお使いになられるのですか？」
「いや、こっちの女の子です」
「さようですか。失礼ですが、ランクはいかほど……」
「え？」
なんで、武器や防具を買うのにランクが関係あるんだろう。聞くなら所有ポイントじゃないのか？
「あの、それってなんのために答えるんですか？」
「実は、ランクによって使える武器や防具が決まっておりまして」
げっ、マジで？
「じゃあSランクの俺は？」
「なんでも使えます、制限はありません」
「じゃあFランクの彼女は？」
「通常の武器や防具しか使えません。サーベルやエストック、レイピア、バトルアクスなどですね」
え、えええええー！
「わ、わかりました……じゃあFランクが使えるものを……」
「かしこまりました」

新たなるチーム

結局、相原の装備はこんな感じになった。
武器はクロスボウと短剣。防具は革の鎧、手袋にブーツ。非常に心許ない。こんな装備でボス敵に挑んだら即死間違いなしだ。うーん、どうしたらいいだろう。
「そうだ相原、朝飯は？」
「食べてない……」
「じゃあなんか食べようよ、おごるからさ」
「本当にごめんね、何から何まで」
「いいよいいよ、気にしないで」
どうせポイントは腐るほどあるしね。この世界でしか役に立たないポイントが。
俺たちは近くにあるレストランに入った。以前にアレクセイともめた場所だ。今日は彼がいないようだし、ゆっくり食事ができるだろう。
やがて、二十歳くらいの女性店員が声をかけてきた。
「いらっしゃいませ、お二人様ですか？」
「はい」
「こちらへどうぞ」
彼女に案内されて店内を歩いていくと、いつになくガラガラだった。近くの席に女の子が座り黙々と食事をしている。ストレートロングの紫がかった黒髪、切れ長の目、端正な顔立ちにすらりとした体。って、リンファンじゃんか！
「おい、なんでいるんだよ！　中国に帰ったんじゃなかったのか？」
「あれ、信一。お早う」
「お、お早う……」
俺たちは店員に言って、彼女と相席にしてもらった。本当になんでいるんだろう。一人だけ帰れなかったとか？

「あのさ、リンファン……」
「帰ったよ」
「え？」
「私、一度中国に帰ったよ。また来たのは食事をするため」
「は、はあ」
「ここで買ったものって、元の世界に持ち込めないんだよね。でも食べたものは別」
「えっ」
「食事をしてから元の世界に戻れば、お腹は膨れたままなんだよ。ちゃんと栄養になるってこと」
だからって、わざわざ来なくても。呆れ返っていると、彼女は珍しく笑みを浮かべた。
「私、１００万くらいポイント持っててさ。使わないともったいないから」
はあ、なるほどねえ。俺はそんなものどうでもいいと思ってたけど、経済観念のある奴は違うな。
あ、そうだ。何か注文しないと。
「相原、なんにする？」
「えーと、えーと……」
彼女は目を丸くしながらメニューを見つめている。三百種類以上あるし、選ぶのも大変だろう。
「高木君は何にするの？」
「俺は朝飯食ったからなあ、ドリンクバーでいいや」
「じゃあ私もそれで」
「遠慮すんなって、栄養失調になりたいのか？」
「朝はあんまり食べないし……」
「無理してでも食べときな、ここじゃ体が資本なんだから」
「うん、ありがとう」
相原はトーストにハムエッグ、サラダ、ドリンクバーを注文した。合わせてたったの４ポイントだ。もっと注文すればいいのに。

彼女が黙々と食事をしているのを見て、リンファンが俺にたずねた。
「ねえ、この子って信一の彼女？」
俺は飲んでいたコーラを吹き出してしまった。なんてことを聞いてくれるんだ。
「ち、違うよ。ただのクラスメートで……」
「だよね。恋人同士だったら『高木君』なんて呼ばずに『信一』って呼ぶよね」
わかってるなら変なこと聞くなよ、頼むから。
「でもさあ……」
え、まだ何か？
「今の慌て方、気になるなあ。普通はそこまで動揺しないよね？」
「うっ」
「もしかして、信一ってさあ」
「わああ、わあああ！」
俺は仰天して両手を振った。相原がきょとんとしながらこっちを見ている。やばい、ばれる。こいつを好きなのがばれてしまう！
そのとき、リンファンがにやりと笑った。
「このくらいでやめておくね」
た、助かった。心臓が飛び出るかと思ったよ。
「あんまりからかうなよ、本当に」
「ごめんごめん」
リンファンは笑みを浮かべている。こんなに彼女が笑っているのは初めてだ。
「信一」
「何？」
「……ちょっと妬けちゃうな」
「え？」
「なんでもない、そろそろ行くね。これから公演があるから……」
「そっか、がんばれよ」

リンファンは手を振って立ち去った。それを見た相原がすかさず聞いてくる。
「ねえ、あの子誰？」
「リンファンっていう中国人。雑技団の一員らしいよ」
「ふーん、美人だねえ」
あまり意識してなかったけど、確かにそうだ。
「なんか高木君のこと好きみたいだし、ひと押ししてみれば？　美人の彼女をゲットできちゃうかもよ」
いや、俺がゲットしたいのはリンファンじゃなくて……まあいいや、今は黙っておこう。告白する勇気ないし。

さて、これからどうしよう。俺はレストランの椅子に座ったまま考えた。
相原を元の世界に戻すには、一緒にボス敵と戦う必要がある。そのためには強力な武器や防具を装備させなければならない。でも今はランクが低くて装備できないので、まずそれを上げる必要がある。
「相原、行こうか」
「え、どこに？」
「街の外だよ。魔物を倒してランクを上げなきゃ、この世界から出られないんだ」
「ええっ、無理！　絶対無理！」
「じゃあ一生ここですごすか？」
「うっ……それもやだ」
「じゃあやるしかないだろ」
「わ、わかったよ。行くよ……」
彼女は渋々立ち上がった。
俺だって、好きな女の子にそんな危険なことをさせたくないんだ。辛いのはわかるけど我慢してほしい。しっかりサポートはするから。

想定外の強襲

俺は相原をつれて街を出た。向かったのは近くにあるはげ山だ。ここにスカルケルベロスという魔物が住んでいるらしい。それを倒させてランクを上げようという目算だ。

しばらく歩くと山に着いた。スカルケルベロスはさほど強い魔物ではないらしいが、それでも普通の女子高生にとっては怖ろしい敵に他ならないだろう。

「相原、敵を見つけたらとにかくクロスボウを連射するんだ。近寄られたら短剣で突き刺せばいい」

「う、うん。私に倒せるかな？」

「駄目だったら俺がなんとかする。心配しないで戦ってくれよ」

「わかった、ありがとう。高木君って本当に優しいね」

彼女が満面に笑みを浮かべているのを見て、俺も嬉しくなった。笑顔の相原が一番魅力的だ。

「いや、他人が困ってるのを見て放っておけないからさあ」

「へー、誰にでもこんなに優しいの？」

「えっ……」

俺は答えに詰まった。「お前にだけだよ」と言いたいがとても言えない。

「高木君って彼女いるんだっけ？」

「い、いや」

二次元にならいるけど……って、今はそんな話どうでもいい。

「彼女になる人は幸せだね、強いし頼りになるし」

おおお、最高の褒め言葉をありがとう！

「だ、だったらお前が……」

「え？」

「……なんでもない」

さて、そろそろスカルケルベロスを探そうか。

周囲には木一本生えておらず、実に見通しがいい。魔物が近づいてくればすぐわかるはずだ。今のところそれらしき姿は見えない。
なんだ、誰かが倒しちまったのか。そう思いながら荒れた山道を歩いていると、相原が前方を指さした。
「ねえ、あれ……」
そこには骨が散乱している。スカルケルベロスにやられたんだろうか。人間のものだったらかなり嫌だ。
「高木君、高木君！」
「え？」
「なんかあの骨、動いてない？」
「まさか。気のせいだろ」
「絶対動いてるよ！　もしかしてあれが……」
ん、言われてみればぴくぴく動いてるような。
フレアバスタードを握りしめながら見ていると、散らばっていた骨が一斉に浮き上がった。それは次々と組み合わさり頭や胴体、前足や後ろ足を形成していく。
やがて現れたのは、三つの頭を持つ巨大な犬だった。体長は人間の大人に匹敵するほどで、全身が灰色の体毛で覆われている。なるほど、こいつがスカルケルベロスか。
「相原、敵だ！　撃て！」
「え、えっ」
彼女はもたついてなかなか撃たない。うーん、トロいね。早くしないとやられるっつの。
そのとき、魔犬が相原目がけて三つの口を開いた。
「ガアッ！」
途端に、テニスボール大の火の玉が次々と飛んでくる。
「危ない！」
「えっ！」
俺は相原を抱えてその場に伏せた。頭上を火の玉が通りすぎていく。

「ガアアッ！」
攻撃をはずしたケルベロスは突進してきた。それを俺のフレアバスタードが迎え撃つ。
「これでも喰らいな！」
渦を巻いた炎が魔犬を包み込む。奴の動きが止まっている今がチャンスだ。
「相原、撃て！」
「う、うん」
彼女はクロスボウの矢を連射したが、驚いたことにまるで当たらない。ちょ、待て。相手が動いているならともかく、止まってるのに当てられないって相当だぞ。しかもあんな大きい的に。
「あ、あれ？　なんでー？」
それはこっちが聞きたいっつの！
ジェシカやリンファンなら一発残らず当てただろう。彼女たちがいかに強かったか思い知らされる。むしろ相原くらいが普通なのかもしれない。いや普通以下かな、あまり考えたくないけど。
「落ち着け、しっかり狙うんだ」
「う、うん。がんばる……って、きゃあああっ！」
ケルベロスが炎を突っ切り向かってきた。ちっ、全然効いてない。それなら叩き斬るまでだ。
「らあああっ！」
真紅の斬撃が走り、突撃してくる魔犬の頭部を斬り裂いた。紫色の鮮血と凄まじい悲鳴が上がる。
「グギャアアアッ！」
斬られた頭は動かなくなったものの、残る二つは健在だ。それらが俺に向かって次々と火の玉を吐き出してくる。だがそんな攻撃など、フレアバスタードの前では児戯に等しい。
「うらあっ！」
俺が剣を一閃した途端、凄まじい炎が噴き出して火の玉を呑み込んだ。それはさらに魔犬にまで及び、奴の毛皮を焦がしていく。

「相原、今度こそ当てろ！」
「う、うん」
彼女はゆっくりとクロスボウを構え、慎重に矢を発射した。今度は狙いたがわずスカルケルベロスに突き刺さっている。やればできるじゃんか、見直したよ。
炎に包まれた上に矢の連射を浴び、魔犬は悲鳴を上げている。よし、そろそろいけそうだな。
「相原、短剣で奴の頭を刺すんだ」
「え、えっ」
「大丈夫、今なら倒せる」
彼女はすらりと短剣を抜いた。それはいいが、なかなか前に進もうとしない。こら、やる気あんのか。
「た、高木君……」
「ん？」
「怖くて無理」
「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。早くしないと敵が復活するぞ」
「う、うん」
相原が意を決して歩き始めたそのとき、はるか彼方から火の玉が飛んできた。げっ、かなりでかい。俺の二倍くらいありそうだ。
「相原、伏せろ！」
「えっ？」

真紅の大トカゲ

俺は相原を抱えて地面に伏せた。巨大な火の玉が頭上を通りすぎていく。
彼女はすっかり怯えてしまい、震えながら口を開いた。
「な、何あれ……？」
「たぶんフレアサラマンダーだな」
「それ、強いの？」
「かなり強いらしいよ」
やがて火の玉は地上に降り、巨大なトカゲに変形した。色は真紅で、体長は7、8メートルありそうだ。
俺は立ち上がって剣を構えた。相原も続いてクロスボウを構える。さて、面倒なことになってしまった。俺一人ならどうにでもなるが、相原をつれて二匹と戦うのは無理がある。だからと言って彼女だけ逃がすのも難しい。たぶん俺から離れたが最後、ソッコーで魔物の餌食になってしまうだろう。
「こうなりゃ仕方ない、二匹とも俺が片付ける。絶対にそばを離れるなよ」
「う、うん」
まず、炎でサラマンダーを牽制する。その次に弱ったケルベロスを一刀両断にし、間髪入れずサラマンダーに斬りかかればいい。
「おらああっ！」
フレアバスタードから炎が噴き出し、大トカゲに向かっていく。よし、捕らえた……と思ったそのとき、奴は大きな口を開けてそれを吸い込んでしまった。
「ええっ？」
ちょ、待て。なんだよこいつは！
やむを得ない、矢で牽制しよう。
「相原、あのトカゲを撃て！」

「うん」
彼女は矢を連射したが、残念なことにかすりもしない。うーん、使えないにもほどがある。
そうだ、ケルベロスは……と思って振り返ると、その牙が眼前に迫っていた。
「うおっ！」
体をひねってかわした途端、魔犬の巨体が空中を通りすぎていく。危ない危ない、やられるとこだったよ。
ケルベロスは地面に着地するなり、次々と火の玉を吐き出した。サラマンダーも火の玉に変形して飛んでくる。いくらSランクと言えど、さすがにこれは厳しい。
「一旦退くぞ！」
俺は相原の手を引いて走った。だが、奴らはしつこく追跡してくる。どうやら逃がす気はないらしい。
「こうなったら一丁やるか」
「え、何を？」
「お前はここで待ってろ、やばくなったらすぐに呼べ」
俺は振り返り、腰を落としつつバスタードを構えた。前方から火の玉と化したサラマンダーが突っ込んでくる。この野郎、調子に乗るのもいい加減にしろ。
「死して屍、拾う者なし！」
強烈な突きが火の玉を直撃した。それは凄まじい悲鳴を上げ、空中でトカゲに変形する。
「沈め！」
さらに間髪入れず、薙ぎ払いながら奴の横をすり抜けた。手応えは充分だ。振り返って見ると、胴体を真っ二つにされたフレアサラマンダーが転がっている。よし、一丁上がり！
続けてスカルケルベロスが突進してくる。こいつ、一対一で勝てると思うなよ。
「開きにしてやる！」

上段に構えて真っ向から斬り下ろすと、奴の体が縦に裂けた。それは鮮血を噴き出しながら地面に落ちていき、骨と化して辺りに散っていく。これで完全終了だ。
「終わった……」
肩で息をしていると、相原が駆け寄ってきた。
「高木君、めちゃめちゃ強いじゃない！」
「いや、それほどでも」
「ごめんね、足引っ張ってばかりで……」
「まだ慣れてないだろうし、仕方がないよ」
それにしても、やたら呆気ない奴らだったな。あんなもんか？
フレアサラマンダーは沈黙したまま血の海に沈んでいる。スカルケルベロスは骨になって散らばったままだ。しかし俺の勘は、まだ終わっていないことを告げていた。
「一応、焼き払っておくか」
フレアサラマンダーの体に炎を噴きかけると、勢いよく燃え上がった。なんだ、やっぱり死んでるよ。警戒して損したな。
と、そのときだ。息絶えたはずの大トカゲがゆっくりと立ち上がった。その体は燃えたままだ。二つに斬られた胴はいつの間にかくっついている。
「げえっ！」
俺は思わず後ずさった。なんなんだよこいつ。まさかケルベロスまで復活しないだろうな。
「た、高木君！」
相原が指さした方向を見ると、散乱した骨が浮き上がっていた。それらは再び寄り集まり、巨大な犬へと変形していく。
「ちょ、嘘だろ！　誰だよ、たいして強くないって言った奴は！」
いよいよもって大ピンチだ。全力で走ってもこいつらからは逃げられない。おまけに斬っても復活する。じゃあどうすりゃいいんだ？
結論。もう一度叩き斬って、奴らが復活しないうちに逃げるべし。
「相原、下がってろ」

「だ、大丈夫なの？」
「わからない。でもやるしかないだろ」
俺は彼女を残し、二匹の魔物に向かっていった。できれば離れたくなかったが仕方ない。さっさとこいつらを斬り捨てて相原と一緒に逃げよう。
「おおらあっ！」
フレアバスタードが火を噴き、それはスカルケルベロスを包み込んだ。よし、足止め成功。次にフレアサラマンダーを……って、奴がいねえ！
慌てて周囲を見ると、トカゲは火の玉になり相原へ向かって飛んでいた。や、やばい。わざわざ弱い方を狙いやがって！
「きゃあああっ！」
「こっちへ向かって走れ！」
彼女は必死に走ってきたが、お約束のように転んでしまった。くそっ、最悪だ。
「おおらあっ！」
フレアバスタードの噴き出した炎が火の玉を直撃したが、まるで効いていない。俺はその間に全力で疾走した。頼む、間に合ってくれ。
「お前の相手は……」
横薙ぎの一閃が火の玉を斬り裂いた。直後にトカゲの姿が現れる。
「俺だあああっ！」
さらに、それを真っ向から斬り裂いた。魔物の体は大爆発を起こして四散する。二度と俺の前に立つんじゃねえ！

スカルケルベロス

次の相手はスカルケルベロス、三つの頭を持った巨大な魔犬だ。一度倒したのにあっさり復活するなんて反則としか言いようがない。

「喰らいな！」

獄炎が渦を巻きながら飛んでいき、ケルベロスに襲いかかった。しかし、奴は素早く横に跳んでこれをかわしている。

「ガアアアッ！」

魔犬は「お返しだ」と言わんばかりに氷の矢を吐き出した。火の玉だけかと思ったらこんなものまで使えるのか。敵ながらたいしたもんだ。

身を翻して矢をかわすと、それは俺の顔すれすれの所を通り過ぎた。お互い飛び道具は効かないようだ。それなら直接やり合う他ないだろう。

「うおらああっ！」

俺は疾走し、同時に雷撃のような突きを繰り出した。奴はそれを軽々とかわし、牙をむいて飛びかかってくる。侮れない強さだ。だからと言って負けるつもりなんかない。

「おおおおっ！」

俺はケルベロス目がけてバスタードを振りきった。今度は命中し血飛沫が上がる。よし、この調子この調子。

「らあああっ！」

地面に落ちて倒れ込む魔犬に、続けて連撃を叩き込んだ。首を狙った突き、頭部を狙った斬り落とし、胸を狙った薙ぎ払い。それらは残らず命中し、相手を血の海へ沈めていく。

「グガアアッ！」

悪く思うな、敵味方に別れたのが不運だったんだ。恨むなら、赤いローブを着たあの男を恨んでくれ。

「とどめだ！」

渾身の力で斬りつけると、奴は必死にそれをかわした。これだけやられながらまだ動く力があるようだ。
「もう一度！」
さらに斬撃を加えようとしたそのとき、スカルケルベロスが疾走した。こいつ、逃げる気か。
「って、また相原狙いかよ！」
彼女は迫ってくる魔犬を前に硬直している。馬鹿、よけないと死ぬぞ。
「早く逃げろ！」
「え、ええ……」
急いで奴の後を追ったが間に合わない。くそっ、最悪だ。俺がついていながらこんなことに。
「相原、剣を抜け！　そいつを突くんだ！」
「あ、う……」
「何してんだ、死にたいのか！」
彼女は固まったままだ。くっ、これまでか。あんな魔物に噛みつかれたらひとたまりもないだろう。万事休すだ。
絶望しかけていると、相原の隣に黒い玉が出現した。最初はサッカーボールくらいだったのが、どんどん膨れていく。
「あ、あれは……？」
次の瞬間、それはイザベルに変わった。ふわっとした銀色のロングヘア、浅黒い肌。切れ長の目にしなやかな輪郭、爆乳にくびれたウエスト。頭に雄牛のような角、背中にコウモリのような羽根、お尻の辺りからは先端がスペード型になった黒く長いしっぽが生えている。装備しているのは漆黒のサーベルで、着ているのはエナメルで光沢を出したブラとパンツ、長手袋とロングブーツだ。
彼女はケルベロスに向けて右の手を開いた。直後にどす黒いエネルギーが集束していく。
「はあっ！」
放たれたエネルギー弾は魔犬に命中し、大爆発を起こした。敵は

跡形もなく粉々だ。いや、相変わらずすごい技だね。
「イザベル、ありがとう！」
笑顔で歩み寄ると、彼女は俺にしっかりと抱き着いた。むにゅっとした感触が伝わってくる。
「お、おい……」
「今回もかっこよかったよ、信一」
「え、あの……」
「そろそろお姉さんと結ばれてほしいんだけど」
エロ悪魔は俺の顔を愛おしそうになで回し、目をじっと見つめた。
うううっ、もう勘弁してくれ。毎回スキンシップが過剰なんだよ。
「ねえねえ、これで貸し一つだよね。返してほしいなー」
「ど、どうやって？」
「わかってるくせに」
彼女は端麗な顔に笑みを浮かべつつ、舌を出してちろちろと動かしている。相変わらず色気が半端ない。でもここでうなずいたら結ばれてしまう。まあそれもいい……って、よくない。俺は相原が好きなんだから。
「そ、そろそろ離れてくれないかな」
「やだ」
「こっ、困るよイザベル……」
「何が？」
「俺たち、恋人同士じゃないんだし」
「じゃあ恋人になってよ」
ああ、もうやめてください。こんな爆乳美女に迫られて耐えるの無理です。
「ねえ、信一ってばー。彼女にしてよー」
「ご、ごめん」
「なんで駄目なの。年上は嫌い？　外国人だから？」
「好きな子がいるんだ」
「ええ！　誰なの、教えてよ！」

沈黙していると、彼女はさらに強く抱きしめてきた。ああっ、もうやばい、本当にやばい！
「だ……誰にも言わないって約束するか？」
「うん、するする！　絶対言わないよ！」
「わかった、耳を貸してくれ」
俺は彼女の耳元でそっとささやいた。
「そこにいる相原って子だよ」
イザベルの目がどんどん吊り上がっていく。まずい、やっぱり黙ってればよかった。
「ふーん、そうなんだ……助けるんじゃなかったよ」
こ、怖い。どうしよう。魔物より危険な相手を怒らせてしまったようだ。俺が硬直していると、彼女は口角を吊り上げた。
「あ、そうだ。私がこの子を始末すれば……」
「わああ、待ってくれ！」
「わかった、やめるよ。その代わりにお願いを聞いてくれる？」
「内容によるけど……どんな？」
イザベルは俺に耳打ちした。ちょ、無理。それは無理！
「だ、駄目だよ。そんなことしたらもう終わりじゃんか！」
「終わりって何？　私とあなたの熱いラブストーリーが始まるだけじゃない」
「それはストーリーって言うより……」
「言うより何？」
言えない、とても言えない。
「信一、顔が真っ赤だよ」
「お前が変なことをささやくからだろ！」
ああもう、こいつといると心臓が破裂してしまう。常に貞操の危機だし。

強化訓練の誘い

俺は話題を変えることにした。このままイザベルのペースにはまっていたら、いつかベッドに押し倒されてしまう。それだけは何がなんでも避けなければならない。

「イザベル、フレアサラマンダーとスカルケルベロスって不死身なのか？」

「まさか。死なない生き物なんて聞いたことがないよ」

「でも、二匹とも復活して……」

「フレアサラマンダーは炎をエネルギー源にしてて、それを浴びれば瀕死の状態からでも復活するよ。スカルケルベロスの本体は骨だから、肉体を斬っても駄目。骨を破壊しないと」

なるほどね。やっぱ知識がないときついな。

「ところで信一。あなたはどんな魔物と戦っても勝てるだろうけど、問題は相原さんだよね」

「うん、まあ……」

「今のままじゃ、いくらあなたががんばったところでどうにもならないよ。強化訓練に参加させてみれば？」

なんだ、そんな便利なものがあるのか。

「それって具体的に何をするの？」

「仮想の敵と戦うの。やられても実際にダメージを受けることはないから、安心して戦えるよ」

それはいい、今の相原にぴったりだ。

「ついでに俺も参加していいかな？　おもしろそうだし」

「信一が参加する意味ないような気もするけど……まあ別にいいよ」

「ありがとう。ところで、イザベルって優しいんだな。わざわざ相原を助けてくれるなんてさ」

すると、彼女はすっと目を細めた。やばい、余計なことを言ったかな？

「信一が困ってたから助けただけで、相原さんだけだったら放っておいたよ」
そ、そうっすか。あくまで俺のためにしか動かないんだね。
俺たちは街に戻り掲示板を確認した。相原はFランクのままだ。ポイントは増えてるけどこれじゃ意味がない。ため息をついているとイザベルが話しかけてきた。
「ねえ、せっかくSランクなんだし他の武器も使ってみれば？」
「俺はフレアバスタードが性に合ってるから」
「じゃあ、攻撃を補助する道具とか強力な防具とか」
ふーん、まあ見るだけ見てみるか。
俺は二人をつれて店に行き、フレアバスタードを強化してもらった。ついでに他のものも見せてもらうことにしよう。
店員は三十歳くらいの男性だ。彼は奥からでかい箱を持ってきてカウンターの上に置いた。中には指輪やら石やら入っている。
「Sランクの方なら、こちらはいかがでしょうか」
彼が差し出したのは百円玉くらいの丸い宝石だった。色は透き通った青。一見、単なる装飾品のようだ。
「どんな効果があるんですか？」
「こちらをご覧ください」
彼は傍らにあるモニターを操作した。画面に一体のわら人形が映し出される。次の瞬間その頭上で何かが弾け、直後に数本の槍が降り注ぎ人形を串刺しにした。
「うお、すごい……」
「この石を投げ付けると、槍に変形して相手を貫きます。名前はスカイジャベリンです」
「他には？」
店員はサーベルを取り出した。見たところ、なんの変哲もないただの剣だ。
「こちらはダンシングサーベルと言いまして……」
モニターに、再びワラ人形が映し出された。それを目がけてサー

ベルが回転しながら飛んでいく。やがて凄まじい斬撃が次々と降り注ぎ、人形を細切れにしてしまった。
「このように、相手を自動で追尾して斬り刻みます」
うーん、危険な武器だ。こんなものを使われた方はたまったもんじゃないだろう。
「他には？」
「グレネードボウなどいかがでしょう」
見た目は単なるクロスボウだ。矢も普通だし、これがそんなに強いのか？
「この矢は撃った後に変化します。まあご覧ください」
またもやモニターにワラ人形が映し出された。それを目がけて一筋の光が飛んでいく。途端に大爆発が起き、人形は跡形もなく消え去った。うーむ、なんつー威力だ。
「何かお気に召したものはございましたか？」
「フレアバスタード以外の武器は持ちたくないんです、重いし。だから宝石がいいかな」
「いくつか種類がございますが……」
「じゃあ全部ください」
十種類の宝石をありったけ詰め込むと、制服のポケットがパンパンになった。イザベルが呆れ顔でこっちを見つめている。
「信一……」
「え？」
「なんか、木の実を頬に貯め込んだリスみたい」
相原が後ろで爆笑してるけど、恥ずかしいので知らない振りをした。
「さあ、そろそろ強化訓練に行こうか。イザベル、場所は？」
「こっちだよ」
彼女につれられていった場所は石畳の広場だった。広さは五十メートル四方くらいあり、中央に巨大な魔法陣が描いてある。あと隅っこに見える黒いのは……電光掲示板だね。

やがて、イザベルが掲示板を指さした。
「あそこに体力が表示されるから」
おお、確かに名前と数字が見える。
「シンイチ　３８ポイント」
「イザベル　２５ポイント」
「ユウナ　１０ポイント」
あ、相原……お前どんだけ弱いんだよ。
イザベルが説明を続ける。
「今から、この広場に敵が現れるから戦ってみて。ある程度ダメージを与えれば倒せるよ。逆にダメージを受けたら掲示板の数字が減る。ゼロになったら戦闘不能で脱落ね」
「おお、やってやるさ！」
「あの、信一がやる気出しても……まあいいや、がんばってね」
イザベルは引き下がり、俺と相原の二人が残された。さあ、どんな敵が出るのか楽しみだ。

漆黒の騎士

剣を構えながら待っていると、魔法陣の中央に漆黒の鎧を着込んだ騎士が現れた。首から上がなく手には槍を構えている。
「あれは……？」
電光掲示板に新しい文字が映し出された。
「デュラハン　１５００ポイント」
なるほど、あれがこいつの体力か。って、どんだけ強いんだよ。
「相原、撃て！」
「うん！」
彼女はクロスボウの矢を連射した。ところが、それは一発残らずデュラハンの体をすり抜けてしまう。まさかあれって立体映像？
振り返ってイザベルを見ると、彼女は説明を始めた。
「出てくる敵は全部立体映像だよ。でも、攻撃を当てればちゃんと体力が減るからがんばって」
掲示板に視線を移すと、デュラハンの体力が１４６３になっている。なるほど確かに……でもたいして減ってないな。俺も一丁やるか。
「おおらあっ！」
フレアバスタードを突き出すと、熱光線が騎士を貫いた。さらにぐるぐると回転させると、炎が噴き出して彼を包み込み大爆発を起こす。おお、デュラハンの体力がどんどん減っていく。１３０１、１０２７、８６８、６５３……って、イザベルがなんか叫んでるよ。
「信一、あなたが倒しちゃ意味ないでしょ！」
……ごもっとも。これは相原を鍛える訓練だしね。
「よし、俺は引っ込むよ。がんばれ相原！」
「ええっ！」
彼女はおずおずと前に出た。敵は立体映像だし、そこまで怖がる必要もないと思う。

漆黒の騎士が突撃してきた。相原がクロスボウを撃っているけど、相変わらず威力がない。それでも少しずつは減らしているようだ。６４１、６２０、６０３……って、なんかわかりづらいなこれ。
「イザベルー！」
「なーに？」
「与えたダメージを表示できないのか？」
「できるよー、ちょっと待ってね」
彼女が魔法陣に何やら書き込んでいるそのとき、相原がデュラハンの一撃を喰らった。
「きゃあああーっ！」
彼女の頭に１０７という数字が表示される。ちょ、即死じゃないか。何やってんだ。
掲示板には「ユウナ　０ポイント」と表示されている。これであいつは脱落だ。さて、この後どうしよう。
「イザベルー、俺もデュラハンと戦っていい？」
「しょうがないなあ、どうぞ」
「っしゃああ！」
俺は漆黒の騎士目がけて突進した。彼も槍を振りかざして向かってくる。さあ、勝負だ。
フレアバスタードが届くより先に槍の一撃が降ってきた。しかし、そんな簡単にやられるつもりはない。俺は横に跳んでかわし、直後にデュラハン目がけて跳躍した。
「たあああっ！」
赤い閃光が騎士の体を斬り裂いていく。フレアバスタードは限界まで強化してあり、その斬撃は鉄の鎧を両断するほどだ。これなら奴を倒せるだろう。
デュラハンは強烈な一撃を喰らいふらついている。すごい、やられたときのグラフィックまであるのか。よくできた立体映像だ。
騎士の頭部に４９７という数字が現れた。これが与えたダメージらしい。ってことはまだ死んでないね。

再び鋭い突きが襲ってきたが、なんなくかわした。そんな直線的な動きなんか見切るのはたやすい。さあ、お返しだ。
「うおおおっ！」
俺は再び跳躍し、騎士を袈裟がけに斬りつけて着地した。顔を上げると相手は真っ二つになっている。表示された数字は８６５。これで死んだだろう。
掲示板を見ると、デュラハンの体力が０になっていた。俺の勝利だ。
「っしゃー！　やったぜ！」
……でも、相原を鍛えられなきゃなんの意味もないんだよね。
「はあー、まいったな」
頭をかきながらイザベルのところに行くと、彼女は首をかしげた。
「うーん……もう少し弱い敵にしようか？」
「それじゃ効果がないだろ」
「でも、こんなんじゃ何度やっても負けるよ？」
確かにそうかもしれない。今までチームを組んだ中で、相原の弱さはずば抜けている。いや、エドワードたちが強すぎたってのもあるけど……とにかくこのままじゃ八方塞がりだ。うーん、どうしよう。
そのとき、彼女がとことこと近寄ってきた。「もうやめる！　無理！」とか言うんだろうな、きっと。
ところが、その口から出たのは意外な言葉だった。
「もう一度やらせて」
いや、どうせ同じ結果に終わるんじゃ？
「相原、何度やっても無駄だと思うよ」
「このままならね……でも」
彼女はイザベルをじっと見つめて言った。
「イザベルさん、私もコスプレがしたいです。そうすればきっと変わると思います！」
え、なんだそれ。どこからその発想が？

イザベルはしばらく呆気に取られた後、ゆっくりとたずねた。
「え、なんのコスプレがしたいの？」
「『ダイヤモンド・ダスト』っていうゲームに出てくる、レベッカ・アーリマンです！」
そう言えばこいつ、重度のゲームオタクでコスプレイヤーだった。
ちなみにダイヤモンド・ダストはエロいかっこうをした女主人公がひたすら暴れまくるアクションゲームで、ど派手な演出と爽快さで熱狂的な人気を集めている。たぶん、今一番売れているのがこれだろう。
でも、ゲームの主人公になりきったところで強くなるものだろうか。とてもそうは思えないけど……。

過激なる女戦士

イザベルは携帯を取り出し、ダイヤモンド・ダストを検索している。横から画面をのぞき込むと、やがてレベッカのグラフィックが表示された。

注目すべきはその露出度だ。ブラとパンツでかろうじて大事な部分は隠してるけど、それ以外はほぼ全部見えている。しかもお尻の部分がTバックだ。実際にこんなかっこうをされたら俺は嬉し……いや、なんでもない。

やがて、イザベルは相原に携帯の画面を見せてたずねた。

「これでいいの？」

「はい」

「わかった、サービスしてあげる。本来はポイントが必要なんだけどね」

彼女が手をかざすと、相原の体がまばゆい光に包まれた。おお、本当にやるのか。これは楽しみだ。

やがて光は消え去り、そこには変身した彼女が立っていた。顔立ちやスタイルは前のままだけど、髪と肌の色、服装、武器が変わっている。銀色のストレートロングと赤い瞳、白い肌。光沢のある赤いブラにパンツ、ロングブーツ。耳には金のイヤリングが光っている。武器は細身の長剣だ。

相原は自分の姿を見るなり、うっとりとした表情を浮かべた。

「ああ……レベッカだよ。やっぱりいいなあ」

うん、いいね。俺もそう思うよ。つかエロすぎてやばい。ブラとパンツの面積が少なすぎる。大事な部分をかろうじて隠している程度だ。

イザベルが相原を見つめながら言った。

「言っておくけど、コスプレじゃないよ。ヘアウィッグもカラーコンタクトも使ってない。この世界にいる限り、あなたは銀髪と赤眼

のまま。もう黒い髪は生えてこない。それでもいい？」
「いいです！　もう最高です！」
彼女は満面に笑みを浮かべている。すっきりした顔立ちをしていて、笑うとすごくかわいい。
「高木君、どう？」
「え……あっ」
俺は言葉が出てこなかった。
「レベッカに見える？」
うん、見える。元々レベッカは相原によく似てるし。つか、本物より魅力的だ。
ぼーっと彼女を見つめていると、イザベルにほっぺたをつねられた。
「ちょっと、何見とれてんのよ」
「あ、いやその……相原、がんばれよ」
「うん、がんばる！」
彼女は魔法陣の中央に向かって歩いていった。きゅっと引き締まった白いお尻が目に入る。やばい、あまり見るとスケベな男だと思われそうだ。
イザベルが横に立ち、話しかけてくる。
「あの子、すごく綺麗だね。スタイルもいいし」
「う、うん」
「信一がお熱を上げるのもわかるよ」
「ああ」
「でも、私は負けないからね。必ずあなたを手に入れてみせる」
そんな宣言されても、どうリアクションすればいいのかわからない。
さて、相原の戦いを見ることにしよう。彼女はぴたりと剣を構えている。その隙のなさと落ち着きようはレベッカそのものだ。でも、そううまくいくとは思えないけどね。
やがて彼女の前に一体の鎧武者が現れた。真っ赤な甲冑を身に着

けた骸骨だ。手には日本刀を握っている。おお、初めて見る魔物だな。
電光掲示板を見ると、こんな文字が表示されていた。
「ムクロ　２０００ポイント」
ちょ、デュラハンより強いし。こんなん倒せっこないだろ。思わず顔をしかめると、イザベルが叫んだ。
「相原さーん！　あなたの設定を不死身にしておいたよ。いくらダメージを受けてもかまわないから、そいつを倒してみて！」
「わかりました！」
相原はムクロをにらみつけた。その気合いの入った表情は、今までとまるで別人だ。もしかしていけるか？
先に動いたのはムクロだった。大きく口を開け、相手目がけて斬りかかる。
「きえええー！」
凄まじい速さの斬撃が相原を襲ったが、彼女は跳び下がってこれをかわした。おおっ、やるじゃん。変わったのは見た目だけじゃないんだな。
次の瞬間、彼女のかん高い声が響いた。
「邪なる者よ、滅するがいい！」
あれはレベッカがよく言うセリフだ。うーん、完全になりきってるね。でも元が元だし、どうせ駄目だろう。
そう思った瞬間、相原が斬りかかった。は、速い！
「はあああっ！」
雷撃を思わせる凄まじい斬りがムクロを正面から襲う。ちょ、待て……誰なんだあいつは。俺の知ってる相原じゃない、絶対別人だよ！
真っ向から叩き斬られたムクロの頭上に、３桁の数字が浮かび上がった。１２７……何かの間違いだと信じたい。
相原は間髪入れず横薙ぎの一閃を放ち、さらに連続で突きを放った。レベッカの戦い方そのものだ。ダメージは９８、６７、７４、

８１……おいおい、どうなってんだ。俺は夢を見てるのか？
思わず横を見ると、イザベルが呆気に取られて立ち尽くしていた。
その口からこんな言葉が漏れる。
「日本のオタクってすごい……」
いや、待て。やっぱり何か気になる。たかが外見が変わったくらいで、こんなに強くなるのはおかしい。
そのとき、赤いローブを着た人間が姿を現した。オズワルドだ。
何しに来たんだこいつ？
警戒していると、彼は相原を見ながら言った。
「素晴らしい、彼女はこの世界の特性を最大限に生かしている」

オズワルド再び

この世界の特性と言われても、なんのことやらさっぱりだ。
「信一、いいパートナーができてよかったじゃないか」
「ちょっと待て、なんで相原はあんなに強くなったんだ？」
オズワルドはしばらく沈黙してから再び話し始めた。
「せっかくだから教えてやるか。信一は、どうして俺がこの世界を作ったと思う？」
「刺激的な動画を作るためだろ？」
「もちろんそれもある。だが……」
「だが？」
「一番の目的はそれじゃない」
まあ、動画のためだけにわざわざ別の世界を創ったってのは無理があるよね。
「この世界は過酷であるにも関わらずリピーターが多い。ボス敵を倒して元の世界に帰った連中も、大体はまたここにやってくる。なぜかわかるか？」
さっぱりわからない。俺みたいに、友だちを助けにくるとかなんだろうか。
「この世界が刺激的であり、かつ住み心地がいいからだよ。元の世界で退屈したり人生がうまくいかなかったりしたとき息抜きにやってくるわけだ」
ふーん、なるほど。そういう使い方があるのか。
「俺が魔物を作って来訪者と戦わせているのは、単なる趣味の一貫にすぎない。本当に望んでいることは、元々住んでいた場所より魅力的だと思わせて住み着かせることなのさ」
……だったら、もう少し安全な世界を創ればいいのに。すぐ死ぬところになんか住みたくないぞ。
「ここの最大の魅力は、相原が強くなったことを見ればわかるはず

だ」
……え、どういうことだ？
「日本ではどん臭い女子高生で、他人とまともに戦うことなどできなかった彼女があっという間に変貌した。要するに、ここでは『理想の自分になることができる』んだよ。ただ顔や体型までは変わらないし、誰にでもできるというわけじゃない。資質が必要だ」
「相原はそれがあったから強くなったと？」
「そういうことだ。ついでにお前もそうだよ」
俺にそんな資質があったとは意外だ。ゲームが得意な他になんの取りえもないかと思ってたのに。
「信一。お前、元いた世界ではぱっとしない人間だっただろう」
げっ、なんでわかるんだ。その通りだよ。こんなだから彼女もいなかったし。
「それなのに、ここに来た途端Ｓランクに登り詰めた。フェンシングの達人であるエドワードや、雑技団のスターであるリンファンを差し置いてな。おかしいと思わなかったか？」
まあ確かに。つか、なんでそこまで詳しく知ってるんだ。怖ろしすぎるぞこいつ。
「現実の自分と理想の自分との間にギャップがあるほど、ここでは強くなるんだ。相原は自分がどん臭いことに強烈なコンプレックスを感じていて、レベッカのようなきびきびした人間になりたいと心から願っていた。それが実現したというわけさ」
「なんで最初は弱かったんだ？」
「理想の自分になりたいと渇望したときに強くなる仕組みなんだ。当初の彼女は何も考えてなかったから駄目だったんだよ」
「ふーん……って、俺もそうなのか」
「ああ。今まではオンラインゲームの中でしか活躍することができなかっただろ。でもここでならスターになることができる。どうだ、素晴らしいだろう？」
むう、日本よりこっちの方がいいかも。

「オズワルド、なんで俺たちについてそんなに詳しいんだ？」
「お前たちにだけじゃない。俺はこの世界の管理者であり、来訪する人間の情報をすべて把握できるようになっている。インターネット上でサイトを管理している人間は、そこに書き込んできた者のＩＰアドレスを知ることができるだろう？　あれをもっと拡大したものだと思ってくれればいい」
へえ。ＩＰアドレスを知っただけじゃ個人情報を見ることはできないけど、こいつにはそれができるわけか。いよいよもって怖ろしい。
「それより見ろ、彼女がムクロを倒したぞ。祝福してやれ」
掲示板に視線を向けると、ムクロの体力が０になっていた。相原は全然減ってない。うーん、なんて強さだ。普通の武器を装備してこれかよ。
彼女は満面の笑みを浮かべて歩いてくると、俺の手を握りしめた。
「高木君、やったよ。私はもう、どん臭い相原優奈じゃない。レベッカになったんだよ！」
「おめでとう、相原！」
「お願い、レベッカって呼んで。もう今までの自分にはさよならしたいの」
そ、そこまで……なるほど、これは強くなるわけだ。
オズワルドが俺の肩を叩きながら言った。
「君と彼女はどっちも強いし、お似合いのカップルじゃないか。この際だからつき合ってしまえ。そしてこの世界の覇者になれ」
な、なんてことを。こいつ、結構いい奴だな。
レベッカを見るとまんざらでもなさそうな顔をしている。うおお、第二の人生の幕開けか？
そのとき、血相を変えたイザベルが割り込んできた。
「ちょっと、やめてよ！　そんなの私は許さないからね！」
オズワルドがうなずきながらさらに言う。
「なるほど。じゃあ信一、二人とも自分のものにしてしまえ。ここ

は日本じゃないし、常識にとらわれる必要もない」

右手にセクシー美少女、左手にセクシー美女。両手に花だ。俺は快哉を叫びたい気分だった。

理想の世界

その後オズワルドは立ち去り、イザベルも協会の仕事をするために帰っていった。

さて、相原のランクはどうなってるだろう。電光掲示板を見にいくと、こんな文字が表示されていた。

「ユウナ・アイハラ　ランクＤ　３５０ポイント」

あれ、もっと上がってるかと思ったのに。まあ訓練じゃこんなものか。

「これで私は、もっと強い武器を装備できるんだよね？」

「ああ、フレアバスタードだって持てるはずだよ」

でも、二人で同じ武器を使うってのも芸がないね。まあとにかく買いにいってみよう。

店の建物に入って店員に声をかけると、Ｄランクが使える武器の一覧を見せてくれた。フレアバスタード、グレートソードカスタム、ポイズングラディウス、サンダークレイモア……いろいろあるもんだ。レベッカはしばらくそれを眺めた後、一番下を指さした。

「これを見せてください」

「ブリザードエッジですね、かしこまりました」

店員が銀色に輝く剣を持ってきた。二本一組で長さは１メートルくらいだ。

「何か特殊効果はあるんですか？」

「氷の矢や盾を出したり、敵を凍りつかせたりできます。強化すれば真空の刃や光線、衝撃波も出せますよ」

「気に入りました、これにします」

ああ、選んだ理由がわかる気がする。ダイヤモンド・ダストの主人公であるレベッカが使ってるのは氷の剣なんだよね。

彼女が嬉々として剣を握りしめているのを見た俺は、それを買って強化してもらうことにした。費やしたのは１５万ポイント。別に

痛くもかゆくもない。
さて、次に防具やアイテムも見てみようか。
「Dランクの防具でしたら、これが強いですよ」
店員が出してきたとは金属性の胸当てと腰当てだった。別に強そうには見えないけどなあ。
「これはイリュージョン・プロテクターと言うもので、幻影を出して攻撃を回避します」
へえ、なかなかすごいもんだ。
「どうぞ試着してみてください」
レベッカがイリュージョン・プロテクターを身につけたが特に何も起きない。あれ、あれれ？
「よし、試してみよう」
彼女の額にデコピンをしようとすると見事に指がすり抜けた。おおっ、これはすごい……って、本物はどこ行ったんだよ。思わず周囲を見回すと、俺の背後にちょこんと立っていた。げっ、マジか。すごすぎるぞこれ。
店員が笑顔で説明してくれる。
「こちらを最大まで強化すれば、大体の物理攻撃は回避できます」
レベッカが気に入ったようなので購入して強化してもらった。費やしたのは３０万ポイント。さて、他にも見せてもらおう。
「こちらなどいかがでしょう」
今度は指輪だ。紫色の宝石が埋め込まれている。アメジストかな？
「エアリアルリングというアイテムです。炎や冷気を噴射された際、バリアーを作り出して守ってくれます」
こんなものにそんな効果が……なんかインチキ臭いな。
レベッカが指輪をはめたのを見て、試しに息を吹きかけてみた。すると半透明で紫色の壁が現れ、見事に防いでしまう。うーん、なかなか使えるな。
結局これも衝動買いして強化し、１０万ポイントを費やした。
「お客様、こちらもいかがでしょうか？」

次は二本のブーメランだ。どちらも刃が付いており、なかなか危険な代物に見える。
「シューティングカッターという武器です。自動で敵を追尾して襲いかかります」
ダンシングサーベルの弱いバージョンか。でも強化すれば使えそうな感じだね。
「レベッカ、どうする？」
「ほしい！」
「んじゃ、これもください」
またもや１０万ポイント使ってしまったが、まあ別にどうでもいい。
買ったのは次のとおりだ。ブリザードエッジという剣。イリュージョン・プロテクターという胸当てと腰当てのセット。エアリアルリングという指輪。シューティングカッターというブーメラン。これだけあれば少しは戦えるだろう。
俺たちは店を出て公園のベンチに座った。地面は石畳で中央に噴水がある。その周りにはたくさんの鳩が歩き回っていて、なんとも言えないのどかさだ。
「信一、ありがとうね」
「気にすんなよ、お前がこの世界から脱出するためだ」
「脱出しなくてもいいような……」
「え？」
「ごめん、なんでもない」
なんか、すごい一言を聞いたような気がする。
確かにこの世界は俺と相原にとって都合がいい。でも、いつまでもここにいるのは考えものだ。生活していくためにはポイントを稼がなくてはならず、しょっちゅう命の危険にさらされることになる。長生きしたければやっぱり日本に帰るべきだと思う。
「レベッカ、俺たちの目標は元の世界へ帰ることだ。それでいいよな？」

彼女は黙り込んだままうなずこうとしない。
「おい、レベッカ……」
「そんなに帰りたいの？　ここにいれば理想の姿を実現できるんだよ」
「俺も最初はいいと思ったよ。でも、やっぱりリスクがでかすぎる。いずれ俺たちは歳をとって体も動かなくなるだろう。そうなったらどうする？　魔物と戦った途端に死ぬぞ」
「そんなのずっと先の話でしょ？」
「年齢だけの問題じゃないさ。魔物にぶった斬られて腕や足を失うこともあるだろう。そうなったらどうするんだ。ここには生活保護なんてないぞ」
「いいじゃない、別に」
彼女は寄り添って腕を組んだ。赤い瞳が俺をじっと見つめてくる。
「私は今、とっても幸せだよ。日本に帰らなくたっていい。一緒にここで生きていこうよ、ねっ？」

疾風の殺戮者

俺は思わずレベッカを抱きしめた。彼女は目を閉じて身を任せている。その美しい顔を見ていると、ここで一緒に生きていくのもいいかなと思ってしまう。

でも駄目だ。オズワルドの創った世界である以上、彼の気が変われば消し去られてしまう危険性もある。やっぱり俺たちの住むべき場所はここじゃない。

「レベッカ」

「何？」

「日本に帰るには、決められた敵を倒せばいいことになってる。戻る戻らないは別として、とりあえずそれを倒すことを目標にしてくれないかな？」

「なんで？」

「そうしておけば、何か問題が起こったときにすぐ日本へ戻ることができるから」

彼女は目を開いてしばたたいた。俺の考えていることが今一つ理解できてないようだ。

「問題って、例えばどんな？」

「この世界が崩壊するとか」

「そんなことあり得るの？」

「オズワルドが壊そうと思えば壊れるんじゃないかな」

レベッカは無言で考え込んでいる。理想の自分になれたことが嬉しいのはわかるけど、こんな危険な場所にいるのはやっぱり問題だ。ここに彼女の家族がいたら首に縄をかけてでもつれて帰るだろう。最終的にはなんとか言いくるめて日本へ戻さなければならない。

彼女はしばらく沈黙した後に口を開いた。

「わかった、それを目標にする」

「ありがとう、これで安心できるよ」

「でも日本には帰らないよ、ここで信一と暮らしたいから」
その気持ちは嬉しいけど、うなずくわけにはいかない。
「まあいいや、とりあえず魔物を倒しにいこうか」
「うん」
俺とレベッカは街を出て、近くにある草原へと向かった。ここにエアロマンティスという魔物が出没するらしい。現地に着くと、他のチームの人たちが周囲を警戒していた。合わせて二十人くらいだ。きっと彼らも狙っているんだろう。
「レベッカ、相手は馬鹿でかいカマキリだ。斬られたら命はないから充分に気をつけてくれよ」
「わかった」
俺はフレアバスタードを抜いて周囲を見回した。今のところ敵の姿は見えない。と、そのときだ。
真っ白い刃が飛んできたかと思うと、近くをあるいていた男性を真っ二つに斬り裂いた。途端に鮮血が噴き出して周囲を赤く染めていく。
「来たぞ、レベッカ！　気をつけろ！」
「うん！」
空中から巨大なカマキリが舞い降りてきた。体長は三十メートルくらいありそうだ。
魔物は力をため、直後に鎌を何度も振り回した。同時に白い刃が飛び出し、周囲の人たちに襲いかかる。
「うわーっ！」
「ぎゃあああっ！」
まずい、どんどんやられてるよ。
「レベッカ、大丈夫か？」
「私は平気だよ」
「よし、行くぞ！」
このまま奴の好きにはさせない。
「うおらあああっ！」

フレアバスタードから炎が噴き出し、カマキリに向かっていく。
「よし、もらった」と思ったそのとき、奴は横に跳んで綺麗にかわしてしまった。く、くそっ。
「らあああっ！」
今度は光線を出してみた。狙うのは頭だ。しかし、これもかわされた。どんだけ素早いんだこいつは。
カマキリの近くにいた男性が斬りかかる。なかなか鋭い攻撃だ。これはいけるか？
魔物は左の鎌で攻撃を弾き返し、間髪入れずに右の鎌を一閃した。男性が胴体を二つに割られて転がる。うーん、駄目か。しかし、なんて強さだろう。
「くそっ……」
「信一、任せて！」
レベッカの放った二つのブーメランが空気を斬り裂いて飛んでいく。追尾性能があるし少しは効くだろうと思ったが、あっさり叩き落とされてしまった。続けて彼女が放った氷の矢も難無くかわされてしまう。いよいよもって強敵だ。
そうだ、宝石があったな。使ってみるか。
「とりゃあー！」
二つまとめて投げつけると片方は数本の槍に変わり、もう片方は数本の矢に変わった。それらは目にも留まらぬ速さでカマキリの体に突き刺さる。よし、もらった！
ところが、魔物はそんなことなどお構いなしに動き回っている。緑色の体液が流れ出ているにも関わらず、たいして効いてないようだ。奴は正面に走ってきた男性を斬り下げ、右側にいた男性を薙ぎ払い、左側にいた女性を突き飛ばした。
「レベッカ、飛び道具は効果がない。直接やり合うしかなさそうだ、行くぞ！」
「うん！」
俺はカマキリ目がけて疾走した。白い刃が飛んできて頬や肩をか

すめていく。うっかり直撃を喰らえば間違いなくあの世逝きだ。
「だらああっ！」
魔物の目の前まで来たところで、その右足を斬りつけた。続けざまにもう一本にも斬りつける。切断はできないものの、奴はバランスを崩して倒れかかった。よし、今だ！
「おらああっ！」
顔面を真っ向から斬りつけると、右の鎌でがっちりと受け止められた。続けざまに左の一撃が飛んでくる。
「うわっ！」
後退してかわしたところに、すかさず右の鎌が振り下ろされた。かろうじて避けたが、さらに横薙ぎの一閃が襲ってくる。くっ、こいつ……速さといいタフさといい、すごすぎるぞ。

レベッカの奮闘

困ったことに反撃の糸口を見いだせない。強いだろうとは思ってたけど、まさかここまでとは。

ところでレベッカはどこに……と思ったけど、確認する余裕がない。エアロマンティスの鎌は次から次へと襲ってくる。うーむ、このままじゃまずいな。

ポケットに手を入れて宝石を取り出そうとした瞬間、カマキリの体が大きくぐらついた。誰かが強力な攻撃をぶちかましたようだ。鎌が止まっている間に素早く視線を走らせると、奴の腹に風穴が空いていた。しかも、その周辺がすごい勢いで氷ついていく。レベッカ、やるじゃん。

彼女はさらに、カマキリの左足を斬りつけた。その巨体が崩れかかる。

「信一、今だよ！」

俺は跳び上がり、渾身の力で奴の頭部を斬り下げた。

「おおおらあああっ！」

フレアバスタードを振り抜いて着地すると大爆発が起こった。魔物の首から上が吹き飛んでいる。これで終わった……と思ったら、またもや鎌が襲ってきた。なんて生命力だ。

その攻撃をかわしていると、レベッカがカマキリの胴体目がけて斬りかかった。

「たあーっ！」

彼女は袈裟がけの一撃、逆袈裟の一撃、最後に横薙ぎの一閃を放ってすり抜ける。エアロマンティスの体はずたずたに斬り裂かれ、凍りつきながら倒れ伏した。

「おおっ、やったな！」

笑顔を浮かべて声をかけると、彼女も微笑んだ。

「ありがとう、信一のおかげだよ」

「いや、お前の実力だよ」
それはいいけど被害が凄まじい。二十人くらいいた他のチームの面々が、たった六人に減っている。
「レベッカ、見ろよ。これでもまだこの世界に住みたいと思うか？」
俺は周囲を眺めながら言った。頭から両断されて倒れている者、胴体を真っ二つにされて転がっている者、原型を留めないほどバラバラにされた者など様々だ。
彼女は顔をしかめ、口を両手で押さえている。
「ほら、どう思うんだ？」
「う……」
「次にこうなるのはお前かもしれないんだぞ」
レベッカの顔からどんどん血の気が引いていく。そうだ、それでいい。こんな状況を見て何も感じなくなったらそれこそ末期だ。俺は何度も死体を見てしまったために感覚が麻痺し始めている。彼女がこうならないうちに恐怖を植え付けておかないと。
「そうだね……ひどいね」
「こんな毎日を送るのは嫌だろ？」
「……うん」
「じゃあ俺と一緒に帰ろうよ。ここにいたら、いつか悲惨な死に方をするだけだからさ」
彼女はうなずいた。よし、後はランクを上げてボス敵を倒すだけだ。先が見えたぞ。
「信一」
「ん？」
「私たちが帰れたとしても、他の人は帰れないわけだよね。放っておいていいのかな？」
「俺も気にはなってたんだけど、どうしようもないよ。警察に訴えたところで気違いと思われて追い払われるのがオチだし」
「やっぱりそうかな」
「ああ。『オズワルドっていう男が魔法を使って八万を超す人々を

誘拐してる』なんて、あまりにも馬鹿げてるだろ。冗談にしか聞こえないよ。それを大まじめに主張しようものなら気違い確定だ」
「警察に言っても無理なら……」
「無理なら？」
彼女は答えず、じっとこちらを見つめている。
「レベッカ……俺に何を期待してる？」
「信一が先頭に立ってくれれば」
「やめてくれ！」
正直、もうこの世界にはうんざりだ。自分と相原が元の世界に帰れれば後は知ったことじゃない。オズワルドの強さが桁違いなのは知っている。リスクをおかしてまで彼に逆らう必要はないだろう。
以前、エドワードたちはオズワルドに立ち向かうことを拒否した。今思えば賢明な判断だ。あんな男ともめるのは危険すぎる。
「レベッカ、もう一度言うよ。二人で日本に帰るのが目標だ。それ以外のことは考えないでくれ」
「……わかった」
彼女は何か言いたげだったが、あえて無視した。「自分たちだけ助かればいい」というのが利己主義的な考えだってことはわかる。わかっちゃいるけど、今一番大切なのはレベッカと俺の命なんだ。

街に戻って掲示板を確認すると、レベッカのランクがBに上がっていた。これでさらに強い武器や防具を装備できるようになったわけだけど、彼女はブリザードエッジが気に入ったらしく買いかえようとしない。仕方がないのでアボイド・イヤリングを購入した。真空波や衝撃波を自動で回避する効果があり、極限まで強化するとなんでも回避するようになるらしい。当然ながら強化して彼女に渡した。これでまた戦いが楽になるだろう。
さて、次はどこへ行こうか。街で情報を集めているとイザベルに呼び止められた。悪魔の恰好ではなくスーツを着込んでいる。まあ、あんなんじゃ目立つもんね。

「信一、おもしろい企画があるんだけどさあ」
「え、どんな？」
「争奪戦。勝てば超強力な武器を手に入れられるよ」
「へえ」
「ダイヤモンドエッジっていう名前でね、ブリザードエッジの強化版」
レベッカの眉がぴくりと動いた。たぶん欲しくなったんだろう。
「イザベルさん、詳しく聞かせてください！」
「城の最深部に置いてあるダイヤモンドエッジを手にした人の勝ち。ただ、今回は個人戦だよ。誰かに協力した時点で反則負けになるから注意してね」
「協力された方はならないんですか？」
「うん。そうしないと、嫌いな相手に対して故意に協力する困った人が出るのよ」
「わかりました、ありがとうございます」

個人戦開始

レベッカがどうしても参加したいと言うので個人戦に出ることになった。

場所は、街から2キロほど離れた場所にある城だ。参加するのは三十人余り。スーツを着たイザベルがツアーガイド気取りで先頭に立って歩いていく。

「皆さーん、ルールを説明しますね。今回はあくまで個人戦ですから、他の人に協力するのは一切なしです。違反した時点で強制退去になりますから気をつけてくださいねー。何か質問はございますか？」

よし、先にいろいろ聞いておこう。

「強制退去って、具体的にどうなるの？」

「城の外に出されて入れなくなるんだよ」

「誰かが手に入れたダイヤモンドエッジを奪い取るのはあり？」

「なし。最初に手にした人が勝利者」

「城には魔物が出るわけ？」

「うん、それはもうたっぷりと。あ、それから……」

「それから？」

彼女は薄笑いを浮かべた。

「意外な敵キャラが出るかもね」

うっ……なんかたくらんでるよこいつ。

「それって誰なんだよ？」

「さあねー、うふふふ」

怪しい、めちゃめちゃ怪しい。

「誰なんだよ、教えろよ」

「信一の頼みでもこればっかりはねえ。対処されたら困るもの」

いくら聞いても、イザベルは笑うばかりで答えようとしない。うーん、駄目か。まあいいや、どんな敵が出ようが蹴散らすだけだし。

やがて俺たちは城にたどり着いた。高さ十メートルくらいの白い城壁の中に、青い屋根の付いた白い尖塔がいくつも立っている。
イザベルは全員を城門の前に案内した。入口は落とし格子になっており中に入れない。
「では皆さん、スタートです。がんばってください！」
彼女が右手を上げると、同時に格子が上がった。参加者たちが怒涛のように突撃していく。イザベルもいつの間にか消えてしまい、後には俺とレベッカだけが残された。
「信一、行かないの？」
「いや、行くよ」
のろのろと歩き始めると、彼女は後ろからついてきた。
「レベッカ、先に言っておくよ。今回はお互いに協力し合うことができない。俺が誰かと戦っててても手を出しちゃ駄目だからね」
「うん、わかってる」
「それに、俺もお前に協力することはできない。自分の身は自分で守ってくれよ」
彼女は黙ってうなずいている。こんなことを言ったけど、レベッカが危なくなったら強制退去覚悟で敵を叩き斬るつもりだ。
城に入ると長い廊下に出た。床は大理石で、壁には巨大な窓がいくつもありステンドグラスがはめ込まれている。そこから差し込む日の光がまぶしい。防御面より装飾面を重視した城のようだ。まあそんなことどうでもいいけど。
お、先に行った連中が立ち止まってるよ。
「なんかいるのかな？」
「いるんだろうね、きっと」
彼らの視線の先には扉があり、周囲を無数の人魂が飛び回っている。ああ、あれか。確かに近寄りたくないね、不気味すぎて。
やがて人魂は集束していき、黒い甲冑を着込んだ骸骨に変わった。なんだ、ムクロの色違いか。
「信一、あれってムクロだよね？」

「そうだね、でも色が違う」
「ってことは強さも違うのかな？」
「さあねえ」
骸骨は腰に二本の太刀を佩いている。ってことは二刀流なんだろうか。それはかなり面倒だ。しばらく観察していると、奴は刀の柄に右手をかけて腰を落とした。
「お主らの命、もらい受けるぞ」
なるほど、抜き打ちをかけるつもりか。もしかして居合の使い手かな？
参加者は誰も向かっていこうとしない。まあ当然だ。他人に手を貸すことができない以上、最初に剣を交えた者が一人で戦うはめになる。損な役回りとしか言いようがない。
でも結局は誰かが倒さなきゃならないんだよね。よし、なんとかしよう。
ムクロを目指して進んでいくと、他の参加者たちは一斉に道を開けた。「あいつが信一か」とか「アビスドラゴン倒した奴だ」とか言ってるのが聞こえる。
さて、面倒だけどぶった斬るか。俺はフレアバスタードをムクロに突きつけた。奴も刀の柄を握りしめてこちらを見ている。悪いけど抜き打ちなんか喰らう気はないんだよね。
「おらっ！」
バスタードから炎が噴き出して骸骨を包み込んでいく。奴は突然の出来事に浮足立っている。よし、もうこっちのもんだ。
「だあああっ！」
袈裟がけに斬りつけると、ムクロの甲冑が斜めに割れた。中の肋骨ごと真っ二つだ。これで終わりか……と思ったら、奴はお構いなしに反撃してきた。斬った部分はくっついてしまっている。くそ、面倒な敵だなこいつ。
「きえええー！」
鋭い切っ先が迫ってきたが、俺はなんなくさばいて奴の頭を叩き

斬った。それは一旦割れたものの、またくっついてしまう。これじゃきりがない。
「ふはははは、死ねええええい！」
今度は左右二本の刀で斬りかかってくる。骸骨の分際で調子に乗るなよ。
「なめんな！」
ムクロの右の刀を叩き落とし、左の刀をがっちりと受け止めた。奴はそのまま押し斬ろうと圧力をかけてくる。
「ふはははは、死ね死ね死ね死ねええー！」
この腐れ骸骨、いい加減にしろよ。
「おらあっ！」
奴の腹を思いきり蹴飛ばすと、その体がよろめいた。今だ。
「死して屍、拾う者なし！」
俺は腰を落とし、一瞬でムクロの横を走り抜けた。同時にその胴を薙ぎ払っている。距離を取ってから振り向くと、真っ二つに断ち割られた奴の体が爆発を起こしていた。
「っしゃああ！」
レベッカが駆け寄ってくる。
「さっすが信一！　強すぎ！」
「あはは、それほどでも……」
照れている間に、他の連中がどんどん先に行ってしまった。俺も後に続くとしよう。

Aランクの意地

先に進むと、またもや廊下が続いていた。その両側には扉が並んでいる。参加者たちが手当たり次第に開けて中を調べているが、今のところダイヤモンドエッジは見つからないようだ。

やがて、どこからか男性の叫び声が聞こえてきた。おそらく魔物と遭遇したんだろう。

「信一、なんか悲鳴が聞こえるよ」

「そうだな」

「助けちゃいけないんだよね？」

「うん……でも、行くだけ行ってみようか」

例え「他人に協力しちゃいけない」ってルールがあったとしても、誰かが死にかかってるのを見殺しにするのは嫌だ。俺は急いで声がした方角に向かった。

しばらく廊下を走っていくと、扉の一つが開け放たれていた。中から凄まじい殺気を感じる。どうやらここに魔物がいるらしい。

「この部屋か」

「信一、助けるの？」

「状況を見て判断するよ」

中をのぞくと赤い豹がいた。体長は人間の大人と同じくらいだ。その足元に血まみれの男性が転がっている他、数メートル離れた場所に剣を構えた女性がいる。Aランクのビオレッタだ。年齢は二十歳くらい。茶色いセミロングの髪、茶色の瞳、白い肌にほっそりした体。革の鎧と長手袋、ブーツを身につけている。

「ビオレッタ！」

「信一、あなたも参加してたんだね」

「あの倒れてる男は誰なんだ？」

「知らない人。私が悲鳴を聞いて駆けつけたら、もう豹にやられてたよ」

「まだ生きてるかな？」
「さあねえ、見た感じ死んでるみたいだけど」
よし、豹を倒そう。強制退去になったらなったで仕方がない。
「レベッカ、俺はあいつを片付ける。この先一人になるかもしれないけどがんばってくれよ」
「うん」
フレアバスタードに手をかけようとした瞬間、ビオレッタが疾走した。うおっ、速い。
「たあああっ！」
その剣が煌めいたかと思うと、豹の口から後頭部にかけて貫いた。続けて爆発が起こり魔物の頭を吹き飛ばす。すごい、瞬殺だ。Ａランクじゃなくて Sランクの間違いじゃないのか？
豹が倒れたのを見届け、急いで男性を抱き起こした。首筋から大量の血液が流れ出しており息がない。胸や手首に触れてみたが脈もなく、心臓マッサージもしてみたが無反応だ。
「駄目か……」
うなだれながらつぶやくと、ビオレッタが冷たい声で言った。
「あんまり他人のことばかり気にしてると強制退去になるよ」
「それならそれで仕方ないさ」
「たいしたお人よしだね」
彼女はこちらに剣を向けた。なんの冗談だろう。
「え、俺に喧嘩を売る気かよ」
「うん、相手をしてくれるよね？」
「待てよ、戦って何かメリットがあるのか？」
「最大のライバルを潰すことができるし、うまくいけばSランクに上がることができる。あなたさえいなくなればダイヤモンドエッジは私の物だよ」
ふーん、それで格上の俺に挑戦したのか。いい度胸してるな。
「負けるかもしれないって考えなかったのか？　仮にも俺はSランクだぞ」

「もちろん考えたよ。まともに戦ったら私が負ける確率の方が圧倒的に高いもの。でもね、甘く見ないで。いろいろと考えてあるんだから」
はあ、やだなあ。魔物と戦うならともかく、人間の女性と戦うのはなんだか気が引ける。手加減して勝てるような敵じゃないし。それにしても、こんな好戦的な奴だったっけ？
「いくよ、信一」
「しょうがないな、かかってこいよ」
俺はレベッカを下がらせてフレアバスタードを構えた。正直言って気が乗らない。
ビオレッタが剣を振りかざした。直後に、白く輝くエネルギー弾が次々と現れて飛んでくる。
「うわっ！」
必死にそれをかわしている間に、彼女本人が疾走してきた。その剣が閃光と化して俺を襲う。こいつ、本当に殺す気だ。
背後でレベッカが叫んでいる。
「信一、危ない！」
「大丈夫だ、手を出すな！」
ビオレッタの斬撃をすべてさばくと、彼女は薄笑いを浮かべた。この余裕はどこから来るんだろう。
「さすがだね信一、かすらせもしないなんて。Ｓランクだけのことはあるよ」
「いや、それほどでも」
「でもね、私にも意地があるの。絶対にあなたを倒してみせる！」
彼女が再び剣を振りかざした瞬間、今度は俺の足元が青白く光った。なんか知らないけどやばい。
「うおっ！」
咄嗟に跳び下がった直後、さっきいた場所から爆炎が上がった。危ない危ない、逃げなかったら即死だよ……と思ってたら、またもや足元が光った。し、しつこい。

「くそっ！」
慌てて横へ跳ぶと、またもや爆発が起こった。しかも、避けた瞬間にまた足元が光りだす。これはビオレッタ本人を止めないと駄目だ。
「おおらっ！」
俺は爆発をかわしつつフレアバスタードを振りかざした。炎が噴き出して彼女に襲いかかる。
「こんなもの！」
ビオレッタが左手を開いて突き出した途端、炎はあっという間に散らされてしまった。こんな攻撃が効くとは最初から思ってない。俺は瞬時に間合いを詰め、彼女に斬りかかった。
「うおおっ！」
ビオレッタはすかさず受け止めている。その表情は真剣そのものだ。
「負けない……絶対に負けないんだから！」

熾烈なる連撃

ビオレッタが剣を受け止めたまま息を吹きかけてくる。なんのつもりだろうと思ったそのとき、俺の顔の表面が凍りついていくのに気づいた。

「げっ！」

慌てて跳び下がったところにエネルギー弾が迫り、同時に足元からも爆炎が上がる。まずい、めちゃめちゃ強いよこいつ。一瞬でも気を抜くとやられる。

「観念しなさい、あなたは私の踏み台になればいいのよ！」

勝手なことを言うもんだ。俺だってこんなところで死にたくないぞ。

しかし、ガチでやばい状況だ。打開策がない。あせりまくっているうちにビオレッタが左手を振りかざした。途端に無数の光の矢が現れ、俺を目がけて飛んでくる。

「うわああ！」

必死にかわしたものの、何本かが肩をかすめて制服が破れてしまった。しかも血が流れ出ている。俺としたことが不覚だ。なんとか反撃しないと。

「らあっ！」

再びフレアバスタードを振りかざすと今度は赤い閃光が走った。これならいけるか？

「無駄なことを！」

彼女は左手を突き出しバリアーを張った。閃光はそれに激突して爆発を起こす。よし、あいつの視界が閉ざされている今がチャンスだ！

俺は瞬時に間合いを詰めた。やがて煙の中からビオレッタの姿が現れる。狙いは奴の剣だ。

「うおおおらああっ！」

フレアバスタードを一閃させると凄まじい金属音が鳴り響き、彼女の剣はその手を離れ回転しながら飛んでいった。
「ああっ！」
ビオレッタは慌てて左手を突きだしたがもう遅い。その首筋にはフレアバスタードが突きつけられている。
「お前の負けだ、抵抗をやめろ」
「くっ……」
「これ以上やっても意味はない。じゃあな」
剣を引くと彼女は膝をついた。抵抗する意志は消えたようだ。これで少しはおとなしくなってくれるだろう。
「……信一」
「ん？」
「なんで殺さないの？　私はあなたを殺そうとしたんだよ！」
「かわいい女性をいたぶるような趣味はないから」
ビオレッタは端正な顔にきょとんとした表情を浮かべた。やがて白い肌が赤く染まっていく。ん、もしかして俺に惚れたか？
「かわいいって私のこと？」
「他に誰がいるんだよ」
なんだか背後から刺すような視線を感じる。おそるおそる振り向くと、レベッカが目を細めて俺を見つめていた。
「なんでいきなりその人を口説いてるわけ？」
「あ、いやその……」
「なんで？」
「えーと……」
「どうして？」
「う……」
いや、できれば懐柔しようと思ったんです。また狙われたら嫌だし。
何も言えずに黙っている俺を見て、ビオレッタが笑顔で近づいてきた。

「信一、命を助けてくれてありがとう。強い男は好きだよ」
「えっ……」
彼女は俺の手を握りしめて熱い視線を送ってくる。う、やばい。余計なことを言ったから大ピンチに。
「あなたみたいな人、私のタイプかもしれない」
ビオレッタは俺の胸板に顔をうずめてきた。うう、レベッカがものすごい顔でにらんでる。怖くて目を合わせられない。
「ビ、ビオレッタ……」
「なーに？」
「俺、一応彼女いるから……」
「それで？」
「いや、あの」
うわあ、変なことを言うんじゃなかった。冷や汗が額ににじんでくる。どうしていいやらさっぱりわからない。
そのとき彼女がくすっと笑った。こ、こいつわざとやってる。俺たちをからかって遊んでる！
「ビオレッタ！」
「ふふっ、ばれちゃったね」
「やっぱりか、そういうことやめろよ！」
「ごめんごめん、つい」
「お前な……」
「彼女に嫉妬して、ついからかっちゃった」
……ん、あれっ。えっ？
「気に入ったよ、信一。その子に飽きたら私のところに来てね。一杯愛してあげるから」
レベッカの頬がぴくぴく動いてる。口は災いの元とはよく言ったもんだ。ああ、後が怖くてたまらない。
俺とレベッカは、ビオレッタと別れて廊下を進んだ。さっきから彼女が口を聞いてくれない。うーん、自業自得とは言え困ったね。

お互いに沈黙したまま歩いていくと、廊下の先は行き止まりになっていた。あれ、ここまでの部屋には何もなかったのに……さては隠し通路でもあったのかな？

「レベッカ、今までにどこか気になる場所はあった？」

……返事がない。まだ怒ってるようだ。

「もしかしてこの辺に隠し通路が？」

床はつるつるした白い大理石で、それらしき形跡は見当たらない。ベージュ色の壁にも、バラを描いた絵画が飾ってあるのと金の燭台が埋め込まれている他に何もない。青い天井には女神や天使の絵が描かれていて……だからなんだって感じだね。ここを探しても意味はなさそうだ。

「こりゃ駄目だね、他を探すか」

そう言って立ち去ろうとしたとき、突き当たりの壁をぶち抜いて一つ目の巨人が現れた。身長は俺の二倍くらいで体全体が浅黒く、上半身は裸、下半身には虎の毛皮でできたパンツをはいている。持っている武器はこん棒だ。

「ウオオオオ！」

耳をつんざく雄叫びに俺は立ちすくんだ。直後に巨人が突進してくる。

「グワアアアッ！」

着ぐるみの野望

巨人はその頭上からこん棒を振り下ろした。俺とレベッカはどちらも跳び下がってかわしている。

「くっ、こいつ！」

フレアバスタードを振りかざすと火の玉が次々と飛び出し、直撃して爆発を起こした。しかし、体の表面を焦がしただけにすぎない。これはかなりの強敵だ。

奴は再びこん棒を振り上げ、今度は横薙ぎの一撃を放った。後退してなんとかかわしたのはいいがこのままじゃ倒せない。よし、こうなったら光線で……と思っていたそのとき、背後に人の気配を感じた。振り向くと、サーベルを佩いた黒猫の着ぐるみが立っている。な、なんだこいつ？

着ぐるみはレベッカの前にとことこ歩いてきて左手を挙げた。

「やあ！」

「えっ？」

「死ね」

奴はサーベルを引き抜くなり一閃させた。しかし、斬ったのはレベッカの幻影にすぎない。本体は数メートル離れた場所に跳んでいる。

「な、何すんのよ。誰なのあなたは！」

レベッカがブリザードエッジを構えてたずねると、黒猫は左手で口を押さえながら言った。

「秘密だにゃあ。おまいは邪魔だから消してやるにゃあ」

声から察するに、入っているのは若い女性のようだ。しかも漆黒のサーベル。うん、あいつだね。

「こら、イザベ……」

言いかけたところに巨人の一撃が降ってくる。ああ、めんどくせえ。

「お前は黙ってろ！」
フレアバスタードから発せられた光線が魔物の胸を貫いた。巨人はその部分を押さえながら悲鳴を上げる。
「グアアアッ！」
よし、今だ。
「らあああっ！」
俺は地を蹴って跳びかかり、右の足首を渾身の力で斬りつけた。途端に血飛沫が上がる。
「おら、もう一丁！」
さらに横薙ぎの一閃を放ってすり抜けると、巨人の右足が大爆発を起こした。その巨体がぐらりと揺れる。
「おおおっ！」
今度は股間だ、喰らいやがれ！
さらに斬撃を加えようと突進したが、奴の拳打に阻まれた。こん棒の代わりに次々と振ってきて大理石の床を叩きつける。危ない危ない、よけ損なったらぶっ潰されて即死だ。
ところでレベッカはどうなっているんだろう。
「レベッカ、大丈夫か！」
「うん、心配しないで！」
うーん、気になる。相手が相手だし。
「にゃはは、吹っ飛ぶがいいにゃー！」
「あなたが吹っ飛べばいいでしょ！」
……と、とにかく巨人を片づけよう。話はそれからだ。俺はポケットから宝石をいくつか取り出し、まとめて投げつけた。
「行けええっ！」
するとそれらは集束し、白く燃える鳥と化して突っ込んだ。おおっ、すごい。ホワイトフェニックスとでも言えばいいのかな？
鳥は巨人に直撃するなり凄まじい光を放ち、胸を貫いて消え去った。魔物は床に膝をつき倒れかかっている。今がチャンス！
「喰らえ！」

フレアバスタードの光線が目を貫いた。奴はそれでも倒れず、こん棒をめちゃくちゃに振り回す。
「グガアアアッ！　ガアアアッ！」
「いい加減に沈め！」
再び右足を斬りつけると、巨人は傾いて崩れ落ちた。まだ息があるようだ。また抵抗されると困るので、頭を貫いてとどめを刺しておいた。よし、これで一安心……じゃない、イザベルを止めないと。
着ぐるみは黒いエネルギー弾を連発してレベッカを追い詰めている。
「あなたなんか消えちゃえー！」
うーん、本当に困った奴だな。いくら相手が恋のライバルだからってそれはないだろ。
「やめろ、イザベル！」
怒鳴りつけてみたが、着ぐるみは攻撃をやめようとしない。
「イザベルって誰にゃ？　おいらは名もなき黒猫にゃよ？」
「嘘つけ！」
仕方ない、強制退去を覚悟でこいつを止めよう。
「イザベル、いい加減にしないと怒るぞ！」
彼女に向かって踏み出そうとしたそのとき、レベッカが叫んだ。
「信一、手を出さないで！　自分でなんとかするから！」
「で、でも」
「私を信じて！」
「……わかった」
しょうがない、黙って見てることにしよう。でも危なくなったら割って入るけどね。
着ぐるみがレベッカにサーベルを突きつける。
「いい度胸してるにゃ！　それでこそおいらのライバルにゃ！」
「イザベルさん、こんなことしないと私に勝てないんですか？」
「にゃに？」
「女としての魅力で勝負すればいいでしょ？　そんなに自信がない

んですか？」
「にゃ……にゃにをー！」
着ぐるみはぶるぶると震えだした。もう本人だってばれてるんだから、そろそろ脱いだらどうだろう。そんなことを考えてると、彼女の体がまばゆい光に包まれた。
「ああもう、あっつい！」
光が収まると着ぐるみが消え去っており、銀髪の悪魔が現れた。いつもながら美人だし見事な爆乳だ。性格がアレなのが残念でたまらない。
彼女はレベッカを見るなり眉を吊り上げた。
「そんなに言うなら、女としての魅力で勝負してあげるよ！　見てなさい！」
ちょ、待て。何をする気だ。頼むから妙な真似はやめてくれ。
イザベルは目を細め、爆乳を揺らしながら近づいてくる。その瞳を見ていると吸い込まれそうだ。やばい、これはやばい。
「ま、待てよ。ちょっと待て……」
「うふふ、信一。今日と言う今日は私のものになってもらうよ」

イザベルの愛

イザベルは目の前に来るなり、俺のあごを右手の指で持ち上げた。
「ねえ、信一。あなたはオス、私はメス。雌雄は互いに求め合い、交わるのが世のことわりでしょ？」
ワインレッドの唇から甘い声がこぼれ落ちる。それを聞いているだけでぞくぞくしてしまう。
「信一みたいな強い男が好きなの。ね、私を選んでよ。あなたのすべてを受け入れるから」
その瞳が赤く輝き、俺をじっと見つめてくる。うっかり目を合わせると心を奪われそうだ。うろたえながら視線を落とすと、黒く光るブラに包まれた爆乳が目に入った。うう、耐えられない。なんでこんなことに。
さっきのビオレッタとのやり取りで、レベッカを怒らせてしまっている。この上イザベルと何かしようものならそれこそブチ切れるだろう。ここはなんとしても理性を保たなければならない。
そんな思いを知ってか知らずか、イザベルはそっと抱き着いてきた。爆乳がむにゅっと体に当たりどぎまぎしてしまう。
「信一……」
「え、えっ？」
「いやらしい女だなんて思わないでね、こんなことをするのはあなたに対してだけなんだから……」
彼女はせつなげな声で言い、俺をぎゅっと抱きしめた。さらにキスまでしようとする。やばい、そろそろ止めないと際限なく先へすすんでしまう。
「いくよ、信一」
「ちょ、待っ……わああ！」
慌ててその唇をさえぎると、彼女は悲しげに眉をひそめた。
「……そんなに私が嫌いなの？」

違う、そうじゃない。でも、だからと言って愛を受け入れるわけにはいかないんだ。わかってくれ。
イザベルは後ろを向いて両手で顔を押さえ、再び手をはずしてこちらを見た。瞳から涙があふれている。その不意打ちに俺は狼狽した。どうすればいいのかさっぱりわからない。
レベッカに視線を向けると、じっとこちらをにらみつけていた。
「さっさと振ってよ」という言葉が伝わってくる。うおう、怖い。怖すぎる。
「イザベル……ごめん、決して嫌いなわけじゃないんだ。でも俺にはレベッカっていう彼女がいるから……」
「いるから？」
「お前の気持ちには応えられない」
「う、う……」
彼女の美しい顔を涙が伝わってこぼれ落ちる。もう胸がしめつけられそうだ。
「ごめん、イザベル……」
「いいよ、あなた自身が選んだ答えだものね」
「本当にごめん」
「いいって」
イザベルは涙を拭いて微笑んだ。切れ長の目、高い鼻、すっきりと整った輪郭……これだけの美人なら、俺に振られたところで男に不自由することはないだろう。
やがて彼女はレベッカの前につかつかと歩いていき、話しかけた。
「色仕掛けにも屈しない、泣き落としも効かない。たいした彼氏だね」
レベッカは目を細め、じっと相手を見据えている。まだ警戒を解いていないようだ。
「……どうもありがとうございます」
「ねえ、もしあなたたちが別れることがあったらすぐ教えてよ。私がもらいに行くからさ」

途端にレベッカの眉が吊り上がる。
「縁起でもないこと言わないで！」
「あはは、ごめんねー」
イザベルはけらけらと笑っている。こいつ、さっきまで泣いてたのはなんだったんだ？
そのとき、彼女が何かを落とした。ちょ、これ目薬じゃないか！
「イ、イザベル……」
「なーに？」
「この目薬はなんだよ！」
「必殺アイテム。効かなかったけど」
「お前、だましたなあー！」
「てへっ！」
本当にとんでもない奴だ。油断も隙もない。
レベッカも呆れ顔で彼女を見つめている。
「イザベルさんって……」
「お楽しみいただけました？」
「楽しいわけないでしょ、もういいから消えてよ！」
「あーあ、簡単にキレるんだねえ」
「うるさい！」
レベッカが完全にキレてしまった。このままだとまたバトルになってしまう。それも困るので、さっさとつれていくことにした。
「じゃーな、イザベル」
「じゃーねー、信一。愛してるよー」
レベッカがものすごい勢いで彼女を罵倒しているけど、無視して引きずっていくことにした。そのうち怒りも収まるだろう。
「なんなの、あの女。信じられない！　どういう人生を歩んだらあんな悪女になるわけ？」
「まあまあ、そこまで言うほどのもんじゃないだろ」
「私の目の前で彼氏を誘惑するとかあり得なくない？　絶対おかしいよ、人として！」

うーん、全然怒りが収まらない。まあ矛先が俺からイザベルに移ったのはラッキーだけど。
「信一、あんなのに引っかかっちゃ駄目だよ！　身の破滅だからね！」
「う、うん」
さて、ダイヤモンドエッジを探そうかな。
巨人が壁に空けた穴の向こうには隠し部屋があり、二階へと続く階段があった。よし、登ってみることにしよう。
二階へ登るとまたもや廊下に出た。たくさんの扉があるのかと思いきや一つしかない。わかりやすくて助かる。
「レベッカ、開けるよ」
「うん」
そっと扉を開けて中をのぞくと、やたら派手な連中が寝そべっていた。金色のライオンと銀色のライオンだ。

黄金色の猛獣

毛皮が金色と銀色だとは言え、それ以外は普通のライオンと変わらないようだ。倒そうと思えば倒せないこともないだろう。

問題は、わざわざこいつらと戦う必要があるのかということだが……例によって連中の後ろに階段がある。上の階に行きたければ片づけるか追い払うかしなければならない。

俺たちはこっそりと部屋に入った。中はかなり広く、三十メートル四方くらいはありそうだ。一番奥に階段があり、その前には見事なたてがみをした例のライオンたちが寝そべっている。彼らを起こすことなく上に行くことができればベストだけど、たぶんそうはいかないだろう。

音を立てないようにそっと近づいてみると、金のライオンの耳がぴくりと動いた。さらにその目がゆっくり開いていく。くそっ、どんだけ耳がいいんだよこいつ。これはもう、倒す以外の選択肢がなさそうだ。

金のライオンは俺の顔を見るなり両目を見開き、立ち上がって咆哮した。その声が部屋の中に響き渡る。威嚇のつもりなんだろうが、そんなもの俺には通用しない。

「命が惜しけりゃそこをどけ！」

フレアバスタードを突きつけると奴はさらにいきり立った。続けて銀のライオンも立ち上がり、こちらをにらみつけてくる。いい度胸だ、まとめてかかってこい！

金のライオンが地を蹴った。その牙が一瞬で眼前に迫ってくる。うお、速い！

「この野郎！」

奴の攻撃をかわしつつ剣を振りきったが、見事にはずれてしまった。とは言えこちらにも被害はない。勝負はこれからだ。

そう言えば銀色の方は……と思って視線を向けると、レベッカと

にらみ合っていた。とりあえず、そっちはそっちでがんばってもらうことにしよう。
さて、とっとと片づけるか。
「おらあっ！」
人間の大人をすっぽり呑み込むほどの火の玉が現れ、金のライオンに向かっていく。これが当たれば死ぬだろう。
「ガアアッ！」
しかし、奴が一声吠えた途端に火の玉は弾け飛んでしまった。どうやら衝撃波を喰らったらしい。獣なのに味な真似をするもんだ。
「なら、これはどうだ！」
今度は無数の火矢が現れ、ライオンを目がけて飛んでいく。だが奴は素早く跳躍してきれいにかわしてしまった。うーん、やるなあ。敵ながらたいした強さだ。
そのとき、ライオンが大きく口を開いた。その中が金色の光を放っている。やばい、何か来る！
「グガアアッ！」
次の瞬間、エネルギー波が襲ってきた。まずい、やられる。必死にかわすと、それは壁を直撃して爆発を起こし大穴を空けた。こんなのを喰らったら命がない。
「らああっ！」
フレアバスタードを突きつけて光線を放ったが、またもやかわされた。よし、宝石の出番だ。
「これでもか！」
石をまとめて投げつけた瞬間、白く光る火の鳥が出現した。こいつならやってくれるはずだ。
鳥は閃光と化して飛びかかる。今度こそもらった……と思ったそのとき、ライオンがその首にかみ付いた。え、嘘だろ。なんだその反則技は！
奴は鳥を食いちぎり、再びこちらをにらみつけた。どうやら飛び道具は効かないらしい。直接やり合うしかなさそうだ。

「……たいした奴だな、お前」
思わずそんな言葉が出た。Ｓランクの俺がこれだけ攻撃しているのにびくともしないなんて、並の強さじゃない。
でも、だからと言って負けるわけにはいかないんだよね。俺は相原と一緒に日本へ帰るんだから。
「行くぜ！」
精神を集中しつつフレアバスタードを構えた。今までどんな魔物だって叩き斬ってきたんだ。ここでやられるつもりなんかさらさらない。
俺の真剣な表情を見て、ライオンも凄まじい殺気を放った。どうやらこいつも本気のようだ。よし、今度こそ決着をつけようじゃないか。
「灰燼と化すがいい！」
俺は地を蹴って疾走した。灼熱の炎をまとったフレアバスタードが赤い閃光と化し、金色のライオン目がけて襲いかかる。
「グオオオッ！」
奴もほぼ同時に飛んでいた。一人と一匹の体が交差する。
「うおおおっ！」
渾身の力で斬りつけたが、今一つ手応えがない。振り返って確認すると、奴の肩を浅く傷つけたにすぎなかった。こっちもネクタイをかみちぎられている。弁償しろよこの野郎。
「グガアアッ！」
ライオンは、全身からまばゆい光を放ちながら突進してくる。アレクセイと同じ技だ。これを喰らうと大ダメージを受ける上にぶっ飛ばされてしまう。
「おおおおっ！」
再びフレアバスタードを構え、真一文字に振りきった。今度ははっきりと手応えを感じる。
「グギャアッ！」
ライオンが悲鳴を上げながら後退した。このチャンスを逃してな

るものか。
「とどめだ！」
俺は一瞬で間合いを詰め、全体重をかけて真っ向から叩き斬った。
奴は凄まじい血飛沫を上げ、両断されてその場に転がる。
「悪く思うなよ」
肉塊と化したライオンは答えなかった。彼だってこんな死に方はしたくなかっただろう。凄絶な殺し合いが平然と行われているこの世界は、どこか歪んでいると言わざるを得ない。
銀のライオンに視線を移すと、こっちもレベッカに仕留められていた。
「よくやったな、レベッカ」
「うん、危なかったよー」
それは俺もだ。ここから先には、さらに強い敵が出るだろう。しっかり気を引きしめていかなきゃね。

束の間の休息

俺たちが休んでいる間、他のチームの連中は我先にと階段を登っていく。
「信一、私たちも行こうよ」
「ちょっと待ってくれ、少し疲れた」
この城に来てから気を張りっぱなしだ。ムクロと戦い、巨人と戦い、金のライオンとも戦った。精神的にも肉体的にも疲れてしまう。
レベッカは気分が落ち着かないようで、階段を見つめながらうろうろしている。
「このままじゃ他の人たちに取られちゃうかも……」
確かにそうだ。上の階にダイヤモンドエッジが普通に置いてあれば、誰かがあっさりと手に入れてしまうだろう。それはさすがにまずい。
「レベッカ、元気があるなら上に行きなよ」
「信一は？」
「もう少し休んでから行くよ」
「わかった、じゃあね」
彼女は急いで階段を登っていった。一方、俺は床に座ったまま動けない。ああ本当に疲れた。
どうせ上にはまだ魔物がいるだろう。レベッカが心配ではあるけど、あれだけ強ければたぶん問題ないと思う。強力な敵が現れたとしても互角以上に戦えるはずだ。
そうだ、ネクタイが破れてるんだった。みっともないからはずしてしまおう。取り去ってポケットに入れようとしていると、イザベルがひょっこり現れた。
「破れちゃったの？　直してあげるよ」
「え、俺に協力していいのか？」
「私は参加者じゃなくて主催者だもの」

「いや、俺だけに手を貸したら不公平じゃ……」
「あはは、ネクタイを直すくらい別にいいでしょ。ついでにブレザーも直してあげるよ」
そう言えばブレザーも破れてたっけ。よく見ればズボンもだし、もう満身創痍だなこりゃ。
「じゃあよろしく頼むよ」
「うん」
彼女がそっとふれるとネクタイが光輝き、元の形へと修復されていく。
「おお、すげー！　なあ、怪我を治したりすることもできるのか？」
「多少ならね。でも、あまりひどいのは無理だよ。手足がもげちゃったり首が取れちゃったりとかは」
「そういうのも治せればいいのにな」
「オズワルド様ならできるかも。あの人は別格だから」
イザベルは破れた制服だけでなく、怪我も一緒に治してくれた。ありがたい限りだ。俺はその顔を眺めながらふと疑問を感じた。
「なあ」
「え？」
「なんで協会で働いてるんだ？」
「オズワルド様にスカウトされたから」
へえ、スカウトねえ。じゃあ俺と違うルートでここに来たのかな。
「どういう経緯でそうなったんだ？」
「最初は、信一と同じように広告をクリックしてここに来たんだよ。参加者としてここに招かれた人間は私たちが初めてだったね」
「他にも招かれた人がいたのか？」
「うん、十人ちょっとくらいかな。みんな魔物にやられて死んじゃったけど」
「え、全員？」
「そう、生き残ったのは私だけ。気がついたらSランクになってたよ」

俺は二の句が継げなかった。どうやらイザベルは壮絶な過去を持っているようだ。
「ちょっと聞きたいんだけどさ。イザベルたちが、最初にここへ来た人間なわけでしょ。武器とか防具とかどこから調達したわけ？」
「違う違う。初めて招かれたのが私たちってだけで、人間自体は元々いたよ。オズワルド様が作った人造人間がね」
え、人造って……え？
「なんだそれ？」
「オズワルド様が組んだプログラムに忠実に従う、コンピューターみたいな人たちだよ。協会の建物の中で会わなかった？」
ああ、確かにそんな奴がいたな。自分をプログラムだとか言ってた女が。
「会ったよ。あれってやっぱり作り物だったのか」
「そう、魔法によってプログラムを埋め込まれた操り人形。人間のまがい物。オズワルド様に絶対服従するのが特徴」
「そんな連中がいるなら、わざわざイザベルをスカウトする必要なくないか？」
「オズワルド様の目的にそぐわないし、彼らにはいろいろと問題があるし」
見たところ、なんの問題もなさそうだったけどなあ。
「まず彼の目的っていうのが、あの街を『本物の都市』にすることなんだよ。人形たちに管理されてる街なんてまがい物もいいとこでしょ？　だから、最終的にはすべて本物の人間に入れ替えるつもりらしいよ。人造人間は単なるつなぎなんだってさ」
ふーん、なるほどね。オズワルドはここを魅力的な世界にして人を集めたいと思っているふしがあるし、どうしても本格的な都市にしたいんだろうな。
「あと、人造人間の問題点はね。本物に比べて知能も戦闘能力も格段に劣ること。これがとても大きいんだよ」
「どうして？」

「不測の事態に対処できないから。魔物が街に侵入して暴れだしたりとか、参加者がオズワルド様に反旗を翻したりとかね。それに、弱いから街の外に出ることもできない」
「オズワルド自身が対処すればいいじゃんか」
「いくらなんでも彼一人じゃねえ……だから配下として、Ｓランクまで上り詰めた人間をスカウトしてるんだよ。そういう人たちに魔法を教えてあげれば大体の問題に対処できるから」
「じゃあ俺もスカウトされるのかな？」
「たぶんね」
数多くの人間を死地に追い込む役なんて、頼まれてもやりたくないな。

イザベルは俺の顔を見つめながら言った。
「私も正直、あんなでき損ないのロボットたちじゃ話にならないと思ってるよ。Aランクの人間が一人暴れだしただけで彼らは大混乱に陥るんだよね」
「そりゃ確かに駄目だな」
「そんな人たちが管理してる以上、砂上の楼閣もいいところなんだよ。だから最終的にはSランクの人たちに管理させる必要があるわけ。この世界を自由に動き回れる上に絶大な戦闘力を誇る、あなたみたいな人間にね」
ふーん、なるほどね。管理する方も大変なんだな。まあ確かに、協会の人間が参加者より弱かったら反乱を起こされた途端にアウトだよね。
あれ、なんか長話しちゃったよ。ダイヤモンドエッジはどうなったんだ？
「イザベル、ごめん。俺はもう行くよ」
「うん、がんばってね。あとこれだけは言っておくけど……」
「え？」
「何があっても、私はあなたの味方だから」
彼女は俺の瞳をまっすぐに見つめた。そう言ってくれるのは嬉しい限りだ。
「ありがとう」
「どう致しまして」
イザベルは微笑みながら手を振っている。さあ、先を急ぐことにしよう。
階段を登ると広間に出た。広さは三十メートル四方くらい、床は白い大理石。ベージュ色の壁には花の絵や女性の絵が飾ってある。窓はステンドグラスになっていて、それを通った柔らかな日差しが

広間の中を照らし出す。なかなか優雅な雰囲気だ。
ところが、その中で起こっている出来事は優雅さと程遠いものだった。斬り裂かれた人間がそこかしこに転がり血の海を作り出している。こ、これは……
広間の中央に、光輝く二本の剣を持った男がいる。兜をかぶり鎧を着込んでいるものの、明らかに人間ではない。装備しているものも彼自身の体もすべて紫水晶でできているのだ。
そう言えばレベッカはどうしたんだろう。見回すと、広間の隅っこで震えながら剣を構えていた。どうやら怖じけづいたらしい。
「レベッカ、大丈夫か？」
「信一、来るの遅いよ」
「ごめんごめん。お前、こいつと戦ったのか？」
「ううん、まだ。さっきまで他の人が戦ってたから……」
今現在、この剣士とやり合っている人間はいないようだ。ってことは、戦っても誰かに協力したことにはならないね。よし、やろう。
「レベッカ、手を出すなよ。こいつは俺が倒す」
「う、うん。がんばってね」
今ここにいるのは俺とレベッカ、剣士の三人だけだ。誰かの横槍が入ることもないだろう。心おきなく戦える。
「行くぞ、おらあっ！」
フレアバスタードを突きつけると、光線が奴の体を直撃した。ところがそれは拡散し消えてしまう。あ、あれ。効果なし？
「くそっ！」
次に、宝石をまとめて投げつけた。白く輝く火の鳥が飛んでいく。これなら少しは……と思った途端に男の剣が煌めき、鳥を真っ二つに斬り裂いてしまった。こ、こいつ強いぞ。
今度は火の玉を連発してみたが、いくらぶつけてもびくともしない。どうやら飛び道具が効かないようだ。仕方ない、直接やるか。
俺はフレアバスタードを構え、じりじりと間合いを詰めた。周囲に十体を超す死体が転がっているところを見ると、こいつは相当腕

が立つに違いない。気を抜いたらばっさりやられてしまうだろう。だからと言って退くつもりはないけどね。
地を蹴って飛びかかった瞬間、戦士が右の剣で斬りつけてきた。それをかわすと、さらに左の剣を一閃させてくる。それから激しい突きの連撃、下段を狙った薙ぎ払いが続く。うお、強い。これは他の連中がやられるわけだ。
そうは言っても、俺とて剣士のはしくれ。剣を取って負けるわけにはいかないんだよ。
「沈め！」
鋭い斬り下ろしが戦士の頭部を襲う。奴は右の剣でがっちりと受け止めている。直後に左の剣で突きを放ってきたが、俺は身を翻してかわした。
すかさず剣を引き、今度は回転しながら横薙ぎの一閃を放った。これも右の剣でさばかれている。間髪入れずに突きをかましたがあっさりとかわされた。うーん、こいつは文句なしに強い。剣しか攻撃手段がないみたいだけど、それでも今まで戦った敵の中でトップクラスだ。
いよいよもって、相打ち覚悟で臨む必要がありそうだ。そうすれば強烈な攻撃を放つことができる。ただし自分の防御面を無視することになるので、こっちが喰らうダメージも計り知れない。
俺はフレアバスタードを鞘に戻し、柄を握りしめた。放つのはたった一発。ただし、研ぎ澄まされた強力無比な斬撃だ。鞘から引き抜きつつ剣を加速し、すり抜けざまに薙ぎ払って相手の胴を横から断ち割る。決まれば敵は即死だが、うっかり反撃を喰らえばかわしきれない。一か八かだ。
精神を集中させていると、戦士の動きがぴたりと止まった。左の剣をこちらに突きだし、右の剣を上段に構えている。正面から迎え撃つつもりらしい。いい度胸だ。
「死して屍、拾う者なし！」
俺は目を見開き、戦士に向かって疾走した。生きるか死ぬかは神

のみぞ知る、といったところだ。

破壊と喪失

戦士の剣が俺に向かって振り下ろされる。でもそんなことは関係ない。要はこいつを倒せればいいんだ。

「うおおおっ！」

フレアバスタードが閃光となって走る。頼むぜ相棒。この水晶野郎を再起不能にしてやってくれ。

俺は戦士の横を駆け抜けつつ、横薙ぎの一閃を放った。水晶が割れる音が響き渡る。斬った手応えもあるし、やったかな？

振り返り見てみると、戦士の右腕がなくなっていた。それは剣を握ったまま近くの床に転がっている。胴体を狙ったのに残念だ。でも二本の剣を一本に減らしたのは上出来と言えるだろう。

俺の方は、肩と腕に斬撃を喰らっていた。ブレザーが破れて血が出ているけど、どちらも軽傷にすぎない。誰がどう見ても向こうのダメージの方が大きいはずだ。何せ腕が片方なくなったんだからな。

俺は再びフレアバスタードを構えた。今度こそ仕留めてやる。あいつに殺された人たちの無念、今ここで晴らしてやるさ。

戦士は右腕があった部分に目をやり、首を振った。「しまった、俺としたことが」とでも言いたげだ。その動きを見ていると、こいつが思考能力や感情を持っているように思える。もしそうなら、これだけ不利な状況に立たされた以上逃げるという選択肢もあるだろう。

しかし彼は黙って剣を構えた。その動きに迷いは感じられない。俺は一種の感動が湧き上がってくるのを感じた。劣勢に追い込まれながら一歩も引かないその勇気。同じ剣士として見習うべきものがある。こいつが人間だったら、いい友だちになれたかもしれない。

「お前には感心させられるよ」

そう言うと、奴はまっすぐに俺の顔を見つめた。彼が言葉を話せないのが残念で仕方ない。もししゃべることができたなら、たぶん

こんなことを言ったんじゃないだろうか。「お互い様だ」と。
戦士はゆっくりと腰を落とした。俺と同じ技をやるつもりなんだろうか。だとしたらかなりやばい。こいつはスピードもパワーも半端じゃないし、さばき損なったら間違いなく即死だ。
でも、だからと言って引くつもりはない。
「来いよ！」
俺は中段に構えた。できることなら反撃しておきたい。なんかできないような気もするけど。
その直後に戦士が疾走した。その剣が光を放ちながら迫ってくる。
こんなところで死ねるか、絶対に生きて日本へ帰るんだ！
凄まじい金属音が響き渡り、奴は俺の横をすり抜けた。急いで自分の体を確認したが異常はない。どうやらうまくさばけたらしい。
さて、それなら反撃に移らせてもらうか。と思ったそのとき、フレアバスタードが半分に折れて床に落ちてしまった。え、ええっ？
「あ、相棒ー！」
まずい、さすがにこの状態で戦うのは無理だ。俺は近くに落ちていた戦士の剣をちょうだいした。
それはいいけど、悲しみが止まらない。この世界に来てから共に戦い、俺の身を守ってくれたフレアバスタードが折れてしまったのだ。こいつはもはや相棒、いや分身と言ってもいいくらいの存在なのに。
「やりやがったな！」
俺は剣を構えて戦士をにらみつけた。フレアバスタードの仇、絶対にとってやる。
「うおおおっ！」
真っ向から斬りかかり、渾身の一撃を浴びせた。戦士はがっちりと受け止めている。防がれるのは想定内だ。その状態のまま、すかさず相手の腹を蹴飛ばした。彼の体がぐらりと揺れる。
「らあっ！」
間髪入れずに薙ぎ払うと、奴の横腹を直撃した。残念ながら斬り

損ねたものの、相手は体勢を崩して倒れかかっている。「もらった」と思った瞬間、彼はいきなり突きを放った。それは俺の頬をかすめ、血が流れ出す。
「沈め！」
今度は逆袈裟に斬りつけた。戦士の肩が大きく裂ける。相手が後ずさったのを見届けた俺は、すかさず踏み込んで横薙ぎの一閃を放った。
「終わりだ！」
戦士の首から上が消え、その体がぐったりと崩れ落ちる。俺の勝利だ。ブレザーを斬り裂かれた上にフレアバスタードを折られたけど、勝ったんだ。
「やった……」
気が抜けたまま立ち尽くしていると、レベッカが走り寄ってきて抱き着いた。
「信一、すごい！　強すぎるよ！　かっこよすぎ！」
「俺の相棒が……」
「え？」
「フレアバスタードが折られちまった……」
「また買えばいいじゃない」
そういう問題じゃないんだけどな。今まで使ってきたから愛着があるんだよ。この剣自体に。
呆然としているとイザベルが現れた。満面に笑みを浮かべながら拍手なんかしている。
「信一、おめでとう！　さすがだよ！」
「何がめでたいのかよくわからないな」
「あなたが今持ってるのがダイヤモンドエッジなんだよ」
……え。ああ、これがそうなのか。フレアバスタードを真っ二つにするくらいだから、きっとすごい剣なんだろうな。
俺は倒れている戦士からもう片方の剣を取り上げ、二本まとめてレベッカに渡した。

「ほら、使いなよ」
「え、いいの？　信一の武器がなくなっちゃったし、あなたが使えば？」
「いや、いい。俺はフレアバスタードを修理してもらうから」
イザベルが折れた剣を見つめながら言う。
「たぶん直らないよ、それ。新しいのを買った方が……」
「嫌だ」
「……まあいいけどね」
ダイヤモンドエッジを手に入れた俺たちは街へ戻ることにした。
フレアバスタードが元に戻ってくれることを祈るばかりだ。

本日のお買い物

街へ戻った俺は速攻で武器屋に駆け込んだ。一刻も早くフレアバスタードを直してもらわないと困る。
カウンターに剣を置いて近くにあるベルを押すと、奥から店員が出てきた。三十歳くらいの男性だ。もう何度もここに来てるので顔なじみだったりする。
「いらっしゃいませ、信一様」
「これを直してほしいんですけど」
店員は半分の長さになったフレアバスタードを眺め、渋い顔をしている。うっ、駄目そうだ。やっぱり買い替えるしかないのかな。
「大変申し訳にくいのですが……」
「え？」
「修復は不可能です。新しい武器をお買い求めになった方がよろしいかと」
うわああ、なんてこった。相棒が再起不能に！
「ど、どうしても無理ですか？」
「無理です」
俺はがっくりと肩を落とした。
この剣に何度命を救われたかわからない。直せないのは仕方がないとしても、捨ててしまうのは申し訳なさすぎる。完全に溶かしてリサイクルしてもらうっていうのもなんだし、どうしよう。
「どこか、この剣を預かってくれるところはないですかね？」
「もしよろしければ当店でお預かりしますよ」
「え、いいんですか？」
「はい、信一様はお得意様ですし」
結局ここで預かってもらうことにした。それはいいとして、新しい武器を買わなければならない。
「あの、フレアバスタードがほしいんですけど」

「申し訳ございません、在庫を切らしておりまして……入荷は一週間後です」
うーん、そんなに長いこと待てない。困ったな。
「信一様は、どうしてもフレアバスタードをお求めになりたいのですか？」
「はい、使い勝手がいいんです。手に吸い付くような感じで」
「代わりと言ってはなんですが、クリムゾンバスタードという剣が存在しまして。フレアバスタードの強化版です。形は同じらしいのですが、斬撃の威力は桁違いだそうですよ」
え、そんなのがあるのか。これはいいことを聞いたよ。
「その剣はどこに？」
「オズワルド研究所です。Ａランク以上の方以外は入れないと聞いております」
あいつの名前がついてるなんて不吉すぎる。この世界にはびこる魔物たちを作ったのは彼だ。その研究所なんて言ったら、どうせろくなことをしていないだろう。
下手すりゃ人体実験の一つもしてるかもしれない。どうすれば人間を魔物に変えることができるかとか……うわあ、鳥肌が立ってくる。でも、クリムゾンバスタードはめちゃめちゃほしい。
「わかりました、そこへ行ってみます。ありがとうございました」
すぐに研究所へ向かおうとすると、店員に呼び止められた。なんだよ、急いでるのに。
「あの、武器をお持ちにならなくてよろしいのですか？」
げっ、しまった。そういや丸腰だったよ。こんな状態で行ったら即死確定じゃないか。
「か、買います。なんか武器をください」
「Ｓランクの方がお使いになるものでしたら、こちらなどいかがでしょう」
彼が出してきたのは三又の槍だった。剣士に槍をすすめるってどういうことだよ。

「あのー、できたら剣が……」
「どうか話だけでもお聞きください。この槍はネプチューンランスと申しまして、絶大な攻撃力を誇ります。信一様にぴったりかと」
絶大な攻撃力って、ちょっとひかれるな。
「具体的にどの程度なんですか？」
「魔物を突き刺したとしますよね」
「はい」
「そうすると衝撃が走って、相手を内部から木っ端みじんにします。よほど頑強な体をしていない限り逃れるすべはありません」
うーん、なんつーおっそろしい武器だ。
「特殊効果はないんですか？」
「水と電気を自在に操ることができます。衝撃波や光線、エネルギー弾も出せますよ」
「買った！」
「ありがとうございます！」
これは使える。クリムゾンバスタードを手に入れるまでのつなぎとしては充分だ。ついでに５０００万ポイントを注ぎ込み、限界まで強化してもらった。これでバッチリだよ。
「防具はお買い求めになりますか？」
「いりません」
「え、あの……」
「いらないっす」
店員が眉をひそめながら言う。
「信一様、研究所は危険な場所だと聞いております。お強いのは重々承知しておりますが……」
「いえ、本当にいいです」
いくら重力が半分くらいしかないと言っても、ごつい防具をつければそれだけ動きが遅くなる。俺の戦い方は一瞬でも速く相手を叩き斬るというものだから、実情にそぐわない。
「でしたら、せめて護身用のアイテムをお持ちになったらいかがで

しょうか」
「それって重いんですか？」
「いえ、指輪ですから」
男が指輪とか、なんかチャラい気がしなくもない。
「こちらです」
店員が出したのは、黒い宝石が埋め込まれたプラチナの指輪だった。なんだこれ、ブラックダイヤか何かかな？
「こちらはテレポートリングと申しまして、押せば瞬間移動します」
……はい？
「ただし、移動範囲は十メートル四方に限られますが」
なんだそれ。護身用って言うか、ほとんど反則じゃないか。
「買った！」
「ありがとうございます！」
俺はそれを強化してもらった。これで二十メートル四方を自由に瞬間移動できるらしい。ほとんど無敵のような気がする。

研究所への道

俺はネプチューンランスとテレポートリングを買い、以前に買った宝石は残らず売り払ってしまった。今一つ役に立たなかったからだ。

片やレベッカは、ダイヤモンドエッジ以外の装備品をすべて買い替えた。今回Aランクに上がったので、より強力なものを使えるようになったらしい。内容はこんな感じだ。

まずミラージュプロテクター。たいそうな名前がついてるけど、見た目は単なる青いブラとTバックだ。特徴としては銀で縁取られてるということだけ。

ところが、こんな布切れのくせにめちゃめちゃ強力らしい。敵に幻覚を見せたり幻影を出したりする上に、攻撃が迫ると自動で回避する。それでもかわせないときはバリアまで張るというおまけつきだ。単なるエロい服ではないらしい。

さらにフォースシールドという銀色の盾。危機が迫ると巨大化し、物理攻撃だろうが精神攻撃だろうがお構いなしに跳ね返す。

この二つだけで防御面は完璧な気もするけど、レベッカはもう一つ買い込んだ。セラフブーツという靴だ。これを履いていると体が浮き上がり、空中を高速で移動することができる。

彼女は強力な防具を装備してウキウキ顔だ。一方、俺は目のやり場に困っている。ブラもパンツも大事な部分を辛うじて隠している程度で、露出度が高すぎるのだ。

そんな俺の気持ちも露知らず、レベッカは上機嫌で笑っている。

「えへへ、似合うー？」

「う、うん」

「なんで見てくれないの？」

見た目がエロすぎるからです、はい。

そうだ、研究所に行く前にイザベルのところに行ってみよう。あ

いつなら内部の情報に詳しいだろうし。
「レベッカ、イザベルに会いにいこうか」
「えー、なんでー？」
「情報収集のためだよ」
彼女はふくれっ面をしながら見つめてくる。よほど行きたくないらしい。
「あの人さあ、すぐ信一を誘惑するんだもん。関わりたくないよ」
「まあまあ。何も知らずに研究所へ乗り込むのは危険だしさ」
俺は彼女をなだめすかし、協会へと向かった。

建物の五階でイザベルに声をかけると、彼女は笑顔で手を振った。
「信一、会いにきてくれたの？」
「うん、ちょっと用事があって」
「なーに？」
「オズワルド研究所に行きたいんだ。そこについて知ってることはないか？」
彼女は真顔になり沈黙している。あれ、何か変なこと言ったかな？
「……研究所ね」
「ああ。どんな魔物がいるのかとか……」
「私も一緒に行くよ」
「え？」
「案内してあげる。ただし、自分の身は自分で守ってね」
彼女はいつになく真剣な表情だ。そんなに危険な場所なんだろうか。
「わかった、よろしく頼むよ」
「いつ行くの？」
「明日の朝、八時頃だね」
「じゃあ街の入口で待ち合わせしましょう。またね」
彼女は再び仕事に戻った。あれ、なんだかそっけないな。いつもだったらねっとりと誘惑してくるのに。

まあでも特に問題はない。俺とレベッカは宿屋に向かい、そこで一泊した。

翌日の朝、街の門の前で待っているとイザベルが現れた。悪魔のいで立ちで来るかと思ったが違うようだ。髪や瞳は黒いままで、肌も浅黒い。着ているのは首から足までぴっちりと覆った黒いボディスーツ、武器は金色のサーベルとクロスボウだ。

「イザベル、おはよう」

「おはよう」

笑顔で声をかけたのに、彼女は真顔のままだ。いつもならにこにこしながらすり寄ってくるのにどうしたんだろう。

レベッカが無言で見据えたが、イザベルは目を合わそうともしない。いよいよ変だ。

「イザベル、何かあったのか？」

「別に」

うーん、そっけない。なんか悲しくなってくる。まあいいや、全員そろったし出発しよう。

「じゃあ行こうか」

「うん。私が案内するからついてきて」

彼女は先に立って荒野を歩き始めた。レベッカがこっそり耳打ちしてくる。

「なんか別人みたいだね、どうしたんだろ」

「さあねえ」

俺にもさっぱりわからない。よし、聞いてみよう。

「イザベル！」

「何？」

「なんでそんなにムスッとしてるの？」

彼女は無言で歩いていく。え、もしかしてシカト？

ようすをうかがっていると、イザベルはようやく口を開いた。

「三週間くらい前、オズワルド研究所に踏み込んだことがあってね。

男一人女二人のチームで」
「へえ、今と同じだな」
「うん、目的もね。クリムゾンバスタードを手に入れようと思って」
「そのときは協会員だったのか？」
「ううん、三人とも普通の参加者。男性はイギリス人、女性はアメリカ人だったよ」
「へえ」
確か初期の参加者たちは、イザベルをのぞいて全員死んだはずだ。沈黙していると彼女はさらに続けた。
「当時の私は、リーダーとしてチームを引っ張ってたんだよ。自分はSランク、他の二人はAランクだった」
「ふーん、それで結果は？」
イザベルの体が細かく震えている。しまった、聞くんじゃなかったよ。クリムゾンバスタードがまだ研究所の中に残ってるんだから失敗に決まってるじゃないか。
「ご、ごめん……」
「ううん、気にしないで」
それにしても、Sランク一人にAランク二人のチームで失敗ってどんだけ厳しいんだ。これは気を引きしめていかなきゃならないな。

狂気の研究所

やがて俺たちは研究所にたどり着いた。三階建てでかなりの面積がある。大型のデパートに引けを取らないほどだ。

入口はガラス製の自動ドア。中に入ってみると広々としたロビーがあり、受付カウンターには二十歳くらいの女性が一人座っていた。後ろで束ねた金のロングヘアに真っ白な肌、碧い瞳、彫りの深い顔。着ているのは灰色のスーツだ。

遠目から見た限りは普通の人間だけど、なんだかぞっとするような冷たい雰囲気を醸し出している。俺はこっそりイザベルにたずねた。

「あれって人間？」

「ううん、魔物」

「ここって魔物が管理してるのか？」

「うん。前は人間に管理させてたんだけど……」

「させてたんだけど？」

「その人が食べられちゃったんだよね。仕方ないから魔物に管理させてるみたい」

なんだそれ……いろいろおかしいと思うよ、俺は。

「ここは魔物を作り出すための研究所なんだよ。人造人間をベースにした人間型をね。彼らがまた、あり得ないくらい凶暴なわけ。そんな場所をまともに管理しようって方が無理な話だよね」

「あそこにいる女の人もそうなのか？」

「うん、彼女は割とおとなしいんだよ。例外中の例外。だからここの管理を任されてるの」

ふーん、じゃあちょっと話しかけてみるか。

「あのー……」

声をかけたとたんに彼女は鋭い目つきでにらみつけてきた。こ、怖い。怖すぎる。

「何かご用ですか？」
「クリムゾンバスタードをもらいにきたんですけど」
「でしたらご自由にお立ち入りください。その代わり命の保証は致しません」
話してるだけで、ものすごい殺気を感じる。あまり関わりたくないし早く先に進もう。そう思って踏み出したとき、彼女はイザベルを見ながらくすくすと笑い出した。
「これはこれは……仲間を惨殺されて逃げ帰った負け犬が、よくもまあのこのこと」
途端にイザベルの目が吊り上がる。
「もう一度言ってみなよ、パトリシア。その首を叩き落としてあげるから！」
「ふふっ、今度はあなたも死んでみますか？　お手伝いしますよ」
彼女は鋭い牙をむき出しイザベルをにらみつける。ちょ、待てよ。管理人ともめてもしょうがないだろ。
「イザベル、落ち着け！」
「許せない、この女……叩き斬ってやる！」
「やめろって！」
必死に肩をつかんで止めていると、パトリシアはあざ笑った。頼むからこれ以上煽るのはやめてほしい。
「くくっ……冷静さを失った状態で戦っても早死にするだけですよ。お気をつけくださいね」
俺はなんとかイザベルをなだめ、研究所の内部へ続くドアへと歩いた。背後でパトリシアが哄笑してるけど気にしないことにしよう。
一方でイザベルはぶるぶると震えている。なんとか落ち着かせないとやばそうだ。
「あまり気にするなって、ちょっとからかわれたくらいで熱くなるなよ」
「私は……」
「え？」

「仲間を二人も殺された上にあっさり逃げだした負け犬だよ。パトリシアも許せないけど、自分自身はもっと許せない」
俺は彼女の肩を抱いた。レベッカの視線が痛いけど今はしょうがない。
「大丈夫、今度はうまくいくさ。敗走した汚名を返上してやろうぜ」
「……うん」
イザベルの表情がだんだんやわらかくなっていく。
「お前の仲間を殺した奴を覚えてるか？」
「忘れもしないよ」
「よし、じゃあ仇をうってやろうぜ」
「うん！」
彼女の顔に闘志がみなぎっている。よし、いい感じだ。レベッカがものすごく冷たい目でこっちを見てるけど、気づかないふりをした。
自動ドアから内部に入ると、だだっ広い場所に出た。幅は十メートルくらいで奥行きはわからない。暗くてよく見えないのだ。両側には円筒型のガラスケースが並んでいて、その中から発生する青白い光だけが周囲を照らしている。他には何もない。
イザベルがガラスケースを指さしながら言う。
「あの中には魔物が眠ってるから、できる限り近づかないようにして。人間の気配を察知すると襲ってくるよ」
俺とレベッカは無言でうなずいた。それにしても不気味なところだ。さっさと目的を果たしておさらばしよう。
イザベルは先に立って歩き、俺とレベッカはその後に続いた。ガラスケースの中には服を着た人造人間が一人ずつ入っている。鎧を着た者や剣を持った者もおり、年齢も性別もばらばらだ。ただ、これだけは共通している。ものすごく気味が悪い。
「しかし、見た目は普通の人間だよなあ」
つぶやきながら歩いていたそのとき、ガラスケースの中にいる男性がこちらを見た。思わず目を合わせてしまう。げっ、やばい！

その直後、彼はケースを叩き割って跳び出してきた。二十歳くらいで鉄の鎧を着込んでおり、二メートルくらいの巨大な剣を握っている。グレートソードと呼ばれる武器だ。

「くっ、しまった！」

急いでネプチューンランスを構えると男性は突進してきた。あれだけ長い剣じゃ使い勝手が悪いだろう。その斬撃をかわすのは簡単だ。

「グガアアアッ！」

彼は叫び声を上げるや否や、剣を一閃させた。げっ、速い。

「うわっ！」

俺は咄嗟に後退してかわした。こいつ、なんて馬鹿力だ。あと頭が悪すぎる。グレートソードは相手を突くものであって振り回すものじゃない。そんな戦い方をしたら、あっという間に息が上がってしまうし隙だらけだ。要するに「殺してください」と言ってるようなもんだよ。わかってるのかな。

剛腕の魔剣士

俺はネプチューンランスを振りかざした。途端に電撃が発生して男性に襲いかかる。よし、もらった……と思ったが、彼は横に跳んであっさりとかわしてしまった。うーん、侮れない。

戦いの音を聞きつけたのか、もう一つのガラスケースをぶち破って女性が出てきた。見た目は二十歳くらいで着ているのは布の服だ。武器は何も持っていないし特に危険でもないだろう。

……と思ったが甘かった。彼女の右腕が突然伸び、俺を目がけて襲いかかってきたのだ。しかも先端が槍に変わっている。なんだこりゃ、反則だよ！

「おおっと！」

辛うじてその一撃をかわすと、右腕は再び縮んで元に戻った。彼女は金色のロングヘアを振り乱しながら笑っている。

「キャハハハ、キャッハハハ！」

こ、怖い。目は赤く光ってるし、鋭い牙が生えてるし……やっぱり魔物だ。間違えても人間だと思っちゃいけない。とにかく一匹ずつ倒さないと。

「イザベル、女の方を頼むよ」

「了解」

「レベッカも頼む」

「任せて！」

俺は男性に槍を突きつけた。さあ、これで一対一だ。勝てると思うなよ！

「らあああっ！」

踏み込んで突きかかると、彼は瞬時にかわして斬りつけてきた。なんとかよけたが今度は薙ぎ払ってくる。くっ、面倒な奴だな。これでも喰らえ！

再びネプチューンランスを突き出した瞬間、水撃が男性を襲った。

彼はかわしきれずにこれを受けてよろめいている。よし、今だ。
「もらった！」
一気に踏み込んで繰り出した突きが男性の左肩を直撃した。次の瞬間、刺した部分が派手に砕け散る。これであいつは右腕しか使えない。グレートソードを片手で操るのは無理だからこれで勝負ありだ。
「もう抵抗しても無駄だ、武器を捨てろ！」
叫んでみたけど、彼はお構いなしに突進してくる。もしかして言葉が理解できないのか？
「おい、やめろって……」
「グガアアアッ！」
鋭い斬撃が襲ってくる。うお、危ない。つかこいつ、右手だけでグレートソードを振り回してるよ。どんだけ腕力あるんだ。
「この野郎！」
すかさず突きをくれてやったが、またしてもかわされた。馬鹿力だし素早いしとんでもない強さだ。こんなのがうようよいるんじゃかなわない。
とにかくこいつを止めないと。
「おらあっ！」
再び突きを繰り出そうとした瞬間、男性は反応して横に跳んだ。かかったな、今のはフェイントだ。
「喰らいやがれ！」
彼の着地点を目がけて電光が走る。さすがにこれはかわせないはずだ。
「ギャアアアッ！」
よし、当たった。これで終わりだ。
「おおおおっ！」
衝撃波が次々と襲いかかり、男性を弾き飛ばす。彼はそのまま壁に叩きつけられて動かなくなった。俺の勝ちだ。
さて、女性の方はどうなっただろう。周囲を見回すと彼女はイザ

ベルたちに倒されていた。こちらには特に被害もない。
「イザベル、助かったよ」
「いーえ」
「レベッカもありがとう」
「ううん、お互い様だよ」
俺たちは他の魔物を刺激しないよう、こっそりと歩いていった。
正面にエレベーターが見える。あれで上の階に行けばいい。
「イザベル、三階へ上がればいいのか？」
「そうだよ。敵がどんどん強くなるから気をつけてね」
しばらく待ってみたが、エレベーターはちっとも降りてこない。
あれ、どういうこと？
「イザベル、これって……」
「故障してるみたいだね。階段で行こうか」
エレベーターの横に階段がある。これで上に行けそうだ。でもなんか叫び声が聞こえてくるし、あまり行きたくない気もする。
イザベルはお構いなしに薄暗い階段を登っていく。すごい度胸だ。
俺はどうもこういう不気味な雰囲気は苦手でしょうがない。
レベッカが震えながら俺にしがみついてくる。
「信一、怖いよ……」
いや、俺も怖いんだけど。でも男としてそんなことは言えない。
「大丈夫、俺がついてる」
「頼りにしてるからね」
なんかイザベルから殺気を感じるけど、気づかないふりをしておこう。
二階に上がって廊下のドアを開けると、中は真っ暗で何も見えなかった。これじゃいくらなんでも進めない。
「イザベル、照明のスイッチはないのか？」
「ちょっと待ってね、えーと……」
彼女は壁を伝っていき、何やらカチカチと音を立てた。だがなんの反応もない。

「あれ？　あれれ？」
「なんだ、駄目なのか？」
「おかしいなあ……ちょっと待ってね。パトリシア、パトリシアー！」
え、こんなところで叫んだって聞こえないだろ。あの人は一階にいるんだし。
ところがその考えに反して、天井から声が聞こえた。
「なんですか？」
「電気つけてよ、電気！」
パトリシアがくすくす笑うのが聞こえる。
「嫌ですよ。あなたは協会員ではなく、参加者の一人として来たのでしょう？　でしたら協力しかねます」
「ちょっと、ふざけないで！　後でどうなるかわかってるんでしょうね？」
「ふふっ、わかりませんね。なんですか、そのつまらない脅迫は？」
「ふーん、そういう態度を取るんだ。じゃあこっちにも考えがあるよ」
なんだなんだ、何をする気だ？
黙って成り行きを見守っていると、イザベルの剣が金色に光りだした。もしかしてこれをライト代わりにするつもりだろうか。

＞ｉ１５４１２―１２７０＜

神速の殺し屋

そのとき、イザベルの剣から光線が発射された。それは周囲を照らしながら近くの本棚を直撃する。
「ちょ、何してんだ！」
「いいのいいの、まあ見ててよ」
やがて棚に並んだ本に引火し、炎が巻き起こった。まさかこれで部屋を明るくするつもりか？
呆気に取られていると、天井からパトリシアの叫び声が聞こえた。
「きゃあああ、何するの！　頭おかしいんですか、あなたは！」
「かもね」
「こ、こんな……あり得ないし！　このキチガイ、早く消しなさいよ！」
「やだ」
イザベルは燃え盛る本棚を平然と見つめている。いいのかな、本当にいいのかな？
パトリシアがさらにわめき散らす。
「あなた、それでも協会の人間なの？　こんなことしてただで済むと思ってるわけ？」
「ふふっ、思ってるよ。つまらない脅迫だね」
パトリシアは沈黙している。たぶん絶句したんだろう。イザベルが得意げに笑いながら天井に向かって言う。
「あなたには、ここを管理する責任がある。保管してる資料が全部焼けたらどうなるかなー？」
「く、くうっ……」
「ほらほら、早く明かりをつけないとどんどん燃やしちゃうよー？」
「そんなことしたら、あなただって炎に巻かれて焼死するかもよ！」
「ううん、信一のネプチューンランスがあるから平気」
パトリシアがまたもや沈黙する。この二人、性格の悪さじゃいい

勝負だ。
「ほーら、燃やすよ燃やすよー」
「嫌あああっ、オズワルド様に殺される！」
「じゃあさっさと明かりをつけてよ」
「わ、わかったからもうやめて！　お願い！」
部屋の明かりがつき、周囲が明るくなった。どうやらここは資料室らしく、本やらファイルやらがぎっしり詰まった棚が壁際に並んでいる。幅は十メートルくらいで、奥行きは五十メートルくらいありそうだ。
「なんだここ、誰もいないのか？」
そうつぶやくと、奥にあるドアを開けて一人の男性が入ってきた。見た目は高校生くらい。逆立った短い金髪、白い肌、精悍な顔に引きしまった体。上半身は裸で下半身に赤い短パン、足にスポーツシューズを履いている。武器は両手に装備した鉄の爪だ。
彼は俺たちを見回した後、小馬鹿にしたような口調で言った。
「へっ、男が一人に女が二人かよ。弱そうな奴らだなあ」
イザベルがむっとしながら突っかかる。
「何よ、偉そうに。でき損ないの人形が」
「威勢のいい姉ちゃんだな。胸もでかけりゃ態度もでかいや」
男は鉄の爪を構えた。俺もただちにネプチューンランスを構える。イザベルやレベッカも武器を振りかざし、完全に戦闘態勢だ。こいつ、一対三でやるつもりか？
「イザベル、俺が戦うから下がっていてくれ」
「え、大丈夫なの？」
「ああ」
「わかったよ、まあ信一なら問題ないよね」
「レベッカも」
「う、うん」
二人が引き下がると、男はにやにや笑った。なんかいちいちムカつく奴だな。

「へへっ、エロい女を二人もつれていい身分だね」
「うるさい、死にたくなけりゃとっとと消えろ。お前なんか俺の敵じゃない」
「おー、たいした自信だな。三人がかりでいいんだぜ、無理すんなよ」
こいつもたいした自信だと思うけどなあ。俺を相手にそんな口を聞いていいのか？
まあいいや、さっさと倒して先に進もう。
「おらあっ！」
ネプチューンランスが生み出した電撃が襲いかかり、鉄の爪を直撃した。男は感電して全身を震わせている。なんだ、呆気ないな。この程度かよ。
そう思ったのだが彼はぴんぴんしている。あれ、あれれ？
「うーん、効くねー」
全然効いてるように見えないぞ、この野郎。
「じゃあ、次はこっちから行くぜ」
男は再び身構えると疾走した。って、速い！
「わあっ！」
目の前を走る閃光を必死でかわしたものの、爪の先が腕をかすめていた。ブレザーとワイシャツが破れて肌が見えている。くっ、なんだこいつ。
気を取り直して槍を構えたが、奴が間髪入れずに斬りかかってきて反撃できない。かわすのがやっとだ。
「おらおら、どうした！　その程度か！」
再び彼の爪が襲ってきて、俺の胸の辺りを斬り裂いた。今度は中までやられたらしく激痛が走る。
「ヒャッハー！　とどめだ！」
男は地を蹴り、十文字に斬撃を放った。しかしそれは空気を斬り裂いたにすぎない。俺はテレポートリングを使い、既に奴の背後に回っている。

すかさず渾身の力で突きを繰り出したが、彼は身を翻してかわした。なんて奴だ。普通、後ろからの攻撃をかわすか？
男は跳び下がって距離を取り、こちらをにらみつけている。
「なんだテメー、妙な技を使いやがって。瞬間移動かよ？」
「ああ。驚いたか？」
「別に。そんな技を使わなきゃ俺と戦えないのか？　チキン野郎」
こいつ、本っ当にムカつくな。
「じゃあ無しで戦ってやるよ。ただし武器は替えさせてもらう」
「おう、好きにしろよ。妙な技さえ使わなきゃそれでいい」
俺はテレポートリングをはずしてポケットにしまい込み、イザベルに声をかけた。
「悪い、その剣を貸してくれないか？」
「え、いいけど……スティングサーベル使ったことあるの？」
「ないよ。心配すんな、別に剣ならなんでもいい」
残念ながら、不慣れな武器でこいつを倒すのは無理だ。サーベルも使ったことがないけれど、それでも槍よりはフレアバスタードに近い。
俺はネプチューンランスをイザベルに渡し、代わりにスティングサーベルを受け取った。うん、やっぱりこっちの方がしっくりくる。これなら充分戦えるはずだ。
「さあ行くぞ、あまりの強さに腰を抜かすなよ！」

Sランクの力

スティングサーベルを突きつけると、男はあざ笑った。
「槍と剣を取り替えたくらいで強くなったつもりか？」
「ああ。俺はこの世界に来てからずっと剣を使い、どんな強敵だろうが叩き斬ってきたんだ。甘く見てると早死にするぞ」
「おもしれえ。じゃあ、その力を見せてみろよ。ハッタリじゃないことを祈ってるぜ」
おお、見せてやるさ。力だけじゃない、格の違いをな。
「らあああっ！」
金色のサーベルが煌めき、閃光と化して走る。誰にも俺は倒せない。誰にも俺は止められない！
一瞬で間合いを詰めて真っ向から斬り下げると、男は顔を強張らせながら受け止めた。だが、次の瞬間に俺の膝蹴りが直撃する。
「ぐはっ！」
体勢を崩したところを一気に薙ぎ払うと、彼は辛うじて鉄の爪で防いだ。ふん、しぶとい奴め。これで終わると思うなよ。
さらに踏み込んで突きを浴びせ、足を払い、逆袈裟に斬りつける。目にも留まらぬ猛攻だ。男はなんとかさばいているものの、顔は恐怖にゆがんでいる。
「なんだ、こいつは……」
「今さら後悔しても遅い！」
すかさず突きを連発すると奴は倒れかかった。その右手を目がけて斬りつけ、鉄の爪を弾き飛ばす。
「あっ！」
彼は咄嗟に手を伸ばした。隙だらけだ。悪いけど、こんなチャンスを逃すほど甘くない。
次の瞬間、スティングサーベルが男の胴を真っ二つに斬り裂いていた。鮮血が噴き出して周囲を赤く染めていく。

「作り物にしちゃあよくやったよ、じゃあな」
スティングサーベルをイザベルに返すと、彼女はその場に立ち尽くしていた。
「つ、強っ……こんなにあっさりと……」
「ん？　ああほら、一応Ｓランクだし」
「やっぱかっこいいよ、惚れ直した。ねえ、今度デートしてくれない？」
レベッカが眉を吊り上げながらイザベルを突き飛ばす。
「あなたは、いつもいつも！　そうやって人の彼氏に手を出すのやめてよ！」
イザベルはそっぽを向いて知らんぷりしている。
「こ、この女……ねえ、信一からも何か言ってよ！」
「え、ああ。えへへ」
「ちょ……何へらへらしてるわけ？　信じられない！」
まずい、これじゃチームがバラバラになってしまう。
「レベッカ、そんなに怒るなよ。口で言ってるだけで具体的に何かしたわけじゃないんだしさ」
「だって、これからしようと……」
「しないよ。ほら、先を急ごう」
そう言いながら肩を叩くと、彼女は渋々怒りを収めた。それを見たイザベルがにやにや笑いながら話しかけてくる。
「嫉妬深い彼女を持つと大変だねー」
「いや、その……」
「信一を取られまいと必死なんだよ。よっぽど自信がないんだろうね」
ああ、やばい。イザベルが煽る、レベッカがキレるっていう流れをいい加減になんとかしないと。
「イザベル、もうやめてくれよ。チームが崩壊するだろ」
「ごめんごめん」
彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべている。わかってるのかな本当に。

さて、そろそろ先に進むことにしよう。再びイザベルが先頭に立ち、俺はネプチューンランスを持ってその後に続く。レベッカは眉を吊り上げながら俺にしがみついている。いよいよもってイザベルが気に入らないらしい。

ドアを開けて次の部屋に進むと、五十メートル四方はありそうなだだっ広い部屋に出た。壁も床も真っ黒で、青い光が碁盤の目のように走って内部を照らしている。また中央には円筒型のガラスケースがあり、そこには無数の管がつながっていた。

イザベルがケースをにらみつけながら言う。

「あの中にいるのがレギオン、私の仲間を殺した奴だよ。光の輪を使うから気をつけて。下手に触れると真っ二つにされるからね」

へえ、それは怖ろしい奴だ。どれどれ、ちょっとケースをのぞいてみよう。

中には二十代半ばくらいの男性が入っている。ストレートロングの銀髪、彫りが深く整った顔、白い肌。着ているのは長袖の服と長ズボン、革靴。全身黒ずくめで、どこか不気味な雰囲気を感じさせる。どうやら今は眠っているようだ。

あれ、こいつ真紅の剣を持ってるよ。もしかしてこれがクリムゾンバスタード？

「イザベル、これって……」

言いかけた途端に彼女が叫んだ。

「信一、危ない！」

「えっ？」

慌てて跳び下がると、無数の閃光が走りケースを粉砕した。ガラスが割れる音が響き渡る中、レギオンが剣を持ってゆっくりと立ち上がる。

「お前はあのときの女……くくっ、性懲りもなくまた来たのか。よほど死に急ぎたいらしいな」

イザベルがスティングサーベルを構えた。その声は震えている。

「私はもう逃げない、今度こそあなたを倒す！」

「おもしろい、やってみろ」
「信一とレベッカは手を出さないで、こいつは私がやるから！」
Aランクを二人も殺すような奴にイザベルは勝てるんだろうか。
それに一度負けてるし。俺は疑問を感じながらも引き下がった。レベッカもそれに続く。

光のレギオン

イザベルの瞳に怒りの炎が宿っている。もう止められない。
「はあっ！」
彼女はスティングサーベルを振りかざした。金色に輝く矢が次々と現れてレギオンに殺到する。
「小賢しい！」
彼は巨大な盾を作り出してこれを防いだ。矢はすべて弾かれてしまっている。やはりこの男、一筋縄ではいかない。
イザベルはすかさずクロスボウを構えた。しかし矢が見当たらない。どうするつもりだろうと思いながら見ていると、何もなかったクロスボウの上に光の矢が現れた。
「行け！」
イザベルがすかさず発射する。でも、どうせまた弾かれるんじゃないだろうか。
矢は閃光となって飛んでいき、盾を直撃した。途端に爆発が起こり、盾を粉々に吹き飛ばす。おお、やるじゃん。
レギオンが眉を吊り上げてイザベルを見据えている。
「たいした武器を持っているな」
彼女は答えず、再びスティングサーベルを振りかざした。今度は無数の光弾が現れて相手に殺到する。
「くっ！」
彼がクリムゾンバスタードでそれを弾き返している間に、イザベルがゆらりと動いた。あれ、なんだか二人に見える。目の錯覚か？
彼女はどんどん増えていき、最後には五人になった。その中の一人が疾走して斬りかかる。
それを見た彼は左手を一閃させた。直後に光の輪が現れて巨大化し、イザベルを襲う。やばい！
ところが、斬られた彼女は消えてしまった。なんだ幻影か……じ

ゃあ本体はどこに？
　レギオンの周りを注視していると、その左右にイザベルが現れて斬りかかった。彼はすかさず光の輪を振りかざして反撃する。
「小癪な真似を！」
　光の輪が二体を斬り裂いた……と思ったが、どちらも消えてしまった。これらも幻影だったらしい。彼の背後で何かが光っている。あそこにいるのが本体だな。行け、イザベル！
　目を見開いた彼女が跳躍し、レギオンを背後から斬り下ろした。だが彼は身を翻してかわしている。くっ、駄目か。なんて奴だ。
　彼は目をむいて怒鳴った。
「いい加減に目障りだ、消えろ！」
　光の輪がイザベルを襲う。まずい、やられてしまう。
「イザベル！」
　思わず叫んだ瞬間、彼女はにやりと笑った。光の輪がその体をすり抜ける。あ、あれも幻影かよ！
　レギオンが呆気に取られた瞬間、その体を背後からイザベルが貫いた。うお、あいつってこんなに強かったのか。これほどまでとは思わなかった。
　彼女はサーベルを引き抜いて跳び下がった。レギオンは大量の血を噴き出し、その場に立ち尽くしている。これは勝負ありだろう。
「ぐうっ……腕を上げたな、イザベル」
「ありがとう、安らかに眠ってね。あなたが殺した私の仲間によろしく」
「ああ、光の輪で真っ二つにされた間抜けどもか。別に会いたいとも思わないな」
「くっ、こいつ……とどめを刺してやる！」
　イザベルが再び斬りかかると、レギオンは光の輪を振りかざした。それをかわした彼女にクリムゾンバスタードの一撃が襲いかかる。
「くうっ！」
　イザベルはサーベルでこれを受けたものの、剣圧で弾き飛ばされ

てしまった。こ、この男……不死身か？
彼は俺たちを見回して笑った。いつの間にか血は止まっている。
「無駄だ、無駄だよ。貴様らごときが私を倒すことなどできない」
なるほど、これは強敵だ。どうやら俺の出番だね。
「イザベル、下がってろ」
「なっ……待って、こいつは私が！」
「お前じゃ無理だ」
「し、信一。私は仲間の仇を……」
「それで自分が死んだら意味ないだろ」
彼女は必死に首を振っている。
「わ、私は絶対に引かないよ。そんなことをしたら死んだ二人に申し訳ないもの」
「仲間の仇は、代わりに俺が取る。信じてここは引いてくれ」
レベッカも彼女を見つめながら言う。
「イザベルさん、彼を信じようよ」
「う……うう」
彼女はうつむきながら引き下がった。よし、これでいい。後はあいつを片付けるだけだ。
レギオンが笑みを浮かべながら言う。
「なんだ、お前からあの世に逝きたいのか。どうして人間という生き物は、こうも死に急ぐのか理解に苦しむな」
「そりゃ誤解だよ、自分が死ぬなんてひとかけらも思ってない」
「自信過剰は身を滅ぼすぞ」
レギオンがクリムゾンバスタードを突きつけてくる。
「私は光のレギオン。この世界に倒せない者など存在しない」
こちらもネプチューンランスを構えて言い返す。
「俺は高木信一。立ち塞がる敵は、誰であろうが叩き潰す！」
レギオンはゆっくりと空中に浮き上がった。げっ、こいつ飛べるのか。聞いてないぞ。
「ふはははは、死ね！」

光の輪が次々と現れて巨大化し、襲いかかってくる。一発でも喰らえば命はない。必死にかわしていたそのとき、眼前にクリムゾンバスタードの斬撃が迫った。くっ、いつの間に！

「消え失せろ！」

しかし、彼の剣は空気を斬り裂いただけだった。俺はその背後にテレポートしている。Ｓランクなめんな！

渾身の力で突きを繰り出すと、奴の右腕にヒットした。直後にそれは砕け散り、握っていたクリムゾンバスタードが地面に転がる。

「き、貴様！」

レギオンは瞬時に飛び上がって距離を取った。砕けた右腕がすごい勢いで再生していく。これは面倒な敵だ。

それはともかく、この剣を使わない手はないだろう。すぐにクリムゾンバスタードを拾い上げて握りしめた。全身に力がみなぎってくる。

俺はネプチューンランスをレベッカに放り投げ、クリムゾンバスタードをレギオンに突きつけた。

「俺の前に立ったことを、あの世で後悔するがいい！」

真紅のバスタード

俺はクリムゾンバスタードをレギオンに向かって振り抜いた。その斬撃の軌跡が真紅の刃と化し、巨大化しながら飛んでいく。おお、こんなものを出せるのか。気に入った。

レギオンは素早く横に飛んで刃をかわし、光の輪を次々と生み出して投げつけてくる。だが、テレポートリングを持った俺にそんなものは通用しない。瞬時に移動して残らずかわしてしまう。さて、反撃に移るか。

「行け！」

再びクリムゾンバスタードを振り抜くと、今度は巨大な火の鳥が飛び出してレギオンに襲いかかった。翼の端から端までの幅は十メートルくらいあるだろう。

彼はすかさず光の輪を放った。それは狙い違わず火の鳥を直撃して斬り裂く。こらっ、あっさりやられるな。出した意味がないだろうが！

……と思っていたら、火の鳥はお構いなしにレギオン目がけて突っ込んだ。奴の全身が炎に包まれる。

「うぐあああああーっ！」

いくら再生機能がついていても、さすがにあれはきついだろう。よし、追い打ちだ。

「堕ちろ！」

真紅の刃を連発するとレギオンは飛び回ってかわし、俺に向かって突進してきた。両手に白い輪が光っている。

「信一……貴様あああーっ！」

ふーん、正面からむかってくるか。よっぽど死にたいらしいな、こいつ。

「死して屍……」

クリムゾンバスタードが真紅の閃光と化して走る。レギオンの顔

が恐怖で歪んだその瞬間。
「拾う者なし！」
渾身の力で放った一撃が、彼を上から下まで真っ二つに斬り裂いた。その体は左右に分かれて飛んでいき、爆発を起こして粉々に砕け散る。
「お前が弱いから死んだんじゃない。俺と敵対したのが不運だっただけだ」
クリムゾンバスタードを握りしめながらそう言うと、イザベルがおずおずと近寄ってきた。
「し、信一」
「ん？」
「ありがとう……」
彼女は目に涙を浮かべて抱きついてきた。うっ、レベッカの反応が怖い。
「これで二人も浮かばれるよ」
「ぶっちゃけ、俺はその二人のことなんかどうでもいい。赤の他人だし会ったこともないし、イザベルとどんな人間関係を築いていたのかも知らないしね。ただ……」
「ただ？」
「お前がこれ以上苦しんだり悲しんだりする姿を見ていたくなかった。それだけだよ」
イザベルの瞳から涙が溢れ出る。
「し、信一……私、一生あなたについていくよ」
いや、それはちょっと困るんだけど。ほら、レベッカが鬼みたいな顔でにらんでるし。
「ま、まあ目的は達成したし帰ろうか」
一階のロビーに戻ると、パトリシアが引きつった顔で迎えてくれた。
「あ、あなたたち……生きて帰ってきたんですか？」
イザベルがにっこりと微笑んで答える。

「うん、あなたのおかげでね。本当にありがとう」
「ど、どう致しまして……って、きゃあああ！」
パトリシアの左右のこめかみを、イザベルがげんこつでぐりぐりと責め立てている。何やってんだ、おまいは。
「きゃあああー、嫌あああー！」
「エレベーターは止めてくれるし電気は消してくれるし、やってくれるよねえ！」
「エ、エレベーターは単なる接触不良……」
「嘘ついてんじゃないわよ！」
「こ、こんなことしてただで済むと思わないでね！　協会員でありながら資料を燃やしたり、管理人をいたぶったり。全部オズワルド様に報告してやるから！」
「すれば？」
「え？」
パトリシアはきょとんとした目でイザベルを見つめている。
「い……いいの？」
「いいよ。もう協会からは抜けさせてもらうから」
「はあああ？」
「私は今後、信一についていくよ」
そ、そうっすか。まあいいけど。
パトリシアがくすくすと笑っている。
「馬鹿だね、わざわざ苦難の道を選ぶなんて。魔物に八つ裂きにされるがいいよ」
「その前にあなたを八つ裂きにしてあげよっか？」
ぐりぐりが再開され、再びパトリシアが悲鳴を上げた。
「きゃああ、ごめんなさい。ごめんなさい！」
うーん、見ちゃいられない。
「イザベル、その辺にしておきなよ」
「ううん、もっといたぶってあげないと。この女ムカつくし」
しばらくぐりぐりが続いた後、ようやくパトリシアは解放された。

なんかぐったりしていて気の毒だ。大丈夫なんだろうか。
「覚えてなよ……この借りはいつか返してあげるからね」
平気みたいだね、うん。
俺たちは街に戻った。さあ、後はレベッカと一緒にボスキャラを倒して日本へ帰るだけだ。なんの問題もないね。
それにしても、だいぶ疲れてしまった。受けた傷はイザベルが治してくれたけど疲労までは取れない。とりあえずレストランに行って休むことにした。
イザベルは退会の手続きをするために不在で、今はレベッカと二人きりだ。俺たちは向かい合って席に着いた。さて、今日はステーキセットでも食べるかな。ライスは大盛りで。
「レベッカ、何にする？」
「……いらない」
え、どうしたの。食べないと体が持たないよ？
「どこか具合でも悪いの？」
「別に」
な、なんかものすごく目つきが怖い。俺は冷や汗をかきながらウエイトレスを呼んだ。
「ご注文をお伺いします」
「ステーキセットとドリンクバー、ライスは大盛りで」
「かしこまりました」
レベッカは無言のままだ。仕方がないので注文を打ち切った。ウエイトレスが足早に去っていく。
俺はおずおずとたずねた。
「あの……何を怒ってるの？」

ライバルとの再会

レベッカは目を細めてこちらをにらみつけている。俺、何か悪いことしたかな？

「なんでそんなに怒ってるの？」

「わかってるくせに」

「もしかしてイザベルのこと？」

彼女は無言でうなずいた。うーん、そんなこと言われても困るなあ。

「信一は、私とイザベルのどっちが大事なの？」

「え……」

「どっちなの？」

うう、なんてきつい選択だろう。

レベッカとは元々気が合うし、一緒にいると癒される。かわいい上にスタイルもいいし文句なしだ。彼女を好きなのは間違いない。

でもイザベルも結構好きだ。一途に俺を愛してくれてるし、美人でスタイルも抜群ときている。性格がちょっとアレだけど、セクシーさという点にかけては他の追随を許さない。もしレベッカがいなかったなら喜んで彼女とつき合っただろう。

考え込んでいる間に、レベッカはどんどん顔をしかめていく。やばい、このままじゃ信頼を失ってしまう。

「信一」

「え？」

「いいんだよ、イザベルを選んでも」

「もしそうなったらレベッカはどうするの？」

「あなたと別れて、赤の他人として生きるよ」

彼女は冷たい目つきでじっと俺を見つめている。「返答次第では絶対に許さない」とでも言いたげだ。

「レベッカ、誤解のないよう言っておくよ。俺の彼女はあくまでお

前だ。イザベルは仲間だけど恋人じゃない」
「じゃあ、あの女とベタベタするのやめてよ」
いや、俺からベタベタした覚えはないんだけど。
「信一は強いし頼りになるし、モテるのはわかるけどさ。見てて本当に辛いんだよね」
「そうか、ごめん……気をつけるよ」
「うん、よろしくね」
彼女はようやく機嫌を直してくれたらしく、ウェイトレスを呼んで注文を始めた。うーん、俺の行動がそんなにこいつを苦しめていたとは。申し訳ないとしか言えないね、こりゃ。
ステーキセットをぱくついていると、横の席に一組の男女が座った。Sランクのアレクセイとアランクのビオレッタだ。どちらも二十歳くらいに見える。
アレクセイは短い茶髪に茶色の瞳、白い肌、彫りの深い顔に引き締まった体をしており、ワイシャツに長ズボンという軽装だ。
ビオレッタは茶色いセミロングの髪、茶色の瞳、白い肌にほっそりした体をしている。着ているのはブラウスとスカートだ。
ビオレッタが笑顔で挨拶し、話しかけてくる。
「信一、よくフレアバスタードで戦ってるねえ。そろそろきつくない？」
「いや、これはクリムゾンバスタードなんだよ」
「へー、強化版？」
「うん、めちゃめちゃ使えるよ」
「元々強いのに、余計強くなっちゃうじゃない。すごいねー」
彼女がにこにこしている反面、アレクセイはむすっとしている。やがてウェイトレスが近寄ってくると、彼らはフレンチのフルコースを注文した。贅沢してるな、こいつら。
それにしても、この険悪な空気をどうすればいいだろう。ビオレッタはいいとして、アレクセイとは犬猿の仲だ。できれば顔も見たくない。向こうも同じことを考えていることだろう。

注意深くようすをうかがっていると、彼は俺を見て口を開いた。
「信一、折り入って相談がある」
え、なんだよいきなり。どうして俺なんだ？
「お前に相談などしたくないんだが、他に適当な人間がいないんだ」
うーん、相変わらず感じが悪い。一発どついてやろうか。
「実は、Ｆランクの連中に泣きつかれたんだ。オズワルドに要望を出してほしいらしい」
「あんたがオズワルドに？　どんな？」
「Ｆランクの人間たちを元の世界へ帰してほしいってな」
「そんなの自分たちで言えばいいだろうに、何を甘えてるんだよ」
「俺もそう思った、ところがだな……」
Ｆランクの人間たちでは、オズワルドがいる場所にたどり着くことすらできないらしい。
「そりゃ困ったね。じゃあ、あんたが護衛としてついていってやれば？」
「馬鹿言うな、彼が住んでいる火山には超強力な魔物たちがうようよしてるんだ。Ｆランクの連中なんかつれていったら守る間もなく即死だぞ」
俺は腕を抱えて考え込んだ。
「前に、あいつが街に来たのを見たことがあるよ。ほっときゃそのうち来るんじゃないかな。そのときに頼んでみれば……」
「いや。俺も以前、彼に会ったんだ。そのとき、『今後しばらく来ないからよろしく』と言っていた。Ｆランクの連中をいつまでも待たせるのは気の毒じゃないか」
うーん、めんどくさい。
「じゃあ、あんたたち二人が出向けばいいだろ」
「もちろんそのつもりだが……俺たちだけでは心許ないので、お前に声をかけたんだ」
「要するに『オズワルドに会いにいきたいけど戦力不足だからついてきてくれ』ってことか？」

「その通りだ」
「嫌だね、あんたに力を貸す理由なんかないからな」
アレクセイは沈黙しながら目を伏せた。どうやら困っているようだけど、俺の知ったことじゃない。
こいつは以前、俺を殺そうとしたんだ。それなのに頼み事をしてくるなんて虫がよすぎる。協力してほしいと思うのなら、過去の無礼な行為を詫びるのが先だろう。

最強チーム結成

ビオレッタが眉をひそめて懇願してくる。
「信一、お願い。あなたほど頼りになる人は他にいないんだよ」
俺は首を振った。いくら頼まれても、アレクセイに手を貸すのは嫌だ。沈黙していると、彼が話しかけてきた。
「信一、俺はお前が気に入らない」
だからなんだってんだ、こっちだって気に入らないよ。お互い様だろ。
「でも、その実力は高く買っている。だからこうして頼みにきたんだ」
……なんだそれ。褒められてるのか、俺？
「聞いてくれ。普段、Ｆランクの連中は俺を怖れて近づいてこない。横暴な人間として名が知られてるからな。それなのにあいつらは膝を屈して頼みにきたんだ。ぶっ飛ばされるのを覚悟の上でな」
「へえ」
「当然ながら俺は激怒したさ。『甘えるのもいい加減にしろ』ってな。ところが彼らは引かなかった。『このままでは、一生ここから出ることができません。どうかお願いします』と言って、涙を流しながら平伏するんだよ。それを見ていたら、さすがに気の毒になってきてな」
ふーん。こいつにも一応、人情があるんだね。
「だから今回に限り、彼らに協力することにしたわけだ。ところが、俺とビオレッタだけではどうも心許ない。かと言ってＡランクの連中も頼りない。結局お前の手を借りるしかなかったんだよ」
うーん、確かにＦランクの人たちは気の毒だ。弱い武器しか装備できないから、ランクを上げることも難しい。しかも中には年配の人や体の弱い人、小学生もいるようだ。彼らがいくらがんばっても、アビスドラゴン級の魔物を倒すのは無理だろう。

俺は渋々うなずいた。
「わかった、協力するよ。でも先にやりたいことがある」
「すまない。それはどんなことなんだ？」
「俺はレベッカを日本に帰さなきゃならないんだ。そのためには彼女と一緒にボス敵を倒す必要がある。まずそっちを片付けたい」
アレクセイが大きくうなずきながら言う。
「わかった、じゃあ俺も協力しよう」
「え？」
「その方が手っ取り早いだろう？」
まあ、そりゃそうだね。
なんだか成り行きに任せている内に、最強チームが結成された。Sランクの俺、アレクセイ、イザベル。Aランクのレベッカ、ビオレッタ。総勢五人だ。さらに、リーダーは俺に決定した。
さて、まずはレベッカを日本に戻すことにしよう。俺たちは協会に行き、退職の手続きを終えたイザベルと合流した。受付でボスキャラを検索してもらったところ、一番近いのは荒野にいるアーマードゴーレムのようだ。よし、そいつを狙おうか。
五人で連れ立って街を出ると、荒野は歩いて十分くらいのところにあった。他のチームが武器を構えて歩き回っている。彼らもアーマードゴーレムを狙っているんだろう。
しばらく待っていると突然地面が盛り上がった。さらに土の塊が次々と上昇していき、巨大な人形を形作っていく。高さは五階建てのビルくらいありそうだ。
やがてゴーレムが完成し、その体がまばゆい光に包まれた。よく見るといつの間にか全身に鎧を着込んでいる。なるほど、こいつは手強そうだね。
奴の体は辛うじて人間っぽい形をしているという程度で、目や鼻などは申し訳程度についているだけだ。早く言うなら、出来の悪い土人形に鎧をかぶせたという感じの代物。とてもまともな知能を持っているとは思えない。

そのとき奴が口を開き、凄まじい雄叫びを上げた。
「グオオオオ、グアオオオオオ！」
うわっ、なんて馬鹿でかい声だ。鼓膜が破れそうだよ。
思わず耳を塞ぐと、奴はいきなり目の前の男性を踏み潰した。しまった、助ける間もなくぺちゃんこだ。
こいつ、許せない！
「みんな、行くぞ！　まずは遠隔攻撃だ！」
俺の呼びかけに、仲間たちが武器を振り上げて応じる。このチームならゴーレムの一匹や二匹、わけなく倒せるはずだ。
レベッカがダイヤモンドエッジを振りかざすと、巨大な光の玉が現れてゴーレムに向かっていった。それは顔面を直撃して大爆発を起こす。よし、どんどん行くぞ。
「うおらあああっ！」
クリムゾンバスタードから火の鳥が何羽も飛び出し、魔物に襲いかかる。さらにイザベルやアレクセイ、ビオレッタの放ったエネルギー弾も炸裂し、奴を獄炎と爆炎が包み込んだ。
「グオオオオ、オオオオオ！」
鎧がボロボロになっているものの、アーマードゴーレムは平気で動いている。たいしたダメージは与えていないようだ。うーん、やっぱり飛び道具だけで倒そうってのは無理か。
「仕方ない、斬りかかるぞ。俺とアレクセイは正面から、イザベルは背後から、レベッカは向かって右、ビオレッタは左からだ。散開！」
声に応じて全員が動きだした瞬間、ゴーレムが突進してきた。右の拳が迫ってくる。
「うわっ！」
俺と仲間は全員かわしたものの、他のチームの女性が直撃を喰らって弾き飛ばされた。さらに左の拳が振り下ろされ、近くにいた男性が潰される。こいつ、いい加減にしろ！
俺はクリムゾンバスタードを上段に構え、ゴーレム目がけて疾走

した。奴の右足が眼前に迫る。
「喰らえ！」
渾身の力で振り抜くと閃光が走り、奴の足がざっくりと裂けた。
そこに容赦なく斬撃を加える。よし、このままいけば……と思っていたとき、レベッカの声が聞こえた。
「信一、危ない！」

不屈のゴーレム

その直後、アーマードゴーレムの鉄拳が降ってきた。やばっ、潰される。テレポートして逃れると、その拳は激しく地面を叩きつけた。途端に亀裂が走る。

「くっ、こいつ！」

再び足を斬りつけようとしたとき、恐るべきことに気づいた。さっき斬りつけてできた傷が消えてしまっているのだ。この修復能力は侮れない。一体どうやって倒せばいいんだ？

レベッカやアレクセイもゴーレムの足を激しく斬りつけているが、いくら傷つけても修復されてしまう。普通に攻撃しても効果がないようだ。弱点をさがさなければ。

「レベッカ、イザベル！」

「え？」

「なーに？」

「お前ら飛べるだろ、奴の頭部を狙って集中攻撃してくれ！」

二人はうなずいて飛び上がる。

「アレクセイ、ビオレッタ！」

「なんだ？」

「何？」

「俺と一緒に右足を攻撃しよう。体勢を崩すんだ！」

彼らもうなずき、ゴーレムの右足に斬りかかった。同時に俺も斬撃を加える。やがてゴーレムはバランスを崩し右膝をついた。

「よし、今度は太ももを狙え！」

こいつを横倒しにしてしまえば勝機はあるかもしれない。俺たちは渾身の力で攻撃を続けた。上空では轟音が響き渡り爆炎が上がっている。レベッカとイザベルが派手に暴れているようだ。

よし、このペースでいけばどうにかなる。そう思っていたとき、突然ゴーレムが咆哮した。

「グオオオオ、オオオオオ！」
さらに、奴の拳が唸りを上げて迫ってくる。くそっ、なんだこいつ。もしかして不死身か？
なんとかよけたものの、奴は次々と拳打を繰り出してくる。どうも危なくて仕方がない。
「全員下がれ、作戦を立て直すぞ！」
その声に応じて四人が集まってきた。ゴーレムはその場を動かず、受けた傷の修復に努めている。治り次第また襲ってくるだろう。
俺は仲間たちを見回してたずねた。
「誰か、あいつの弱点を見つけた奴はいるか？」
全員が一様に首を振る。うーん、やっぱりか。俺にもわからないしなあ。
レベッカが首を傾げながら言う。
「何度も頭を吹っ飛ばしたんだけど、全然効かないんだよ。困ったね」
アレクセイも口を開く。
「少なくとも、いくら足を斬ったところで効果はなさそうだぞ」
なるほど、頭も足も駄目か。そうなるとやっぱり胸かな。
「よし、みんな聞いてくれ！」
俺は全員に指示を与えた。うまくいくかどうかわからないけど、やってみる価値はあるはずだ。
五人で再びアーマードゴーレムに向かっていった。前列がアレクセイとビオレッタ、後列が俺。さらに、空中に浮いたレベッカとイザベルが続く。
途端にゴーレムの鉄拳が飛んできたが、アレクセイとビオレッタは素早く横に飛んでかわした。よし、今だ。
俺は奴の腕の上にテレポートした。ここからなら胸部を攻撃できるだろう。行くぞ！
「らあああっ！」
クリムゾンバスタードを何度も振り抜くと、真紅の刃が何本も現

れてゴーレムの胸を斬り刻んだ。大きな穴が空き、中で何か赤く光っているのが見える。あれがこいつの核だな。
「イザベル、頼む！」
彼女がエネルギー弾を叩き込み、さらに穴が拡大する。人間の一人や二人は楽に入れるはずだ。
「レベッカ！」
その声に応じ、レベッカがダイヤモンドエッジを構えて突っ込んだ。彼女が核を斬りつけた瞬間、ゴーレムが絶叫する。
「ゴオオオオオ、オオオオ！」
もう少しでいけそうだ。俺は穴の中にテレポートし、彼女に続いて核を斬り下げた。
「沈め！」
核が真っ二つに裂け、ゴーレムの体が激しく揺れ始めた。急いで脱出して地上に降りると、奴の体が崩れていく。どうやら倒したようだ。
レベッカが笑顔で話しかけてくる。
「これで日本へ帰れるんだよね？」
「ああ。戻りたいと念じればいつでも戻れるはずだよ」
「信一、本当にありがとう」
「どういたしまして。早く日本に帰った方がいいよ。俺もいずれ帰るから」
彼女はしばらく考え込んだ後、再び口を開いた。
「私、ここに残るよ。少しでも信一の力になりたいから」
「え……いいのか？」
「うん、これからもよろしくね」
まあ俺としてはありがたい。以前の彼女は足手まといだったけど、今や立派な戦力だ。それに好きな子がそばにいてくれるのは嬉しい。
街に戻って掲示板を確認すると、レベッカとビオレッタのランクがSになっていた。これで五人ともSランクになったわけだ。
俺たちは武器屋に行ってそれぞれの武器を強化した後、宿屋に向

かった。明日の早朝に火山へ向かうつもりだ。
宿屋はどこも一杯で、ようやく取れたのは二部屋だけだった。うーん、どうしよう。男性二人、女性三人に分けるべきだろうか。
協議の結果、俺とレベッカとイザベルが同じ部屋、アレクセイとビオレッタが同じ部屋に決まった。両手に花という感じだけど、彼女たちが互いに牽制し合っているのが困る。仲良くしろと言っても無理な話だろう。
部屋の中は洋風で窓には純白のカーテンがかかっており、テーブルや椅子、ベッドや棚、ソファーなどの家具が置いてある。ベッドが三つあるのは幸いだった。二つしかなかったらどうしようと思っていたところだ。

炎の山アルギアス

俺は真ん中のベッドで横になった。レベッカは右、イザベルは左のベッドで寝ている。

レベッカがピンクのパジャマを着ているのはいいとして、問題はイザベルだ。この人ときたら、黒いブラとパンツしか着ないで横になっている。しかもなかなか布団に入ろうとしない。

こんな爆乳美女の下着姿を見ているのは色々やばい気がするので、できるだけ視線をそらすことにした。彼女に手を出したらレベッカの信用を完全に失うことになる。ここはなんとしても耐えなければならない。

布団をかぶってひたすら寝たふりをしていると、イザベルが甘い声で呼びかけてきた。

「し・ん・い・ち」

「な……何？」

やばい、思わず見てしまった。彼女は爆乳を右腕で抱えながら、目を細めてこっちを見ている。

「お姉さん、一人で寝るのは寂しいよ」

「じゃあレベッカと一緒に寝たら？」

「何それ、レズっ気はないんだけど」

「横のベッドに俺がいるんだから寂しくないだろ。早く寝ようよ」

「添い寝していい？」

「駄目だよ！」

「いいじゃない、そのくらい」

彼女は自分のベッドを降り、俺の布団に入ってくる。ちょ、やばい。勘弁してくれ。

「信一と寝るのって初めてだね」

「だ、駄目だってば……」

無言で見ていたレベッカが遂に大声を出した。

「イザベル、いい加減にしてよ！」
「ふふっ、やだ」
「じゃあいいよ、私も信一の隣で寝るから！」
「好きにすればー？」
え、何それ。このベッドはシングルですよ？
結局、三人で一緒に寝ることになってしまった。右にはレベッカ、左にはイザベルの顔がある。俺はさっさと目を閉じて眠ろうとしたが、緊張して眠れない。
うわあ、こんな状態で何をどうしろって言うんだよ。右にはかわいい女の子、左にはセクシー美女。理性を保つのが精一杯だ。
体を強張らせていると、やがて左右から寝息が聞こえてきた。二人とも疲れていたらしい。
よかった、これなら俺もゆっくり休めそうだ。じゃあ眠らせてもらうとしよう。

翌日の早朝、俺たち五人はアルギアス火山に向かった。そこにオズワルドがいるはずだ。
草一つ生えていない渇いた山道を登っていくと、向こうから赤いアリの大群が歩いてきた。一匹一匹が人間と同じくらいの大きさだ。
ビオレッタが彼らを見つめながら言う。
「あー、フレイムアントだね。火を吹くから気をつけた方がいいよ」
げっ、なんて嫌な敵だ。しかも三十匹くらいいるし、たまったもんじゃない。
アリの大群は俺たちを見つけると、いきなり突進してきた。先頭の一匹が炎を吐き出してくる。アリの分際で生意気な。
レベッカが進み出て右手をかざすと、炎は氷の盾に阻まれて消え去った。次の瞬間、アリたちが彼女目がけて襲いかかってくる。よし、一丁暴れるか。
「おおおらああっ！」
クリムゾンバスタードを引き抜いて斬りつけ、先頭の一匹を両断

した。これで少しは脅しになるだろうと思ったが、奴らはまったく気にしていない。知能がないのか、こいつら？
「らあああっ！」
さらに二匹目を真っ二つに斬り裂き、続けて三匹目を薙ぎ倒した。それでも駄目だ。アレクセイやイザベルも必死に剣を奮っているが、アリたちが退く気配はない。
「くそっ、きりがない。みんな、こっちに向かって走れ！」
俺は全員を先導し、一目散に逃げ出した。奴らはわらわらと追ってくるものの、Ｓランクのスピードには追いつけない。充分に距離を取ったところで、俺はクリムゾンバスタードを振りきった。
「行けええっ！」
火の鳥が次々と飛び出し、魔物の群れを直撃した。しかし、フレイムアントと呼ばれるだけあってびくともしない。さらにイザベルがエネルギー弾を連発して蹴散らしたが、それでも構わず向かってくる。
途方に暮れていたそのとき、レベッカが進み出た。
「私がやってみるよ」
おお、頼もしい。じゃあお手並み拝見といこう。
彼女は二本の剣を突き出した。やがてそれは光輝き、周囲に氷の結晶を発生させていく。
「はあっ！」
その声とともに、ダイヤモンドエッジから烈風が噴き出した。アリたちは動きを止められ、その場に立ちつくしている。さらに氷の結晶が乱舞したかと思うと、彼らの体が凍りついた。
「おお、すげー！」
思わず声を上げた。アリたちは一匹残らず凍りつき、ぴくりとも動かない。完全勝利だ。
「レベッカ、やったな。しかし強くなったもんだね」
笑顔で声をかけると、彼女も微笑みながら言った。
「これも全部信一のおかげだよ」

嬉しいことを言ってくれるもんだ。
抱き合って喜んでいる俺たちを、イザベルがぶすっとした顔で見つめている。こ、このくらいでやめておこう。またケンカが勃発すると嫌だし。
彼女から離れた俺にアレクセイが話しかけてくる。
「まだまだこんなのは序ノ口にすぎない。リーダー、気を抜くなよ」
「ああ、もちろんだ。みんな、気合いを入れていくぞ！」

紅蓮の魔人

再び山道を進んでいくと、黒い髪に赤い肌をした魔人が立ちはだかっていた。
身長は俺の倍くらい。上半身は裸で下半身には腰当てをつけており、両手に燃え盛るサーベルを持っている。見るからに危険な敵だ。
イザベルが彼を見つめながら言う。
「あれはイフリートだね」
「ふーん、どんな戦い方をするのかな？」
「信一と同じだよ」
へえ、それはやりやすいようなやりにくいような。とりあえずお手合わせ願おうか。
クリムゾンバスタードを構えて進み出ると、魔人がいきなり二本の剣を振りかざした。獄炎が渦を巻いて襲いかかってくる。
「うわっ！」
急いでかわそうとしたそのときレベッカが跳び出し、盾を巨大化させて防いでくれた。危ない危ない、助かったよ。
「レベッカ、ありがとう」
「気をつけてね、リーダーが真っ先にやられたら大変だから」
まあ確かにその通りだ。でも、だからと言って後方に引っ込んでいるつもりなんかない。
「みんな行くぞ、俺に続け！」
俺はクリムゾンバスタードを握りかざした。途端に火の鳥が次々と飛び出して魔人に向かっていく。それらは見事に直撃して炎上したが、特に効果はないようだ。火山に住んでる上にあんな剣を持ってるし、熱には滅法強いらしい。じゃあ直接斬るしかないね。
でも、また炎に巻かれたら厄介だ。よし、テレポートを使おう。
「みんな、奴の注意を引きつけてくれ。俺が隙を見て叩き斬る」
四人はうなずき、ばらばらと散っていく。さあ、炎の魔人と俺の

どちらが生き残るか勝負だ。
イザベルとビオレッタがエネルギー弾を連発した。それらはすべて直撃したが魔人はびくともしない。アレクセイが放った衝撃波も、レベッカの光線もかわされてしまう。いや、こいつは強い。敵ながら本当にたいした奴だ。
って、感心してる場合じゃないね。
俺はイフリートの目の前にテレポートし、渾身の力で顔面を斬り下げた。
「喰らえ！」
しかし、奴は右の剣でがっちりと受け止めている。そればかりか、すかさず左の剣を一閃させてきた。うわっ、やばい。
「くっ！」
再びテレポートして地上に降り立った瞬間、魔人の連撃が殺到した。頭上からの斬り下ろし、横薙ぎの一閃、素早い突きに袈裟がけの斬撃。こちらは息をつく暇もない。俺は必死にかわし、すかさずテレポートして距離を取った。
うーむ、これは強敵だ。俺をここまで追い詰めるとは侮れない。でもFランクの人たちのためにがんばらなければ。俺がオズワルドに会うことができなきゃ、あの人たちはずっとこの世界に閉じ込められたままだ。
俺はクリムゾンバスタードを構え、イフリートをにらみつけた。
「死して屍、拾う者なし！」
気合いを入れた直後、魔人の背後にテレポートする。今いる場所は空中で、狙うのは奴の後頭部だ。
無言で思いきり斬りつけたが、惜しくもかわされた。素晴らしい反応速度だ。でもこれで終わるつもりはない。イフリートが反撃しようと剣を振りかざしたそのとき、今度は側面にテレポートして斬りかかった。
「おらあっ！」
クリムゾンバスタードが腰を斬り裂き、その体がぐらりと揺らい

だ。しかし彼はたじろぐことなく正面から襲いかかってくる。その凄まじい斬撃をかわした直後、鋭い突きが飛んできた。
「うわっ！」
体を翻したものの、かわしきれずに左肩を突かれてしまった。鮮血が噴き出してブレザーを濡らしていく。くそっ、やっぱり強い。今までの相手とは桁が違う。でも負けるつもりはない。
「おおらあっ！」
クリムゾンバスタードを何度も振りきると、斬撃の軌跡が真紅の刃と化して魔人に襲いかかった。奴は巧みに両手で剣を操り、それらを叩き落としている。よし、今がチャンスだ。
俺は疾走し、相手の腹を薙ぎ払った。途端に血飛沫が上がり、彼は体をくの字に曲げながら後退する。逃がすか！
「らあああっ！」
さらに空中へテレポートし、肩をざっくりと斬りつけた。そのまま地面に降り立ち、続けて太ももを薙ぎ払う。敵は防戦一方になりたじろいでいる。その後ろからレベッカが突きを放ち、背中から胸までを貫いた。ナイス！
「グアアアアーッ！」
イフリートが目をむいて叫んだそのとき、クリムゾンバスタードが彼の顔面を斬り裂いた。
「沈め！」
魔人の上半身を真っ二つにして降り立つと、凄まじい量の鮮血が周囲に降り注いだ。やばい、ブレザーがまた汚れる。慌てて距離を取る俺の前で、イフリートの体が崩れ落ちていく。
「恨むなら、俺の敵に回った自分の不運を恨むんだな」
そう言いながら剣をしまうと、レベッカが抱き着いてきた。
「信一、すごーい！　さすがだよ！」
続けてイザベルも抱き着いてくる。
「もう最高！　惚れ直しちゃったよ！」
く、苦しい。そんなに強く抱きしめないでくれ。

ビオレッタがにやにやしながら話しかけてくる。
「モテるねえー、私も参加していい？」
「お前にはアレクセイがいるだろ！」
「彼は大学の友だちで、別に彼氏じゃないよ」
え、そうなのか。てっきり恋人同士かと。
「そんなわけで、私も参加。信一かっこいいー！」
「ぎゃああ、暑苦しい。死ぬ！」

灼熱の竜騎士

三人の女性に抱き着かれて、嬉しいやら暑苦しいやら。とにかく、そろそろ離れてほしい。
「イザベル、傷を治してくれないかな？」
「あ、うん。任せて」
彼女が手をかざすと傷がふさがっていき、破れたブレザーも修復されていく。
「イザベルの魔法って本当に便利だよな。どうやって使えるようになったんだ？」
「オズワルド様に教わったんだよ」
「俺も教わればできるのかな？」
「資質が必要らしいから、どうだかわからないね」
ふーん、そうか。まあ、別になくても不自由しないしね。
俺たちは再び山道を進んでいった。相変わらず、草一つ生えていない渇いた地面が続く。空は晴れ渡っており実に見通しがいい。
「うーん、あったかいなあ」
ぽかぽかの陽気に照らされ、なんだか眠くなってくる。あくびをしていると、アレクセイが呆れ顔で言った。
「リーダー、気を抜きすぎだ。ハイキングに来たんじゃないんだぞ」
「ああ、ごめんごめん」
そうだ、ここで気を抜いちゃいけない。いきなり襲われる可能性だってあるんだ。
「みんな、気合い入れていくぞ！」
右手を振り上げるとレベッカに笑われた。
「あくびしてた人に言われてもねえ」
いや、返す言葉もない。
「その通りだな」
つられて笑っていたそのとき、真っ赤な生き物が編隊を組んで飛

んでくるのが目に入った。見たところ竜のようで、上には赤い鎧を着込んだ騎士が乗っている。全部で二十人くらいだ。
「来たぞ、みんな気をつけろ！」
全員が武器を構えた瞬間、騎士たちが一斉に手を振り下ろした。すると空中に燃え盛る槍が何本も現れ、こちらに向かって降ってくる。
レベッカとイザベルは飛び下がってかわし、アレクセイとビオレッタはバリアを張って防いだ。俺もすべてかわしている。さて、反撃といこう。
「らあっ！」
クリムゾンバスタードを何度も振りきると、真紅の刃が次々と竜騎士に向かって飛んでいく。しかし、残念ながらかすりもしない。
さて、どうしよう。奴らがいるのは上空だ。数回テレポートすれば届くはずだが、下手な場所に出ると槍の直撃を喰らう恐れがある。なんとか引きつけて戦いたいものだ。
よし、あれを使うか。
「行け！」
クリムゾンバスタードを振りかざすと、火の鳥が次々と現れて魔物の群れに向かっていった。彼らは散開してかわしたものの、鳥たちに追尾されている。よし、いいぞ。
「喰らえ！」
すかさず光線を放つと、一体の竜とその上にいる騎士を貫いた。そこにイザベルのエネルギー弾が直撃し、彼らはバランスを崩して落下してくる。
「よし、次だ！」
調子に乗って光線を連射していたそのとき、騎士たちは一斉に俺を目がけて急降下してきた。同時に槍の雨を降らせてくる。
「おおっと！」
クリムゾンバスタードを振るって叩き落としている間に、一人が向かってきた。手には燃え盛る槍を握っている。正面から突っ込ん

でくるとはいい度胸だ。
俺の体と竜騎士の体が交差した。彼の放った一撃は空を切り、その首は叩き落とされている。一対一で戦って勝てると思うなよ！
さらに二人目が突進してきた。今度は竜が大きな口を開けて襲いかかってくる。俺はすかさずクリムゾンバスタードを一閃し、真紅の刃を敵の口に叩き込んだ。
「グギャアッ！」
竜が叫んで動きを止めた瞬間、俺は奴の頭上にテレポートしていた。騎士が仰天しながら槍を構えたがもう遅い。
「らあっ！」
袈裟がけの一撃が彼の鎧もろとも斬り裂いた。凄まじい血飛沫が上がり、絶叫が響き渡る。
「ぐ、ぐあああああーっ！」
さらに首筋を目がけて斬りつけると、彼は竜から転げ落ちた。次の標的を探す俺に、他の騎士たちが放った炎の槍が殺到する。かわす間もなく、そのうちの一本が右の太ももに突き刺さった。
「ぐうっ！」
激痛が走る。引き抜くと出血するだろうが、放っておけば焼け死んでしまう。覚悟を決め、柄をつかんで引き抜いた。凄まじい痛みが下半身を襲い、同時に鮮血が噴き出す。
「くそっ！」
仲間たちはそれぞれ他の騎士と戦っており、援護は望めない。ここはなんとしても自力で乗り切るしかないだろう。試練のときだ。
二人の騎士が左右から突きかかってくる。それを充分に引きつけてからテレポートし、一人を側面から斬りつけた。手応えは充分だ。その体が崩れ落ちるのを見届ける間もなく、もう一人の眼前にテレポートして斬り下げる。
「ぐがああっ！」
肩から胸まで割られた騎士は、絶叫しながら倒れ伏した。さあ、次いってみようか。

「らあああっ！」
続けて一人を突き殺し、さらにもう一人の胴を真っ二つにした。騎士たちは目を見開いて硬直する。今さら後悔しても遅いんだよ。
クリムゾンバスタードを振り回して暴れまくっていると、一人が槍を構えて突きかかってきた。素早く正確な攻撃だ。他の奴とは格が違うらしい。
「人間風情が調子に乗るな！」
「竜騎士ごときが俺の前に立つんじゃねえ！」

戦士の意地

竜騎士は激しい突きを繰り出した。切っ先が俺の肩をかすめる。すかさず反撃しようとしたところ、その槍が引っ込み再び突きが襲ってきた。たいした使い手だ。

「このっ！」

彼の頭上にテレポートして斬り下げたが、槍の柄で受け流された。まともに受け止めてくれれば武器ごと真っ二つにしていたのに残念だ。

騎士は槍を放り捨てた。その両手が光輝き、炎をまとった二本の剣が現れる。さらに彼は竜を駆って突進し、俺を十文字に斬りつけた。

「消え去れ！」

最初の一撃を受け流し、次の一撃を弾き返す。こんなところでやられるつもりなんかさらさらない。

「うらあああっ！」

真紅の閃光が走り、騎士の右肩を斬り裂いた。しかし、同時に彼の突きが俺の左肩を貫いている。

くっ……痛い。意識が遠くなる。日本で普通に暮らしていれば、こんな目にあわずに済んだだろうに。

騎士が剣を引き抜いた直後、俺は体を翻して横薙ぎの一撃を放った。それは彼の胸を斬り裂き鮮血が噴き出す。

「ぐうっ……」

「沈め！」

逆袈裟に斬りつけると彼は受け流した。さらに胴を狙って一閃させたが、これも受け流されている。怖ろしいほどの腕だ。

再び斬りつけようとしたそのとき、背中に激痛が走った。他の敵が放った槍の直撃を喰らったらしい。

「うあああああっ！」

必死にそれを引き抜いたものの、凄まじい痛みが走った。体がちぎれるのではないかと思うほどだ。そこに、さっきの騎士が容赦なく突きかかってくる。
こんなところで……こんなところで終わるか！
「うおおおおおお、らあああああ！」
渾身の力で放った突きが、騎士の顔面を貫いた。その体がぐらりと崩れ落ちる。さあ、次だ！
……と思ったが、体が動かない。太ももと肩、背中までやられて悲惨な状態だ。血は止まらないし息も切れている。
「はあっ、はあっ……」
視線を走らせると、レベッカが四人の騎士に包囲されていた。なんとか攻撃はさばいているものの、明らかに劣勢だ。放ってはおけない。
「くっ……」
激痛に耐えながらクリムゾンバスタードを構えた。さらにテレポートし、騎士の一人を斬りつける。
「ぐあっ、ぐがあああっ！」
悲鳴と血飛沫が上がる中、他の三人が次々と槍を投げつけてきた。だが俺には通じない。再びテレポートし二人目の眼前に踊り出た。
さあ、覚悟しろ。
「喰らいやがれ！」
彼の横を一気に払い抜けると、相手は真っ二つに裂けて崩れ落ちた。間髪入れずにクリムゾンバスタードを一閃し、真紅の刃で三人目の首をはね飛ばす。さらに、狼狽している四人目を火の鳥が直撃した。その体が炎に包まれ、竜から転がり落ちていく。
肩で息をしながら周囲を見回すと、竜騎士は全滅していた。俺の仲間はそれぞれ傷を負っているものの、命に別状はなさそうだ。
「よかった……」
胸を撫で下ろしている俺に、レベッカが駆け寄ってくる。
「信一、ありがとう」

「気にすんな」
「酷い怪我！」
「たいしたことないよ」
イザベルも近づいてきた。顔が真っ青だ。
「すぐ治すからじっとしてて」
「ありがとう」
「こんなになるまで……」
「剣を取って戦う以上、このくらいは覚悟してるよ」
怪我を治してもらっている間に、アレクセイも話しかけてくる。
「すまない、お前ばかりに負担をかけさせてしまって」
「あんたらしくもない物言いだな、気にすんなよ」
ビオレッタも神妙な面持ちで黙り込んでいる。なんだ、この沈んだ雰囲気は。気が滅入るぞ。
「みんな、元気出せよ。Ｓランクが五人もそろってるんだ、怖いものなしだろ！」
全員の顔を見回しながら呼びかけたが、四人とも応じなかった。
みんなの不安はよくわかる。Ｓランクが五人もそろっていながら追い込まれるということは、敵が相当強いという証拠だ。オズワルドは間違いなくその上をいくだろう。もし彼と戦うようなことになれば、とても五体満足で帰れるとは思えない。
やはり、まずは話し合いだろう。要求が受け入れられなかったとしても、対決は避けた方が無難だ。
俺たちは顔を引きしめながら、再び山道を登っていった。
山頂に着くと、一戸建て住宅がぽつんと建っているのを目にした。まさか、これがオズワルドの家？
てっきりロールプレイングゲームのラスボスのような城に住んでいるのかと思っていたので、完全に拍子抜けしてしまう。
見た目は日本の住宅街にあるような、至って普通の建物だ。玄関のドアの近くにはインターホンがある。なんかものすごく調子が狂うな。

何か罠があるかと思いながら周囲を見回したが、それらしきものは見当たらない。覚悟を決めてインターホンを押すと、若い男性の声がした。
「はい、どちら様ですか？」
オズワルドだ、間違いない。
「信一だけど」
「え、こんなところまでよく来たなあ。ちょっと待っててくれ」
間もなくドアが開き、彼が姿を現した。相変わらず全身赤いローブをまとっており、体型がさっぱりわからない。顔の下半分に赤い布を巻き付けているので、イケメンなのか不細工なのかも不明だ。
「よく来たね、まあ上がってくれよ」
「は、はあ」
オズワルドにつれられて廊下を歩き、一室に通された。床には青い絨毯が敷いてあり、中央にはソファーとガラスのテーブルとがある。天井には蛍光灯、壁には絵画や写真。なんの変哲もない部屋だ。

魔大戦勃発

この世界を創った人間が住んでいるにしては随分と質素な気がする。
「まあ座ってくれよ」
「ど、どうも」
促されて全員がソファーに座ると、目の前のテーブルに五人分の紅茶が現れた。ノーモーションで魔法を発動する辺り、やはりただ者ではない。
「それで信一、わざわざなんの用だい？」
「その前に、なんで紅茶が五つしかないんだ？　ここには六人いるのに」
「俺は飲まないから。と言うより飲めないんだよ」
なんでだろう。まあ別にどうでもいいけど。
「ここに来た理由はFランクの人たちに伝言を頼まれたからだよ」
「へえ、どんな？」
「このままじゃ元の世界に戻れない。ボス敵と戦うことなしに自分の国へ帰してほしいってね」
「随分と勝手な物言いだな」
そう言われても困る。Fランクの人たちが帰るにはそれしか方法がないんだ。アビスドラゴンやアーマードゴーレム級の敵に挑めば、瞬殺されるのは目に見えてるし。
彼はしばらく沈黙した後、こんなことを言い出した。
「そいつらの言うこともわからないでもない。ただ、黙って帰すわけにはいかないな。それじゃここにつれてきた意味がなくなる」
「そもそも、戦闘能力がない人たちをつれてきたこと自体意味がないだろ」
「そんなことはないさ、動画を配信してるって言っただろ。それは信一みたいな強い人間が魔物を蹴散らすようなものばかりじゃない。

逆もあるわけだよ」
「逆？」
「強力な魔物がFランクの連中を引き裂くとかな」
「そんなものを見て誰が喜ぶんだよ！」
「喜ぶ人間も世の中にはいるよ。ネット上に配信すると、称賛のコメントをしてくる奴がちらほらいる」
　およそ理解できない話だ。人が殺されるのを見て何が楽しいんだろう。
　沈黙していると、オズワルドはさらに続けた。
「帰りたいならそれなりの代償を払ってもらわないとな」
「どんな？」
「一つのゲームをしてもらう。ルールは至って簡単だ。今、あの街には八万人くらい住んでるだろ？」
「ああ」
「俺は魔物の群れを率いてそこを攻撃する。人間が全滅すればお前たちの負け。魔物が全滅するか、俺が倒されればお前たちの勝ちだ。全員元の世界へ帰してやるよ」
「ゲームって言うより戦争じゃないか！」
「俺にとっちゃゲームに過ぎない」
　思わず彼の顔をのぞき込んだ。およそ正気の沙汰じゃない。
　アレクセイが机を叩いて怒鳴りつける。
「オズワルド！　お前、人の命をなんだと思ってる！」
「以前に信一を殺そうとした奴が言うセリフじゃないな。なんとも思ってないよ」
　俺たちは呆れ返りながら彼を見つめた。一体なんなんだ、こいつは？
「オズワルド、お前一体……」
「俺にしてみれば信一の方が理解できない。自分や恋人ならともかく、赤の他人の命なんて大事か？　どこに価値があるんだ？」
「価値とかじゃなく、同じ人として……」

「くだらない理由だな」
彼はひとしきり笑った後、さらに続けた。
「しょせん人間なんざ、自分が一番大事なんだよ。家族や友人を大事に思うのは自分にとって都合のいい存在だからだ。それ以外の人間が死のうがなんとも思っちゃいない。せいぜい『かわいそう』の一言があるだけさ」
「そんな人間ばかりじゃないよ」
「ほとんどがそんな人間だ。お前は、どこか外国で子どもが餓死しかけてる映像を見たらどうする？　わざわざ助けに行くか？」
「それは……」
同情はするけど、たぶん行かないだろう。沈黙していると、彼は声を上げて笑った。
「ほら、底が見えた。本当に他人の命を大事に思っているなら、何がなんでも助けに行くはずさ。それができないっていうのは自分の生活の方が大切だからだ。その子の命より自分が優先なんだよ」
「うっ……」
「だからさ、信一。Fランクの連中の言うことなんか聞くことないんだ。お前にとっちゃ赤の他人で、なんの利益ももたらさないんだからな。悪いことは言わないから日本へ帰れ」
俺はしばらく沈黙した後、おもむろにたずねた。
「……もし俺が帰ったら、どうする気だ？」
「お前がいようがいまいが、さっきのゲームを実行するよ。生き残りをかけたサバイバルゲームをな」
「冗談じゃない、やめろ！」
そんなことになれば、どれだけの犠牲者が出るか知れたものじゃない。絶対に駄目だ。
「信一」
「え？」
「賽は投げられた。もう後戻りはできない」
彼の姿がゆっくりと消えていく。

「ちょ、待て。待てよオズワルド！」
「早く日本へ帰るか街へ戻るかしろ。今度会ったら殺し合いだ」
やがて、オズワルドの姿は完全に消え去った。レベッカが真剣な表情で話しかけてくる。
「信一、どうする気？」
「……それを言う前に、レベッカの意見を聞きたい」
「私はあなたに従うよ」
俺はうなずき、イザベルに視線を移した。
「お前は？」
彼女が白い歯を見せて笑う。
「一生ついていくって言ったでしょ」
「そうか。アレクセイは？」
彼は腕を組みながらうなずく。
「リーダーの決定に従うさ」
「ビオレッタは？」
「私もー！」
よし、それなら話は早い。俺はクリムゾンバスタードを振り上げて叫んだ。
「これからオズワルド軍と一戦を交える。勝っても負けてもこれで最後だ。死して屍……」
四人も剣を振り上げて叫ぶ。
「拾う者なし！」

戦いの序章

俺たちは急いで街へ戻り、住民を集めて事情を説明した。
皆が不安そうな表情を浮かべている。正直言って俺もだけど、あまりそれを表に出すわけにはいかない。士気の低下を招いてしまう。
説明を終えた後にAランクの人だけを集めた。この中から八万人を指揮する者を決めなければならない。
その顔ぶれを見ていたとき、懐かしい連中と対面した。エドワード、ジェシカ、リンファンの三人だ。
「お前ら、どうしてここに！」
心強い味方の登場に喜んでいると、エドワードが笑顔で言った。
「ヘブンズ・ウォーリアのサイトで、信一が相変わらずがんばってるのを見てさ。力になれればと思って来たんだよ。なかなか会えなくて困ったけどね」
本当に助かる。ありがたい限りだ。
さて、リーダーを決定しなければ。Aランクの人たちに意見を聞くと、満場一致で俺に決まった。他のランクの人たちに聞いても同じ答えが返ってくる。よし、じゃあやってみよう。責任は重いけど誰かがやるしかないんだ。
そうだ、協会の連中はどうなるんだろう……と思っていると、スーツを着込んだ男女が何人か来ていた。その中の一人が話しかけてくる。俺が最初にこの街に来たとき、銃を突きつけたあの女だ。
「信一さん、オズワルド様の使者から話を伺いました。彼は私たちもろともこの街を攻撃するつもりのようです。また、『今後は信一の指示に従え』という伝言もありました。ですから、あなたに協力させていただきます。私の名はシンディです、どうぞよろしく」
へえ、それはありがたい。
「こちらこそよろしく。ところで、ランクってあんたたちが決めてるんだよね？　この街の住民を全員Sランクにできないかな？」

「ランクを上げたところで、自分自身の強さは変わりませんよ。FとSの違いは、強い武器や防具を装備できるかできないかという点だけなんです」
「強いものを装備できるだけでもありがたい、とにかく上げてくれ。あと、協会が保有してる武器や防具をすべて提供してほしい」
「かしこまりました。それから、商店で売っているものもすべて使えるよう計らいます。当然ながら強化も致します」
なかなか気が利く奴だ。イザベルは協会の人造人間をさんざん馬鹿にしてたけど、そう捨てたものでもない。
協議の結果、八万人を一万ずつ八個の隊に分けることになった。
まずアレクセイ隊。アレクセイをリーダーとし、主に元Bランクの人間で構成される。配置は城壁周辺。壁をよじ登ってくる敵地上部隊の迎撃が任務だ。
次にビオレッタ隊、イザベル隊。元Cランクの人間で構成され、アレクセイ隊の補佐を任務とする。
それからDランクで構成されるレベッカ隊、EランクのエドワードFランクのジェシカ隊、リンファン隊。これらは予備隊とし、できる限り建物に閉じこって戦闘を避けるようにする。
最後に信一隊。元AランクとBランクの人間で構成される精鋭部隊だ。街の中心にある協会ビルを本部とし、主に敵飛行部隊の迎撃にあたる。また、オズワルドを発見して仕留める役目も担う。
敵がいつ襲ってくるかわからない。俺は予備隊を除く各部隊を三つに分けた。その内の一つは臨戦態勢にしておき、一つには訓練や食事をさせ、最後の一つには睡眠を取らせるといった形だ。これを交代しながら繰り返せば、夜中に襲撃されても対応することができる。
見張りは予備隊の役目だ。協会のビルにはモニター室があり、街の周辺や内部に設置された監視カメラの画像を見ることができる。そこに彼らを配置した上で「異変を見つけたらすぐに報告するように」と言い含めた。

さあ、いつでも来いよオズワルド。刺し違えてでもお前だけは倒すからな。

二日後の早朝。

寝室のベッドで寝ていると、シンディが駆け込んできて叫んだ。

「信一さん、敵襲です！」

俺はすぐに跳ね起きた。いよいよ最後の戦いが始まるんだ。

「すぐ行く！」

着替えてモニター室に行くと、竜騎士たちの姿が画面に映し出されていた。上空からこの街へ襲撃してきたようだ。

「シンディ、敵の兵数はわかるか？」

「およそ二百、南々東の方角から進撃してきています。アレクセイ隊とイザベル隊が迎撃に向かいました」

くそっ、いきなり空中から来たか。せっかく城壁があるのになんの役にも立たない。

竜騎士たちは街の上空を飛び回り、炎の槍を次々と降らせている。さながら戦闘機の空襲だ。地上の人々が火の玉や氷の矢で応戦しているが、空中を自在に飛び回る竜騎士にはなかなか当たらない。

本当は俺が出ていって戦いたいところだ。でも、オズワルドの行方がわからない以上は下手に動けない。俺は祈るような気持ちで画面を見つめた。

「アレクセイ、イザベル。頼むぞ」

そのとき、銀色に輝く物体が空中に舞い上がった。あの悪魔のシルエットはイザベルだ。彼女は炎の矢をかわしながら光球を連発し、竜騎士たちを撃墜していく。俺は思わず叫んだ。

「よし、行け！」

他のモニターを見ると、地上でも戦いが始まっていた。光輝く男性が凄まじい勢いで突進し、竜騎士たちを薙ぎ倒している。アレクセイだ。ビオレッタも配下を集め、敵に矢の嵐を浴びせている。

俺は拳を握りしめながらつぶやいた。

「みんな、頼むぞ。オズワルドは必ず仕留めるから」

カオスブレイズ

モニター画面を見つめていた俺は驚愕した。街の地面に巨大な魔法陣が浮き上がったかと思うと、そこに全身真っ黒なドラゴンが現れたのだ。その大きさは、周囲に並んでいる五階建ての住宅をゆうに超える。これはやばい。

シンディが青ざめて叫んでいる。

「あれは……カオスブレイズドラゴン！」

「強いのか？」

「オズワルド様が作り出した魔物の中で最強です。アビスドラゴンやアーマードゴーレムの比ではありません」

次の瞬間、竜は銀色に輝く息を噴き出した。その直撃を受けた周囲の建物が一瞬で崩壊する。まずい、これじゃ隠れてる人たちがやられてしまう。俺はみんなに呼びかけた。

「信一隊、出るぞ！　攻撃目標はカオスブレイズドラゴンだ！」

皆が武器を握りしめて駆け出していく。早くも俺の出番が来たようだ。

現場に着くと、竜が尾で周囲の建物を薙ぎ倒していた。その周囲から予備隊の人たちが逃げていく。隠れていた建物が倒壊してしまい、外に出ざるを得なくなったのだ。

俺は走りながら彼らに呼びかけた。

「みんな、こっちに逃げろ！　そいつは俺たちが片づける！」

竜の注意は建物に向いている。今ならなんとか間に合うだろう。

しかし、その考えは甘かった。予備隊の人たちがこちらに向かって走り出した瞬間、奴が火炎を吐き出したのだ。予備隊の人たちは炎に包まれながら逃げ惑う。さらに竜が咆哮した途端、雷が次々と落ちてきて彼らを直撃した。

「こいつ！」

急いで仲間たちに呼びかけ、奴に一斉射撃を浴びせた。エドワー

ドやジェシカ、リンファンも加わっている。カオスブレイズの体に次々と爆炎が上がったが揺るぎもしない。
「射撃やめ！　信一隊、全員突撃！」
俺は叫ぶと同時に疾走した。既にクリムゾンバスタードを引き抜いている。竜がこちらを目が掛けて冷気を吐き出したが、誰かの張ったバリアが防いでくれた。
「俺と戦って、生きて帰れると思うな！」
火の鳥を放って直撃させた後、連続でテレポートして奴の眼前に出た。その顔を目がけ、渾身の力で斬りつける。
「沈め！」
青い血飛沫は上がったものの、今一つ手応えがない。表面を斬っただけのようだ。
俺はさらにテレポートし竜の頭上に出た。今度こそ仕留めてやる。
「うおおおおおっ！」
全体重をかけて頭部を突き刺すと、血液が噴き出した。竜は悲鳴を上げ激しく首を振る。俺は落ちないようにその角をつかんだ。さあ、もう一丁！
……と思ったそのとき、下の方で大爆発が起こった。なんだなんだ？
見ると、赤いローブを着た人間が空中で戦っている。あれはオズワルド！
相手をしているのはダイヤモンドエッジを構えたレベッカだ。目にも留まらぬ速さで光弾を連発しているが、オズワルドはすべてかわしている。
「レベッカ、代われ！　そいつは俺が倒す！」
「大丈夫、任せて！」
彼女の姿が一瞬消えたかと思うと、突然オズワルドの前に出現した。その斬撃が相手を襲う。これはいけるか？
ところが、その一撃はオズワルドの杖に受け止められた。彼が低い声で言う。

「ふっ、たいしたものだ。ここに来た当初とは比較にもならないな」
「くっ……」
そのとき、竜が激しく首を振った。いい加減に片をつけないとまずい。
「これでも喰らえ！」
再び斬りつけたが、まだ奴は倒れない。傷は奥まで達してるのに怖ろしいタフさだ。
直後にレベッカへ視線を向けると、彼女は地面に叩きつけられていた。やはり及ばなかったらしい。
「レベッカ！　おい、しっかりしろ！」
くっ、反応がない。
倒れた彼女を、エドワードが素早く抱き抱えて下がっていく。俺も降りていって介抱したいところだがそうもいかない。カオスブレイズもオズワルドも倒していないこの状況で、俺まで退いたら大変なことになる。
とにかく、こいつらを倒さなければ。援護してもらう為に隊員に呼びかけようとしたところ、彼らはムクロの大群と戦っていた。とても援護は望めそうにない。
オズワルドとカオスブレイズ相手に、一人で戦えってか。おお、やってやるよ！
よし、とりあえず竜を倒してしまおう。
「いい加減に倒れろ！」
何度も頭部を斬りつけていたそのとき、オズワルドの声が響き渡った。
「ふはははは、消え去れ！」
視線を向けた瞬間、目の前に巨大な光弾が迫っていた。まずい、やっぱりオズワルドを放置したのは失敗だったか。
まばゆい光が周囲を包み込む。俺はすかさずテレポートして逃れた。充分に距離を取ってから振り向くと、カオスブレイズの首から上が消えている。あ、危なかった。逃げなかったらあいつの頭部と

一緒に消滅していたところだ。
オズワルドは両手を掲げてエネルギーを集めている。でも、これ以上好きなようにさせるつもりはない。俺は奴に向かってテレポートし、出現すると同時に薙ぎ払った。
「喰らいやがれ！」

創造主との激突

俺の一撃はオズワルドのローブを斬り裂いた。あくまでもローブだけだ。中身ごとざっくりいったはずなのに一体どうしたことだろう。

テレポートして地上に降りた俺は驚愕した。彼は上半身だけで浮いていたのだ。真っ二つにしたはずだけど、斬った手応えはなかった。それに下半身はどこにいったんだろう。

混乱していると、オズワルドがゆっくりと降下してきた。

「信一、お前が斬ったのはローブだけだよ」

「ちょっと待て、俺は中身ごと斬ったはずだぞ。下半身はどこにいったんだ？」

「最初からない」

「え？」

「俺はこの世界を創る際に絶大な魔力を奮った。それで創造に成功したのはいいが、代償として下半身を持っていかれたんだよ。紅茶が飲めないって言ったろ？　飲むと全部下からこぼれちまうんだ」

「な、な……？」

「少しお前と話がしたい、一時停戦だ。部下を後方に下げろ。俺もそうするから」

これは罠なんだろうか。言う通りにしていいのか？

迷っていると、彼はムクロの大群に声をかけて下がらせた。仕方がないので俺も仲間たちを下がらせる。結局そこにはオズワルドと俺、カオスブレイズの死体だけが残った。

「信一、俺がどうやって魔法を使えるようになったかわかるか？」

「さあ」

「悪魔と契約したんだよ。魂の一部を売ったんだ」

馬鹿馬鹿しい、悪魔なんて実在するわけがないだろう。

でも、こいつが魔法を使えるのは事実だ。すると、やはり本当な

んだろうか。
「疑ってるな？」
「当然だろ。今まで生きてきて、悪魔なんて一度も見たことがないんだから」
「悪魔を実際に召喚することは可能なんだ。ただその方法は禁忌とされ、一般には出回っていない。ごく一部の限られた人間だけが、ひっそりとその方法を伝えている」
うーん、やっぱり信じがたい話だな。
「嘘だと思うか？　まあ無理もないがな。ただこれだけは言っておく。古来、悪魔に魂を売った人間は何人かいるんだよ」
「へえ」
「俺の知る中で有名なのは、某バイオリニスト。悪魔に魂を売る代わりに人間離れした技巧を手に入れた。その腕と言ったら、ピアノの天才リストを驚愕せしめたほどだ」
ふーん、そんなすごい奴がいたのか。
「吸血鬼として有名な女性もいる。悪魔に魂を売った代わりに高い地位を手に入れた。どっちも実在の人物だ。あえて名前は言わないから、興味があるなら自分で調べてみな」
「オズワルド、そんな話はどうでもいいんだ。お前、後悔の気持ちはないのか？」
「ん？　何を後悔する必要があるんだ？」
「そんな体になったことと、多くの人間を死に追いやったことだよ」
彼は忍び笑いをもらした。
「特に不自由はないし、他人を殺すことなどなんとも思わない。後悔なんぞあるわけがないさ」
「オズワルド、一つ教えてやるよ」
「ほう」
「下半身がなくなっても、生きていけるならそれでいい。でも、決して失ってはいけないものが一つある。お前はそれをなくしたんだ」
「ふーん、それはなんだ？」

「人の心だよ」
俺はクリムゾンバスタードを構えた。この世界につれてこられ、死んでいった人たちの無念をここで晴らしてやる。
彼も俺に杖を突きつけた。その先端がまばゆい光を放っている。
「信一、くだらないことを言うな。日本で人を殺したら法律で罰せられる。でも、この国に法律などないんだ。つまり、殺してはいけないという根拠も存在しない」
「じゃあ一つ聞くぞ、お前はなんの権利があって他人の命を弄ぶんだ？」
「弱い者が強い者に虐げられるのは世の常だ。お前が住んでた日本だってそうだよ、苦しめられるのはいつも弱い人間。弱肉強食という営みは今も昔も変わらない」
沈黙していると、彼はさらに続けた。
「俺はこの世界において絶対的な強者だ。弱い者たちをどうしようが文句を言われる筋合いはない。皆を助けたいのであれば俺を倒してみろ。一対一で勝負だ」
彼が杖を振りかざした途端、光の矢が次々と現れてこちらに迫ってきた。必死でかわしたものの、何本かが肩をかすめる。かすった部分を見ると、ブレザーが焼け焦げて穴が空いていた。これはやばい、まともに喰らったらたぶん死ぬ。
「このっ！」
クリムゾンバスタードから獄炎が飛び出し、オズワルド目がけて突っ込んでいく。それが直撃するかと思った瞬間、奴は幻影を残して消え去った。周囲を見回すと、数メートル横に移動している。
「笑わせる……そんな攻撃が通用すると思ったか？」
「それなら、これはどうだ！」
今度は五羽の火の鳥が現れ、オズワルドに突撃した。かわすのは至難の技だ。
「ふっ……」
彼が杖を一振りした途端、冷気の渦が発生して火の鳥を残らず消

し去った。これは強い。さすがに創造主だけのことはある。

生き残る者

オズワルドが杖を振り上げると、火の球が次々と現れて飛んできた。凄まじい速さだ。それらをかわすと、地面に激突して大爆発を起こした。爆炎と煙で視界が閉ざされる。

「くっ……」

テレポートして距離を取ろうとした瞬間、眼前に奴の姿があった。その杖がいつの間にか鎌に変わっている。

「ハッハー！　覚悟しな！」

その一撃をがっちりと受け止めると、彼はすかさず鎌を引いて薙ぎ払った。切っ先が俺の胸をかすめ、ブレザーが破れて血が流れ出る。こいつ、直接戦っても強いな。いよいよ侮れない。

そのとき、背後から女性の声が聞こえた。

「信一、がんばって！」

レベッカだ。よかった、無事だったんだな。これで心おきなく戦える。俺はオズワルドをにらみつけて叫んだ。

「死して屍、拾う者なし！」

同時に、彼に向かって疾走する。

真っ向から斬りつけたが受け流された。やはり一筋縄ではいかない。直後に、彼が頭上から鎌を振り下ろす。

「とあっ！」

素早く正確な一撃だった。並の人間ならあっさり両断されただろう。しかし、相手が悪かったとしか言いようがない。俺は身を翻してかわし、渾身の力で突きを放った。クリムゾンバスタードが彼の右肩を貫く。

「おのれっ！」

オズワルドは激昂し、連続で激しい斬撃を放った。その鎌が炎をまとい、燃え盛りながら襲ってくる。だが俺には通じない。クリムゾンバスタードですべてさばいている。

「くっ、この……！」
「オズワルド」
「なんだ！」
「お前の攻撃は見切ったよ」
「ふっ、生意気な。それならこれはどうだ！」
彼が鎌を一閃させた。俺は横に跳んでかわしている。なんだ、これがどうしたって言うんだ？
そのとき俺は驚愕した。オズワルドが斬った空間に穴が空いている。こ、これは一体？
「な、何……？」
「空間を斬ったんだよ、受け止めていたら真っ二つだったんだがな」
「く、くっ」
「創造主に逆らったことを後悔するがいい！」
冗談じゃない、死んでたまるか。俺は相原と一緒に帰るんだ！
オズワルドが再び鎌を振り上げた瞬間、クリムゾンバスタードが閃光と化して走った。俺は相手の肩から腰の辺りまで真っ二つに斬り裂き、横をすり抜けている。彼はたまらず悲鳴を上げた。
「うわあああああっ！」
一刀両断。
次の瞬間、彼は血飛沫を上げて地面に転がっていた。

普通なら即死しているはずなのに、オズワルドはまだ生きている。しかし、もうその命は尽きようとしていた。
「信、一……」
「なんだ？」
「俺は、新しい世界を創ろうとしたんだ。スリルに満ちた魅力的な世界を」
「そうか」
「どこで間違えてこうなったんだろうな……」
「人の心を失い、俺に喧嘩を売ってこうなったんだよ」

「ふっ……はっきり言いやがる……」
沈黙していると、彼はさらに続けた。
「後のことは、すべてパトリシアに引き継いである……転送は彼女に頼め……」
「わかった」
「あと、お前がよく言うセリフ……『死してなんちゃら』ってやつ」
「死して屍拾う者なし」
「それ、似合わないぞ。お前が死んだら屍は誰かしら拾ってくれるだろう。むしろ俺みたいな奴に……」
彼は目を閉じ、二度と動くことはなかった。
いつの間にか魔物の大群は消え去り、周囲には街の住民たちが集まってきている。やがてオズワルドの体は光輝き、天へと昇っていった。
「なんだよ、お前の屍は俺が拾うつもりだったのに。これじゃ拾えないだろ」
彼とはもう少し話してみたかった気がする。そうすればわかり合うこともできたんじゃないだろうか。今となっては遅い話だけど。
俺は彼が昇っていった空を、いつまでも見つめていた。

その後、俺たちはパトリシアに協力してもらい自分たちの国へと帰った。
オズワルドの創った世界は消えていない。ヘブンズ・ウォーリアのサイトも健在で、相変わらず激しい戦闘シーンがアップロードされている。ただ、現在はいつでも好きなときに帰れるというシステムに変わったらしい。
俺の部屋にはクリムゾンバスタードが飾ってある。もちろんこれは偽物だ。本物を持って帰ることはできなかったし、そんなものを持っていたら逮捕されてしまう。
もう一度本物を見てみたい気もするが、おそらく二度とお目にかかることはないだろう。

俺と一緒にあの世界を駆け抜けた、真紅のバスタードに。

《真紅のバスタード・完》

＞i１５４１２―１２７０＜

エピローグ

俺たちが日本へ帰ってから一年が経過した。
オズワルドの世界へ行って得たものと言えば、やはり相原だろう。前から友だち付き合いはしてたけど、それが彼女に昇格した。今では俺にべったりで、しょっちゅう家に遊びに来る。
そんなある日、俺のパソコンに一通のメールが送られてきた。現在あの世界を管理しているパトリシアからだ。
「信一さん、お久しぶりです。元気にしていらっしゃいますか？実は一つご相談が……」
そんな文面と共にいくつかの画像があった。アトラクションがあり観光客らしき人たちもいて、なんだか楽しそうな雰囲気だ。なんだろうと思って読み進めると、こんなことが書いてあった。
「実は、オズワルド様が創った国を巨大なテーマパークにしてしまいました。彼の意志に反することなのではないかと心配で……」
俺はそれを読んで噴き出してしまった。もし彼が生きていてこの事実を知ったらどうなるだろう。きっと、目を白黒させながら泡を噴くに違いない。
いや、案外素直に受け止めるかもしれないな。パトリシアだってオズワルドが作ったものなんだから、これはつまり彼の創造の結果なわけだ。おとなしい性格の彼女に管理を任せた以上、いずれこうなることは予想できただろうし。
俺はにこにこしながら返信しておいた。
「いいんじゃないかな？　彼もきっと喜んでると思うよ。ただ、スリルのあるアトラクションを作ってくれるとありがたいかな」
あいつは「スリルに満ちた世界を創りたい」って言ってたから、これくらいは必要だろう。
しばらくするとメールが返ってきた。
「ありがとうございます、そう言っていただけると嬉しいです。が

んばって管理しますので、ぜひ一度遊びに来てください」
ふーん、おもしろそうだ。明日は休みだし行ってみようか。
相原にメールしたら「予定があって行けない」という返事が返ってきたので、イザベルにメールしてみた。彼女は現在日本語を勉強しており、日常会話は問題なくできるそうだ。「今度日本へ遊びに行く」とも言っていた。元の世界に戻ってから一度も会ってなかったので、また会えるのが楽しみだ。
メールしてみると彼女から返事がきた。
「絶対行くよ！　また会えるなんて嬉しい！」

翌日、俺はオズワルドの世界へ行ってみた。
周囲には平原が広がり、例の街も見える。観覧車やジェットコースターがあるところを見ると、やはりテーマパークになったようだ。
街へ向かって歩いている途中、銀色の光の塊が飛んできて俺の前に舞い降りた。こいつはもしや。
「信一、久しぶり！」
そこには銀髪の悪魔が満面に笑みを浮かべて立っていた。ウェーブのかかったロングヘア、整った顔立ち、爆乳にほっそりしたウエスト、すらりとした体。着ているのは光沢のある黒いブラとパンツ、ロングブーツと長手袋だ。
「イザベル、会いたかったよ」
「私もだよ！」
彼女は抱き着いてきて、俺の耳元でささやいた。
「今日はみっちりデートしようね。彼女のことなんか忘れさせてあげるよ」
「え、えっ」
「それを期待して来たんでしょ？」
イザベルは俺と腕を組み、街へとつれていく。この後どうなるかは神のみぞ知る、といったところだ。（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7225o/

真紅のバスタード

2011年6月25日22時25分発行